

語勢を文字に寫すことは不可能であるから、記述には上記四種の様式を用ひて誤解をさけるやうにしたのであるが、口誦を其儘かきとめた歌謡に於ては標識の明白ならぬものがあるのは已むを得ぬ。ことに調をととのへる爲に語を顛置し、或は必然あるべき措辭をも略したものがあつた。例へば「妹のらんカ荒き島みを」(萬一)を「荒き島みを妹カ乗るらん」といひかへることも可能であり、「色かはり行くハうつろはんトヤ」といふ意を「うつろはんトヤ色かはり行く」(古今)と倒叙することもある。此等のいひ廻しを論據として後人の作製した所謂係り結びの法則が、古語は勿論、今の語にも當て嵌まらぬのは寧ろ當然である。之を要するに問の表現は昔も今も語勢によるか、或る種の助語を句末に添付するかの一語法より成るものと解釋すればよいのである。

疑ひのないことを問の形式を以て表示すれば反語となる。例へば「彼に劣らむヤ」は語の上からは劣ルダウカといふ問であるが、劣らぬといふ自信のある場合には反語的に優越を表現するのである。此は前後の事情と語勢とによつておのづから明になることで、別之を標識する語を用ひることはないが、語勢を強める爲にはカ又はヤにハを添へてカハ又はヤハといふことがある。例へば「色こそ見えね香ヤハかくるる」「かはるは人の心のみカハ」の如きは、「香かくれず」「かはり易い」は人心のみではないといふ意である。口語では「可愛いではナイカ」「さうでアラウカ」の如く、多くは打消又は未來格の問の形式を以て

反語

表現する。

敬語法 古語に於て一般的に敬語として用ひられたのはオホ(大)、ミ(御)のやうな美稱とマシ(坐)、メシ(召)、ヲシ(食)の如き少數の動詞のみであるが、世の降るに従うて此種の語が多くなり、ことに漢語が輸入せられてから、語自體に特に敬意が含まれて居るものが激増した。就中動詞はオ、オン、ゴ(御)といふ接頭語を冠し、若くは他の動詞を接着することによつて任意に敬語とすることが出来るやうになつたが、敬語専用の動詞は既記のレ(ラレ)(第一六四頁参照)とマシとがあるのみである。マシは不規則の上二段活で——打消の助動詞に連なる場合と命令法とにはマセを用ひる——狂言記などにも盛に用ひられて居る古い口語であるが、其語原は判明せぬ。マシ(坐)の轉義とする説と、マヲシ(申)の約とする説とがあるが、私は寧ろ後者に左袒する。其はマシ(坐)の如く、他人のことをいふに用ひられた例がないからである。例

有リマセン 有リマシタ 遊バシマセ
致シマス 願ヒマシヨウ 致シマスレバ

右の外助動詞的に用ひられるのは盡く原義の明白な動詞で、其意味をかりて敬意を表現するに過ぎぬ。此等の動詞は人の上をいふに用ひるものと、自分のことをいふものと區別することができる。左に自他にわけて列擧する。——上段と下段とは必しも匹偶をなすも

敬語法

敬語の自他

のではないが、略々其に近いものを對立させたのである。便宜のため終止形を用ひた。

他用

自用

- | | |
|---------------------------------------|-----------|
| マス(坐) | ハベル(侍) |
| マシマス(坐坐) | サブラフ(候) |
| オハス(御坐) | ゴザル(御坐) |
| メス(召) | アデル(上) |
| タマフ(給) | タマフ(賜) |
| 遊バス | ツカウマツル(仕) |
| ナサル(成サル) | イタス(致) |
| クダサル(下サル) | タテマツル(奉) |
| 入ラセラレル | マキル(參) |
| 仰セラレル | マラス(申) |
| いづれも四段に活用し、其決定格(命令法)は請願、勸告の意味に用ひられる。例 | |
| 還御マシマセ | 聞コシメセ |
| 御覽アソバセ | 治メタマヘ |
| 御出下サレ | 見ラレ(イ) |
| | 御聞ナサレ(イ) |
| | 行キマセ |

五助語

助語の性質

體言、用言に屬せぬ語は引くるめて之を助語と呼ぶを便とすることは總說中にも述べた通りであるが、助語の限界を定めることは困難な場合がある。例へば「方」といふ語は「東京へ」「遠くへ」の如く用ひる時はまぎれもない助語であるが、ユクへ(行方)、ヘツナミ(邊津波)のやうに用ひられた場合には方といふ原意が嚴存して居る。又ハカリは衡器、度量を意味する名詞に用ひられるのみならず、計量といふ意の動詞であるが、「玉の緒バカリ」などいふバカリと全然同一語である。發音によつて之を區別しようと試みた形跡もあつて、ハカリの如きは助語的に用ひられる場合には常にバカリと濁るのであるが、本質的に之を區分することは出来ぬ。ガリは既記の如く助語のガと接尾語のリの結びついた熟語であるが(第六九頁參照)、今では一個の助語と見なされて居るのである。其他「筆デかく」「其處デ見た」などいふデは遙に後代になつてから分詞形語分子のテが或る語に連つたものをつゞめて出來た語で、其變遷の徑路も明白であるが、之を一個の助語でないといふことは出来ぬ。其故に私は先づ助語の範圍をきめて置く必要があると思ふ。本編に於て助語と稱へる

定義

のは前項の助動詞と同一の條件を備へ、しかも活用することのない單語である。即ち

- 一、獨立しては意味をなさぬもの
- 二、常に被修飾語に續行するもの
- 三、單獨ではかかりに用ひられぬもの

助語は其性質に従つて三種に區別せねばならぬ。第一種はノ、ト、ニ、ヲのやうに先行語と後續語との關係を表示する爲に用ひられるもので、普通テニヲハと呼ばれて居る。此等の助語を目して特に格を表示する職能を備へて居るかのやうに説くものもあるが、後置詞は殆ど總て或る意味に於て格 (Case) を表示するもので、決して上記數語に限られて居らぬ。例へば「人ゾ見る」「人ハ見る」「人モ見ル」「人カラ見る」「人ヨリ見る」のゾ、ハ、モ、カラ、ヨリ等も「人」といふ主語の格を表示するものであるといひ得る。又「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるヲ雲のいづくに月やどるらん」といふ歌の「明けぬる」をヲでうけて居るからというて、目的格を表示したものとすることは出来まい。格といふ觀念のなかつた昔の人が格を表示する語を設けた筈もないから、格にあて嵌めて説かうとするのは無理である。然らばテニヲハといふ稱號はどうかといふに遣ひなれた語ではあるが、餘り限界が漠然として居て論理的説明の用語とするには不適當である。吾々の言ひあらはしたいと希望するのは或る種の助語が少しも意を加へることなしに單に先行語と後續語との相對關係

分類

標識助語

を表示するといふことであるから、私は假に之を標識助語とよぶことにする。

- (一) インドゲルマン諸語に於ても格の區分は一定して居らぬ。英語は三格(主格、所有格及目的格)であるが、獨逸語は之に與格を加へて四格とし、ギリシヤ語は五格、ラテン語は六格、サンスクリットは八格であるから、吾人は適從する所を知るに苦しむのである。

修飾助語

第二種はバカリ、サへ、マデの類で、總説にも述べた通り前續語を修飾する語であるから、之に修飾助語といふ名稱を與へることについては何人も異存があるまい。さりながらハ、モ、ソ、コソ等も亦之に屬すとすることについては不審をいだく人がないといへぬから、一言を費して置く。日本語の性質として無意義の語といふものは一つも存在を許さぬのであるが、上記の標識助語にあつては本來の語義は殆ど忘れられ、單に前後兩語の關係標識の用をするのみであるから、之を除いても意志の表示には變りはないが、ドウゾ、ヨウコソのゾ、コソを除いてドウ、ヨウというては其意を正解するものはあるまい。「雪の日や彼^アモ人の子樽ひろひ」といふ句からモをとつたら、詩趣は全然没却せられるであらう。ハは其條下に説くが如く單に強意的に用ひられることが多いから、之を省き去つても原意を傷はぬ場合があるけれども、モと對立する語であるから、此部類に置かねばならぬ。

第三種は語となるに至らぬ心の動きを發露する聲で、ナ(ナァ)、モ(モッ)、ヤ(ヤァ)、ヨ(ヨッ)の如く、他の語とは全然關係なく單獨でも用ひられるが、具體的の意義をなさぬも

感動助語

のである。此種の聲には咨嗟、愴惻、希望、感歎の情のこもつて居ることはいふまでもなく、言葉であらはずことの出来ぬやうな複雑な感じを示すことがあるから、引くるめて感動詞として片づけてしまふことは出来ぬ。私は其中他語と連ねて用ひられるものに感動助語といふ名稱を與へて、本章中で詳述することにした。

標識助語

此部類に屬する助語はノ、ガ、ヲ、ニ、ト、デの六語のみである。既記の如く日本語は原則としてか、かり、むすびの間に仲介語を必要とせず、「秋風」「風寒シ」といへば其だけで十分了解せられるのであるが、前後の兩語が相關聯して居ることを明示せねばならぬ場合にはノ又は其轉訛なるガを用ひて「秋ノ風」「風ノ寒シ」(又は「風ガ寒イ」というた。此ノ(ガ)は即ち先行語と後續語とを連繫するだけの任で、世の文法家の説くやうに所有格を示すものでも、主格を表示するものでもないのである。然るにむすびが動詞である場合には、其動作を行ふもの(主格)がか、かりであるか、ないかによつて意味に大なる相違がある。例へば「女」と「見ル」といふ二つの語を列べた場合、見ルものが女でないとする、其を標識する必要があることがある。之が爲に選ばれた語はニ、ト及ヲであつたが、精密な規定があつた譯ではないから、屢三者混用せられたことがあつた。さりながら大體に於ては今の語

概説

ニとトとの別の別

でいふ直接目的を標識するにはヲ、副位(補足格)に立つことを表示するにはニとトとを用ひ、ニは内面的(又は絶對)、トは外面的(又は相對)なることを表示した。例へば「夢ニ見ル」といへば夢の中に何かを見たこと(内面的)、「夢ト見ル」は或實在の事を夢と見なす意(外面的)である。又「人ニ語ル」といふ場合には必しも其人の存否を必要とせぬが(絶對)、「人ト語ル」といふ場合には相手の存在(假想的にても)を意味して居る(相對)のである。右の如き區別が當初から意識せられて居たことはニとトとの原義が之を證明して居る(各其條下参照)。

(一) 左に彼此相通の數例をあげる。

(記、若櫻宮) おほさかに逢ふやをとめヲ道とへば

(貫之集) 昨日今日見べき限りとまもりつる松と竹とヲ今ぞわかる、

此二例のヲは後世の意識からいへばニであらねばならぬ。

(萬、二) 古ニこふる鳥かもゆづる葉の三井の上よりなきわたりゆく

此歌の第一句は「古ヲ」の意であることはいふまでもない。

(萬、八) なとめ等がかさしの爲ニ、みやびながかつらのためト咲にける云々

此例のニとトとは同形式の表現に用ひてあるから、同一價值があるものと見なされて居たものと認めねばならぬ。

(二) 山田孝雄氏は夙に其著「日本文法講義」中に於て此差別を指摘した。語義の説明がないけれども卓見であるといはねばならぬ。

デは上記のやうに或る有意味の熟語を簡約したものであるが、今では其原義が忘れられ、直接名詞に連つてニ、トと同様に用ひられて居るから、此助語中に編入せねばならぬ。詳細は其條下に於て述べる。

ノ、ガ 原形はナであつたらうと思ふ。ナはナカ(中)の原語であるから(第三〇頁参照)、
 兩語の仲介を表示するに最適當した語である。ナ^ナの形に於て連繋の用に充てられた例も少くはない。矢にする木を矢ナ木(柳)、目の尻をマナヅリ(眦)、手の底をタナソコ(掌)といひ、アナタ(彼方)、コナタ(此方)、ソナタ(其方)、ヒナタ(日向)は彼ナ方、此ナ方、其ナ方、日ナ方——カタ(方)の原語がタであることは接尾語タの條下に述べた(第四六頁参照)——である。コナヤ(粉屋)、キナコ(黄粉)、タカナワ(高輪)の如きもコヤ、キコ、タカワでは紛れる虞があつたので、ナを挿入したのであらう。

(一) ナ行の音を繋辭に用ひるのは日本ばかりではない。マツナル語でも昔は連結語分子としてnを用ひたらしくez(上、於)を他語に連ぬるにezen, azenの形を用ひるのは其一證である。オナベ語では此場合にイン又はエンを用ひ、チャモロのナは全然日本語のナ即ちノと同様につかはれる。此語分子又は助語の分布を調べて見たら、面白い結果が得られることと思ふけれども、今は其暇をもたぬ。

ナがノになつたのは同行相通で怪しむに足らぬが、ガと轉化した事については其原因をナ^ナの原發音がnagaであつたことに歸せねばならぬ。ナには打消及感動を表示する場合も

ノ

原義

ガ(ノ)の
轉訛

あるから、之と區別する爲に特にrogaと發音せられたのか、或は古のナは盡くrogaであつたのか、今之を詳することが出来ぬ。さりながらrogaからガが生れたとすれば發音を異にしても全然同語であるべきであるが、慣用上多少の相違を生じたことは次々に説述する通りである。

用例

ノ(ガ)によつて連繋せられる語は體言、用言、助語いづれでも妨はない。即ち九つの異つた場合があり得る筈である。左に各の場合について若干の例を擧げて説明する。

- (一) 體言と體言。 梅ノ花、 梅ガ香、 波ノまにまに、 遙々ノ旅
- (二) 體言と用言。 葉ノ落る、 波ノ荒き、 花ガ咲く、 風ガ涼しい

此場合のノ又はガは從來係り詞のテニヲハと稱へられ連體形を以て句を結ぶことを約束とすると説明せられたが、其誤解なることは總説に述べた通りである。例中「おつる」「あらし」の如き連體形を用ひたのは此形が動格の一種であるが爲で(用言の項下参照)、歌詠に之を見ることが多いのは下に感動詞ヨ等を含ませているからである。文章に於ては「波ノあらし」「葉ノ落つ」といひ得ることは勿論で、「かくノ如し」とはいふけれども、決して「かくノ如き」と結ぶことはなす。

口語では此場合ノを用ひることは稀で、多くはガといひ、文語ならば其必要もない場合にも之を挿入する。例へば「風強く波高し」を「風ガ強く波ガ高し」といふのである。このガ

の用法は頗る朝鮮語のガ(音カ、主格を表現する助語)に似て居るから、之に影響せられたことも有り得る。

(三)體言と助語。 前の守も今ノも、 上ノと下ノとを取かへ
右のノは次に來る語を省略したのであるが——第一例に於ては「守」といふ語を補うて聞くべきである——斯の如く代名詞的に用ひられるのは尙ノの職能が然らしめるものであるといはねばならぬ。英語の mine 如きも「我のもの」といふ意味に用ひられる。

(四)用言と體言。 有ノすさび、 重きガ上

(五)用言と用言。 見るが如し、 なきガ悲し(き)

(六)用言と助語。 花ガ咲くノを、 紅葉ガあるノに、 色ガ美しいノで

文語には此用法はない。「咲くを」「あるに」「美しくして」(デは此場シテの約である)といへばよいのである。是によつてもノが單に連繫の助語であることが證明せられる。「行くノである」等のノも同様である。

(七)助語と體言。 大和へノ道、 今はノ身、 友よりノ文

(八)助語と用語。 我がノなり

(九)助語と助語。 今までノと此からノと

第八、第九例のノ(ガ)は代名詞的に用ひられたものである。ノが句と句とを連繫する例は

句の連繫

古歌にはめづらしくない。

(萬、五) 風まじり雨ふる夜ノ雨まじり雪ふる夜は

(萬、三) 天地にくやしきことノ世の中にくやしきことは

(古今) 空蟬の世の人ことの繁ければ忘れぬものノかれぬべらなり

右の諸例に於てもノは單に前後の兩句を繋いだだけで他に何等の意味はない。「ものノ」の「もの」は一種の助語で、「ものから」「ものを」の如く他の助語にも連ね、常に豫期に反する場合に用ひられるのである(「物」の意とし、或は「ものもの」といふ特別の助語なりとするは誤である。委しくは次目に述べる)。口語では第一、第二例のやうな用法は稀有であるが、「ものノ」とつづけた言葉は屢々使用せられる。例へば「さうはいふものノ氣の毒である」「買ひはしたもののノつかひ途がわからぬ」などといふのである。又次の句にもノを添付することがある。例

何ノかノというて、 酒だノ飯だノを馳走した

前續句が用言を以て終る場合にはノの代りにガを用ひることを例とする。

(源氏、桐壺) いとやんごとなき際にはあらぬガ、すぐれて時めき給ふありけり

(平家) 大物の浦より舟にて下られけるガ西の風烈しう吹きければ

甲もわるいガ乙もよくない

五、助 語

一九五

ガの接續
詞的用法

何遍も見たガいつも面白い

此用法は上古には見えぬが、中世以降盛に使用せられ、前後兩句が相反する意味を含む場合には恰もガに反接の職能があるかのやうに思はれることがある。例

年はとつたガ元氣だ。 彼はかういうたガ信じられぬ

之は勿論文意が然らしめたので、ガ其のものには連繫以外の意義はないのである。然るに後世之を誤解してガに「然れども」といふ意があるものとし、單獨またはダ、チャと連ねて句頭に置いて反接を表示するやうになつた。例

とても生きては居られぬ。ガ、考へて見ると

さうかも知れぬ。ダガ(チャガ)こちらにも理窟はある

又此ガの次に來る語句を省略して餘韻を残すことがある。例

よく見えるだらうガ、 そんな筈はないガ、 あの横着もの奴ガ

ノの用法の特例として次に來る一定の語を省く場合がある。例へば

(古今) 吉野川岩波高く水ノ早くぞ人を思ひそめてし

(古今) 夕月夜さすや岡べの松の葉ノいつもわかぬ戀もするかな

右の二首はいづれもノの下に「やうに」といふ意が含まれて居るのである。之はゴト(第一七七頁)同一の轉用であるが、口語では此語法は用ひられぬ。

句切のガ

ノの特別用法

ニ 原義及用例

附記。「暑いノ(ノッ)」「寒いノ(ノッ)」のノは感動助語ナの轉化である。(第二六二頁参照)

ニ 二の原義については古來區々の説があるが、私は上述のやうにナカ(中)の意のナから出たもので、ノ、ガと語原を同うすると信するのである。此語の職能はかかりが副位に立つことを示すのであるが、副位といふことの範圍は極めて廣く、文法用語をかりていへば或は自動詞の目的又は間接目的(與格)を表示し、或は修飾を掌り、或は目的の補足となることがある。例

落花雪ニまがふ(自動詞の目的)

人ニ物を與ふ(間接目的)

石を枕ニした(目的の補足)

都は海ニ近し(述語の修飾)

微細の差違を求めたら尙他にもあるであらうが、要するに原則は一つで、唯其用途によつて區々の現象を呈するのみである。

ニを以て表示する修飾語(句)は副詞又は副詞句と稱するものに該當する。例

淋しさニ宿を立出でながむれば

遙ニ花をながむ

私ニ考ふるニ然るべからず

副詞的用法

五、助 語

庭の面はまだ乾かぬニ夕立の空さりげなくすめる月かな

此例のニは前後互に抵觸する二つの事實を連結する接續詞のやうに見えるが、其は偶然の現象で、ニに反接の意味のないことは山田氏の説の通りである(日本文法講義第二四二頁)。但し同氏がこのニを接續助辭とよび、格を示すニから變化した別の語であるかのやうに説いて居るのは承服しかれる。

右の諸例について見るが如く、ニは體言及用言(連體形)に添付せられるのみならず、或る助語とも連るが、其によつて職能に變化を來すことはない。例

月と花とニ心をよせ

今來むといひしばかりニ長月の

心なき身ニも哀は知られけり

散る花のなくニしとまるものならば

近來此ニとへとを混同するものが多いけれども、へは後記の如く方向を示す修飾助語であるから、「海ニ近シ」を「海へ近シ」といふことは出來ぬ。次の二例を見ても其差別は明である。

(古今) 僧正遍照が許ニ奈良へまかりける時

(同) みちのくにへまかりける人ニ

ニとへと
の別

「山ニ行く」とも「山へ行く」ともいひ得るが、前者は行く先(目的)を示したもので、後者は山の方へ(歩み)行くことである。

ト
原義及用
例

ト ニと同じくか、かりが副位に立つことを標識する助語であるが、ニがナカ(中)の意なるに對し、ソト(外)といふ語から出たもので、ニとは内面的(絶對)と外面的(相對)との相違があるけれども、用法は甚よく似て居る。例

落花雪トまがふ(自動詞の目的)

人ト物を争ふ(間接目的)

石を枕トした(目的の補足)

都は海ト隔たる(述語の修飾)

此諸例を前記のニの例と比較したら、トとニとの相違は自ら判明するであらう。

トは相對を表現するから、「花ト月トいづれまされる」「君ト我ト共に見む」といふが如く、二者對立の場合に用ひられ、轉じては「及」といふ意味の助語とも見られるやうになつたのである。

ト
及の意の

(一) 此トをトモ(共、伴)の下略とすることの誤なるは勿論であるが、ト——トと重疊して始めて「及」の意義を生ずると見ることも亦當を得て居らぬ。必しもトを重複するを要せぬことは次の例を見ても明である。

(萬、十六) 玉簪かりこ鎌まろむろの木ト棗がもとをかきはかむため
 (萬、一) 霞打あられ松原住の江のおとひ少女ト見れどあかぬかも
 (萬、七) 佐保川の清き川原になく千鳥かはつト二つ忘れかれつも
 第一例は、むろの木及棗の意、第二例は「松原トをとめト」、第三例は「千鳥トかはつト」の意なることは勿論である。さりながら「兄ト弟の妻を見た」というては、「兄の妻並に弟の妻」の意か、或は「弟の妻及兄」の意か疑はしいから、前者の場合には「兄ト弟トの妻」といふ如くトを重ねるのである。されば「金ト銀」「國家ト國民」といふが如き表現は決して後のトを省略した譯ではないのである。

「ありトある人」「生きトし生けるもの」「秋風の吹きト吹きぬる」といふやうな語句中のトも亦「及」の意で、語を重ねて意を強めたに過ぎぬ。

トの特色は句切をうけることにある。トによつて次の語(句)につゞけられた句は一名詞と同様に取扱はれる。例

- (古今) 鏡山いざ立よりて見て行かむ「年へぬる身は老やしぬる」ト
- (同) 「春來」トいへば「花か」トぞ見る
- (同) 「我おちにき」ト人にかたるな
- 「早く行け」トいふ

「中におさめたのは本來完結した一句であるが、ここでは「いふ」「見る」「語る」とい

句をうけるト

ふ動詞の目的を形成して居るのである。「ありトは見えて逢はぬ君かな」「人にはなしト答へけり」「あり」「なし」も一語ではあるが之に准すべきものである。

(一) 西洋の文法ではこの種の句を名詞句 Noun clause といふ。従来トの此の特色を説明するに切れる語(終止形)を受けるといふた爲、甚しく初學者を惑はせた憾がある。トは終止形ばかりでなく、第三、第四例のやうに連體形、決定格(命令法)をも受けるのである。

場合によつてはトを次の語(句)の頭につけていふことがある。例

(古今) 日暮しのなきつるなべに日はくれぬ、ト思ふは山の影にぞありける。

右の用法から一轉して前句(語)を略して「トはいふもの」「ト(し)ても」「トもあれ」「トに(も)かくに(も)」「ト見かう見」「トあらむかゝらむ」といふやうな熟語が出来たのである。

上掲の諸例に散見するが如く、トはハ、ヲ、ノ、デ等の助語と連ねて用ひられることがあるけれども、之が爲に其職能に變化を來す事はない。然るにモと連ねたトモは「父トモ話した」「ありトモなしトモ聞える」といふが如き場合にはトにモの意義が加はつただけであるが、「淺くトモきよし」「波むトモ盡きざらん」といふ場合には反接の意味があらはれる。文法用語を以てさへば逆の歸結 Apodosis を導く前提句たることの表現となるのである。この例は古歌にも少くはない。左に其一、二を擧げる。

トモ

(記、神代卷) 泣かじとはなはいふトモ大和の一本すゝきうなぶかし汝がなかさまく

(古今) 今日來ずば明日は雪とぞ降りなまし消えずはありトモ花と見ましや

(古今) 花の色は霞にこめて見せずトモ香をだにぬすめ春の山風

右の如くトモにトと異つた職能を生じた原因は寧ろモにある。抑もモは次目に記述するやうに、「亦」の外に「尙」といふ意味を含む語であるが、直接句切を受けることが出来ぬから、トの中介を必要とするのである。其證據には「汲むトモ盡きざらん」を「汲むモ盡きざらん」、「汲みテモつきざらん」、「汲むと(し)てモ盡きざらん」ともいひ得る。然るに往々モを略してトのみを以て反接の場合に充當するものがあるが、正しい用法でないことは勿論である。

(一) 書記允恭天皇御製に「あまたはれずト唯一夜のみ」とあるは——トはニの誤といふ説もあるが——「數多の夜れずトモの意ではなく、「れずシテ」といふことである。テがトと語原を同うけることは既述の通りである。

トモが用言の決定格に連る場合には、音便によつてトを濁り「⁽¹⁾ヘドモ」「行けドモ」「よけれドモ」といひ、或は之を促めてド一音となし「⁽²⁾ヘド」「行けド」「よけれド」ともいひ得る。

(二) トモが上例のやうに動詞の動格又は形容詞の分詞形につく場合には未然のことを前提とするのであるが、決定格をうける場合には前提句は既定事項から出發するのである(用言の項下参照)。

トモ、ド

(二) ドは夙に上代に存した形で、記紀萬葉等の古歌にも用ひられて居るので、トモの約であると氣づいたものがないやうであるが、二音を一音に約し之を濁ることは日本語の通則である。シテ、モテ等を約してテとするが如きも其一例である。

左にドモ及ドが反接の意を示す一二例を擧げる。

(古今) 音になきてひじにしかドモ春雨に濡にし袖と問はば答へむ

(古今) 忍ぶれド色に出にけり我こひはものや思ふと人のとふまで

ヲの職能が直接目的を標識するものであることは既述の通りであるが、何故にヲが之に選ばれたかは不明である。ノとナとが同語から分れたやうに、ヲも亦トと關係があるのではあるまいか——トの同列變化又はヲチ(遠)のヲ——とも考へられるが、確證を擧げ得ぬ。

ヲの普通の用法は極めて明白で説明の必要もない。但しヲがなくとも目的格たることが明白な場合には之を使用せぬ方が普通である。例へば「油かひに酔かひに」は「油ヲ買ひに酔ヲ買ひに」の意なる事はいふまでもなく、「酒のみ煙草もすふ」は「酒ヲも飯み煙草ヲも吸ふ」といふことである。「風寒み」「身はすてつ」のやうな語法をさしてヲを省略したものといふても差支はないが、必要がないから挿入せられなかつたと解する方が妥當である。ヲがニに代用せらるることは既に述べた通りであるが、尙二三例を擧げて説明を補ふ。

ニの意味
のヲ

(古今) 花の色は雪にまじりて見えずとも香ヲだに匂へ人の知るべく
 (古今) 夏の夜はまだ宵ながら明ぬるヲ雲のいづこに月やどるらん
 (土佐日記) いつしかみ崎といふ所わたらむと思ふヲ波風ともにやむべくもあらず
 後の二例のヲは文語に屢々あらはれるので、ヲに甲乙兩句を連繋する職能があるかのやうに説くものがあるが、理由のないことで、單にニに代用せられたものと解釋すればよい。其證據には口語では此場合に「夜があけたのニ」「思ふのニ」といふが如く、ニを用ひるのである。

(一) 此ヲを「ものヲ」の略語又は同義と見るものがあるが、「ものヲ」は上記の如く、「もの」に反接の意味があるのであるから(次目モの條下参照)、ヲのみを以て之を代表させる事は不可能である。ノニのノは單に連繋の爲に挿入したのである。

右の外ヲの用例中特異なものを擧ぐれば、第一はモに代用せられたと思はれるものである。例

- (萬、九) 朝入する人とヲ見ませ
- (古今) 萩の花散るらん小野の露霜にぬれてヲ行かむ小夜はふくとも
- (古今) 君があたり見つゝヲ居らむ生駒山雲なかくしそ雨はふるとも
- (古今) 人はいざ我はなき名の惜しければ昔も今も知らずとヲいはむ

ヲの特種用例

ヨ、ヲ相通

此諸例のヲはモとすればよく會得せられる。第三の例歌は萬葉集には明に「君之當見乍母將居」と出て居る。又

(古今) 秋の菊にほふかぎりはかさしてむ花より先と知らね我身ヲ
 といふ歌のヲは從來の解釋のやうに「なるヲ」の略としても一わたりは聞えるが、仔細に稽へて見ると、理にあはぬやうである。恐らくはモの意であらう。

ヨに代用せられた例も少くはない。

(萬、十) 渡守舟わたせヲとよぶ聲の

(古今) 獨のみながむるよりは女郎花わが住む宿に植えて見ましヲ

後の歌のヲを「ものヲ」と同義と見て、「植えて見ようものを」の意と説くものもあるかも知れぬが、感動助語のヨとせば一層適切である。

「從」といふ意味のヨもヲと彼此通用した。例

(記、日代宮) 濱つ千鳥、濱ヨはゆかず、いそづたふ

家ヲ離れ國ヲ出づ

前例のヨは後世ならばヲバといふべき所である。又後例のヲも上代ならばヨというただらうと思ふ。「野ヲ行き山ヲ上る」は「野ニ行き山ニ上る」とは少しく意味を異にし、山野跋涉をいふのである。萬葉集には此場合多くは「從」(ヨ又はユと訓む)の字が用ひてある。

テ

轉成の徑路

テは他の助語の上にも下にも連なるが、其が爲に上記の職能に變化を來すことはない。
テ 此語は既述の如く用言の活用を助けるテといふ語から二次的變化によつて轉成したものであるが、口語では純然たる標識助語として用ひられて居るから、茲に収録することにした。

動詞の原形にテを連ねたものは既述の通り過去分詞形として活用の基礎となることの外に、其儘名詞としても、或は副詞(句)としてもつかはれることがある。例

見テのかへり、日くれテ道遠し、絹は軟かにしテ光澤あり

此場合のテからテニヲハといふ語もおこり、文法家中にも之を助語なりと説くものを生じたのであるが、分詞が副詞的に用ひられることは形容動詞にもある例で(「高ク聳え」の如く)、テの有無にはよらぬから、之を以てテが助語であるといふ論據にすることは出来ぬ。さりながらアリテ、シテ、イヒテの如き頻々使用せられる分詞にあつてはアリ、シ、イヒ等を省略し、テを直接上位の助語又は語尾と結びつけて用ひるやうになつた。即ち

トテ。 トシテ、トイヒテ、ト思ヒテ等の略。例

さればトテ(トイヒテ)、君が代をいはふトテ(トシテ)

ニテ。 ニシテ、ニアリテ、ニヨリテ等の略。例

空さへくもり勝ニテ(ニシテ)、鄙ニテ(ニアリテ)はめづらしく、綽名ニテ(ニヨ

リテ)呼ぶ

クテ。 形容動詞の分詞語尾クにシテを連ねたるもの。例

かくテ(かくシテ)、色いと濃くテ(こくシテ)

モテ。モチテの略。例

弓矢モチ射とめたり

右の中ニテ、モチは既に鎌倉時代から口語ではデと稱へられ、直接名詞に連ねて用ひられるやうになつた。

(一) 大槻氏の「口語法別記」によると鎌倉室町時代には次のやうな用例が見える。

(平家物語一、妓王のこと) おなじあそび女とならば、たれもみなあのやうテこそありたけれ

(同) こんじやうテ物をおもはするだにあるな

(同四、競の事) 鷹の羽テはいたりけるまと矢一手ぞさしそへたる

(狂言記、釣狐) まづ御息災テめでたうこそあれ

(同、醉薑) 皆墨繪デかいてある

但し大槻氏は第一、第四例のテは「花テある」「二つ宛テよい」のテと同じく、ダといふ動詞語尾の一活用であると説いたが、自分でも疑を存して居るやうに、ダといふ語はテより後に出來たものであるから、其變化とはいはれぬ。之をニテ即ちニシテ等の約とするも何等の故障がないのである。「花の都テある」といふ語は「都ニシテある」と意を異にするとおもふものがあるかも知れぬが、萬葉集第一卷「これやこの大和ニシテは我戀ふる木路にありちふ名にあふせの山」といふ歌の

助語の職能

「大和ニシテは」は現代語ならば「大和では」といふ意である。デを獨立した助語と見れば前續語がサンスクリットの八格中の方位格 (Locative) 及方便格 (Instrumentalis) にあたることを標識するものといひ得る。例

鄙デは稀な美人、筆デかく、弓矢デ射る

さりながら右はアリ(有)、ヨリ、モチ(持)といふ省略せられた語に其意がある爲である。即ち「空さへ曇り勝デ」は「曇り勝ニシテ」の意であることはいふまでもない。又シテを略してデとする場合もある。例

獨デ(シテ)かせいだ、三人デ(シテ)わける。

トの轉訛

上記と全く系統を異にするものに「さうデす」「私デす」のやうにつかはれるデがある。現代の標準語には盛に用ひられ、狂言記の中にも「かくれもない大名デす」などと使つて居る例もあつて、起原も可なり古いやうであるが、京都ではドスといひ、大阪以西ではダスともいふから、標識助語のトを訛つたものであらうと思はれる。即ち「さうデす」は「然トす」「私デす」は「我トす」といふことで、「さうデおます」「さうデございます」のデも同様である。「見るのデある」「行くのデある」も「見るのトある」「行くのトある」の義ではあるまいか。此語法は用言の項下(第一四〇頁)にも述べたやうに、古語の「見るなり」「行くなり」「見るノ、アリ」「行くノ、アリ」の約(に)にあたるものであるから、トを以て「見るノ」「行くノ」を受けたものと解することは無理ではあるまい。

ノ」を受けたものと解することは無理ではあるまい。

デはモとつづけてデモと用ひられることがあるが、兩語共に原意を失はぬから、別個の助語と見なすべきものではない。然るに口語では「デモ餘りだ」といふやうに連鎖として句頭に用ひることがある。之は「デハ御免蒙ります」などいふデハと同様に、先行すべき「其」といふ語を省略したのである。但し「死んデモ忘れぬ」のデモはテモの音便で「死ニテモ忘れぬ」といふ意である。

修飾助語

ハ、バ ハの原意は「秀」即ち「卓出」といふことで、葉、穗、初、太、最手、上枝ホツツキなどと同源から出た語である。助語としては強意的(Intensive)又は特に事物を擧示するに用ひられ、次のモの相対的なるに反し絶對的である。例へば「私ハいやだ」といへば、他人はともかくも自身一個斷じて欲せざることをいふのであるが、「私モいやだ」といふ場合には「他の人と同じく」といふ意味が含まれて居る。此職能は古も今も少しも變りはないのである。

(一) 本文のやうにハは名詞の格とは何等の關係もない語である。然るに「其ハ」「此ハ」といふやうに主語に連れられる場合が多いために、主格を表現する助語のやうに信じて居るものもあるが、主格以外の名詞にも接続するのである。例
さみだれハ見えし小篠の跡もなし(五月雨ニハの意)

テモ、デ

ハの原義

身ハすてつ心をだにもばふらさし(身ヲ棄てつといふに同じ)
又從來之を係り詞と稱へて句を終止する動詞と照應するもの、やうに説くものもあるが、係り結
びの法則の存せぬことは屢述べた通りで、ハは次々に記述するやうに句切にも連鎖にも用ひられ
るのである。

ハは音便によつて濁音となる。即ちヲに連ねた場合にはヲバといひ、用言の未來分詞及
決定格に連なつた場合にも「行かバ」「ゆけバ」「よくバ」「よけれバ」といふが如く之を濁
る。又バを以て用言をうける場合には其前續句は後續句の前提たることを表現し、未來分
詞につづくものは假設前提を、決定格にあつては現實前提をなすものである。例

今行かバよからん、 此道を行けバ川に出る、 あはよくバ一儲せん、 品がよけれ
バ値が高い

さりながら此關係はバを添付した爲に發生したのではなく、用言の此形が自ら其意味を
備へて居り、ハは單に其意を強めるに過ぎぬ。清濁によつてハの職能が變つて來ると思ふ
のは大なる誤りである。

(一) 其證據には古歌にはバを連ねぬ例がすくなくない。

(萬、五) 遠き境につかはされ、まかりいませ、うな原の……見渡したまひ

(萬、一) いにしへもしかなれこそ空蟬もつまをあらそふらしき

(古今) 里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる

ネバ

右の三首共に△印の次にバを加へて聞けばよくわかる。口語でも「行くならバ」を「行くなら」「よ
けれバ」を「よけれア」といふのである。

極めて稀な例ではあるが、古歌の中には「ね(打消)バ」とつづけて反接の意を表現するこ
とがある。古事記八千矛神の歌の「おすひをもいまだとかネバ、をとめのなすや板戸を云
々」、萬葉集五卷の「いくだもあらネバ手束つゑ腰にたがねて」の如きは其である。從來又
ニと同義なりというただけで其理由を示して居らぬが、ヌニをネバと訛る筈はない。案ず
るにバは意を強めたゞけで意味に變更を加へず、單に「いまだとかね」「いくだもあらね」
といふと同義であらう。此場合のネは「人こそ知らネかはくまもなし」と同様の反接語法で
ある。

句切のハ

ハは句切にも用ひられる。「げに面白かりけるハ」「風あらくしく吹きたるハ」の如き
は其例で、感動の意をふくむものであるが、上代の歌文には常にヤ又はモと共に用ひて居
る。例

(記、日代宮) さねざし相模サガムのをぬにもゆる火のほ中に立てとひし君ハモ

(同) あづまハヤ

現代の婦人の用ひる語に「さうですハ」「いやだハ(ヨ)」などいふのは此用法である。ハ
ヤは又動詞の未來分詞に連ねて見バヤ、行かバヤのやうにも用ひられる。此場合には希望

の意を表現するものであるが、希望の意義を生ずるのは見(む)、行か(む)といふ未來格にバヤが加はつて語勢を強め、且感動の意を添へた爲である。

右の外ハは他の助語と上下に連ることが多いが、之によつて原義を失ふことはない。唯カ、ヤと連ねたカハ、ヤハが反語の表示となる場合の多いことは既に用言の項下に述べた通りである。

口語では此ハは私ワ、彼ワといふやうにワと發音せられる(發音の項下参照)。

モ モロ(諸)、モコ、ムタ(共)、マタ(亦)と語原、語義を同うし、上述のやうにハが卓出絶對を意味するに對し、他に匹儔、對比すべきものがあることを表示する助語である。例

(六帖) をと年モ去年モことしモをとつ日モ昨日モけふモ我こふる君

(古今) 君が名モ我名モたてじ難波なるみつとモいふな逢ひきとモいはじ

(同) 君ならで誰にか見せむ梅の花色をモ香をモ知る人ぞしる

右の諸例のモは盡く對比事物を明示して居るけれども、其が言明せられぬ場合も少くない。例

(古今) 秋の夜モ名のみなりけり逢ふといへばことぞともなく明ぬるものを

(同) 戀しくば見てモ忍ばんもみぢ葉を吹きな散らしそ山おろしの風

「秋の夜」は恐らくは明けやすい夏の夜にたぐへたのであらう。「紅葉を見てモ忍ばん」と

モ 原義及用例

「戀しい人にあはずとも」といふ心を言外に含めたのである。

(一) 此等の場合にはモの意義は嚴重ではないから、「秋の夜モ」のモをハにかへ、或は「見て忍ばん」としても文意には大なる影響を及ぼさぬのである。後世、この種のモが濫用せられ、ことに歌詠にあつては五七の字數を補ふためにあるべからざる所にモを挿入する嫌がある。

さりながら一定の對比事物のない場合にも此助語を用ひることがある。例へば「櫻かさしてけふモくらしつ」「われてモ末に逢はんとぞおもふ」の如きは必しも「他日」又は「完全」といふ意味の語に對立するものではない。前者は「今日モ亦」、後者は「われてモ尙」といふ意である。亦は俗にモマタと稱へられる位で、モに該當することは誰でも知つて居るが、ナホ(尙)と譯すべき場合があることは氣づかぬ人が多いやうであるから、更に二三例を擧げる。

(古今) 我見てモ(尙)久しくなりぬ住江のきしの姫松いく世へぬらむ

(百人一首) 千早ふる神代モ(尙)きかず立田川から紅に水くゞるとは

今行くモ(尙)おそかるまじ

モに尙の意義を含む場合があることは上例によつて明白であるが、むすびがモを以て受けるか、と扨格する場合にはことに其意味が顯著である。「其でモかまはぬ」「波みてモつきぬ」「心につゞむとモ色にあらはる」といふ場合のモは決して「亦」の義ではない。後

亦と尙

の例のトモの如きは(音便によつてド又はドモとなり)之が爲に反接の助語と見られるやうになつたのである。

(一) 尙の字はナホ(「直會」等の語幹で、「復」といふ意がある)の外にマダともよむ。マダとマタとは字の示す如く本來同一の語で、「復」の義から出たものであるが、兩者の意義が慣用上遠ざかるに及び、一方に濁音を與へて區別したのである。

イマダ(未)といふ語も此マダから出たのではないかと思はれる。

モノノ、モノヲ、モノカラ、モノ故等はいづれも豫期に反することを表現する爲に用ひられるのであるが、ノ、ヲ、カラ、ユエに其意のないことは明白で、且古歌にはモノとのみ用ひた例もあるから、モノに其意義があるとせねばならぬ。即ち物、者の外にモノといふ助語が上代に存在して居たのである。此語は恐らくは上述「尙」の意のモから出たもので、句切に用ひる場合體言の形にする爲にノをそへたのであらう(修飾助語のモは句切に用ひることが出来ぬ)。中世以降このモノは單獨で用ひられぬやうになつたので、原義が忘れられたのである。

(二) モノとのみ用ひた例は少くない。左に二三を擧げる

(古事記下卷) たちびぬに寝むと知りせばたつごも持ちて來ましモノねむとしりせば

(萬葉四) わがもたる三相ミツサヒによれる絲もちてつけてましモノ今ぞくやしき

(萬葉五) 天とぶや雁にもがもや都までおくりまをしてとびかへるモノ

カ 語原

右の外に感動を表現するモがあるが、次目に於て之を記述する。

カ カに疑の意を含むものと感動を表示するものとがあるといふことは定説であるのみならず、不定代名詞カ(第九〇頁参照)が疑の助語に轉用せられたと見ることは極めて妥當で、韓語に於てもカ(ガ)は疑問助語である。カリ(假)といふ語も之から分派せられたのであらう。文語に於ては用法が甚類似して居るので、之を辨別し得ぬ場合がある。——口語では感動のカが殆ど用ひられぬのみならず、假に之を用ひるとしても、語勢を以て區別する事が容易である。——例へば「我せこはいづく行くらむ沖つ藻のなばりの山を今日カ越ゆらむ」(萬、一)といふ歌のカの如きは疑の意にも感動の意にもとることが出来る。少くとも古い歌には感動の意で用ひられたカの方が多のである。或は用言の項下に述べたヤと同様に(第一八一頁参照)、本初は感動のカが語勢によつて疑を表示するに用ひられて居たのが、漢字の歟、耶、乎等に充てられたカと混同せられたのではあるまいか。其はともかくも明に疑の意味に用ひられた例は次の如きものである。

(萬、四) うま酒を三輪の祝イハヒがいはふ杉手ぶりし罪カ君に逢ひがたき

(古今) 世の中は何カ常なるあすか川昨日のふちも今日は瀬になる

(萬、十) 秋萩は雁にあはじといへればカ聲を聞きては花にちりぬる

(拾遺) 水の面にやどれる月ののどけきはなみ居て人のねぬ夜なればカ

疑の意の
カの用例

「罪」「何」「いへれば」「なれば」の如くカに連る語が名詞形であることは注意すべきである。雲カ山カ吳カ越カのやうに名詞に直續して疑を表示することはヤには決してあり得ぬことである。又タレ(誰)、ナニ(何)、イク(幾)等が句中に存在することによつて疑の意が強くなるのは當然で、「何事をカしめし合はせ」「誰カと一緒に」といふやうに今でも用ひられる語法である。

トカ、ト
カヤ

トを以てうけた句を一個の名詞形と見て、之にカを連ねて疑を表示することも勿論違法ではないが、古い歌文には見えぬ。後世の歌には

(後、八) 物思ふと過ぐる月日も知らぬ間に今年も今日にはてぬトカ聞く

(新古今) 世をそむく所トカ聞く奥山はもの思ふにぞ入るべかりける

トカといふ語は口語でも「何トカいふ人」のやうに用ひられて居る。此トカに更にヤを添へたトカヤも後世の歌文には用ひられた。例

(拾遺) 何トカヤくさの姿はおもほえてあやしく花の名こそ忘るれ

口語では又カを重複して二つ以上の事物中のいづれかといふ意味に用ひる。例

米カ麥カ粟カを常食とする

麥酒カ茶カが欲しい

後のカは省略せられて「米カ麥カ粟」「麥酒カ茶」といふこともある。

問を表示
するカ

カを句切に用ひることによつて問を構成することも上代から行はれて居た。例

(記、日代宮) 新はり筑波を過ぎて幾夜カ寝つる

(萬、十二) 玉かつま逢はむといふは誰なるカ逢へる時さへ面隠りする

(伊勢) 白玉カ何ぞと人のとひしとき露と答へて消なましものを

第一例の如き場合、従來カは係り、ベキ、アル等は之に照應する結びと説かれて居るが、用言の項下にも述べた通り、問を表示する助語は原則として句末に置かるべきもので、「幾夜カ寝つる」は「寝つるは幾夜カ」といふべきを倒叙したものである。語間にカを挿入する事によつて問を表現せんとするのは本來不自然なことで、口語では決して用ひられぬのである。文語に屢用ひられる「如何なる事ヲカ努むべき」「何處ニカある」の如きもカを下へ廻して聞くか、若くは句末に今一つカを添付すべきものである。

カにモ又はハを添へたカモ、カハも上記のカと同様に用ひられる。例

(萬、三) 妹も我も一つなれカモ三河なる二見の道ゆ別れかねつる

(古今) 花毎にあかず散らしし風なればいくそばく我うしとカハ思ふ

此モ、ハはカに接着することによりて別義を生ずることはなく、其本義を保有して居るのである。「さうカモ知れぬ」といふカモは之に屬する。——別に感動を意味するカモがあることは次目に述べる通りである。

カモ、カ
ハ

反語

カ(カモ、カハ)を添付した疑問形式が疑のない事をいふに用ひられた場合には反語となることは既述の通りである。カハが最多く反語に用ひられるのは特に語勢が強められるからである。

ソ、シ ソは代名詞シ又はソ(其)から轉義した助語で、上代には清音を用ひたと見え、古事記には「會」の字をあてたものが多い——濁る場合には多くは「叙」の字が用ひられて居る。例

(記、神代卷) タカヒコネの神會也

(同、白檮原宮) 風ふかむと會木の葉さやげる

(同、明宮) こゝに思ひでいきらす會くる

後世でも「いくッ」「いくッたび」等のソはゾと同語であるにも拘らず、清みて發音するのである。

助語としてのソは其と指定める意を含み、事物の不定なることを表示するカと對立し、其用法も頗る類似して居る。ことに疑問代名詞に連ねて用ひられる場合の如きは全然趣を同する。

用法

ソの用法は句末に置いて斷定の意を示すか、若くは語中に挿みて前續語を確説することにある。例へば「残りなく散るゾ」といひ切るか、或は「残りなく散るゾめでたき」といふや

うに他の語を以て結ぶのである。後者は「残りなく散る、其がめでたき(ことよ)」といふ意味で、通例コトヨ(又はヨ)といふ語尾を省略するから、此場合に限り特に連體形を終止に用ひることを要するものと誤解せられて、所謂係り結びの法則なるものが案出せられたのである。

(註) ソがニ、ナの如き助語と連る場合には常に下位を占めることを通則とするが、古はソニの如く用ひたのではないかと思はれる。例へば「花と見えしは雲にゾありける」は「雲に其あり」とも解釋せられるが、「雲其に、あり」即ち「雲其なり」とする方が自然である。此説奇怪なるに似たれど、コソについても類例がある。古事記の建内宿禰の歌に「まコソニとひたまへ」とあり、又輕太子の歌にも「ありといはばコソニ家にもゆかめ」とある。後代の語でいへば前のは「げニコソ」、後のは「いふニコソ」であらねばならぬが、古は逆にコソニともいうたのである。

現代の口語では第二の用法は全く廢たれ句切にのみ用ひられる。例
是ゾといふ取柄もない、其はおかしいゾ、 また來るゾ、

右の中用言を承けるゾはゼと訛ることがある。即ち後の二例は「其はおかしいゼ」「また來るゼ」ともいふのである。方言ではゾヨ又はゾイといふこともある。

ゾはカと同様にタレ(誰)、ナニ(何)、イク(幾)の如き疑問代名詞と直接又は間接に連用せられることがある。此場合カとゾとの相違は前者が徹頭徹尾疑又は不定の意を表現するに反し、後者は疑の中にも何物かを指定しようとする意を含むことにある。——口語では殆

ゾとカとの對立

ど之を區別する事が出来ぬ。——此連結によつて出来た語句が間を意味するものと、然らざる場合とに別れることも亦カと同様である。例

いかばかり吹く峯の嵐ゾ (間)

何事ゾ花見る人の長がたな (間)

其處に居るのは誰ゾ (誰カといふに同じい)

誰ゾ来てくれ(不定) (誰カといふに同じい)

何ゾ欲しい(不定) (何カといふに同じい)

口語の「どうぞ」は此語法を轉用したものである。又「孰ゾ知らん」の如く反語にも用ひられることがあるが、其は用言の語法の條下に記述して置いた。

附記。「な言ひッ」「雨な降りッれ」「夢に見え、ソ」のソも亦同語であるらしいが、動詞のやうに活用せられること上述の通りである(第一六六頁参照)。又ナン(ナモ)をゾと同意味の助語なりとする説の誤なることは次に記述する。

シは從來語勢を強める爲の間投詞(やすめ辭)とせられたが、其語原も、何が故に然るかといふことも説明されなかつた。此語は平安朝以後口語は勿論文語にも用ひられず、唯歌詞及熟語に跡を留めたに過ぎぬが、萬葉集には盛につかはれて居て用法も遙に自在であつた。日本語には全然無意味の語といふものがないから、此語にも本初は一定の意義があつ

シ

原義及用法

て上代人は之を意識して使用したものと思はれる。萬葉集に見えた用例について推究すると、シの原語はゾと同じくシ(其)で、「其」「其もの」「其こと」「其自身」等英語の代名詞 self のやうに用ひられたものゝやうである。例

(萬、一) 秋の野のみ草かりふき宿れりしうぢの都カライホの借五百シおもほゆ

(同、四) 夜のほどろ吾出て來れば吾妹子がおもへりしくシ面影に見ゆ

(同、一) 天の下に國はシモ澤にあれども

(同、八) 橋の花ちる里のほととぎす片こひしつゝなく日シぞおほき

最後の例のシゾはシ(其)といふ語が重複するやうに見えるが、後のゾは既に全く助語化したものと見れば差支はない。——コソも原義によれば「此其」であるが、二次的に複合したのである(次號参照)——シモはモの意義がマタ(亦)なるか、ナホ(尙)なるかによつて多少表現を異にする。後者の場合には「時シモあれ」「折シモあれ」のやうに反語的氣分があらはれるのである。

然るに次の諸例ではシは寧ろ助語のゾに通ずるものと思はれる——但し句切に用ひられた例はない。——是によつてもシとゾとが同一語から出たことが立證せられるのである。

(記、神代卷) はたたぎもコシよろし

(萬、三) さかしらと物いはむゆは酒のみて酔泣するシまさりたるらし

五、助 語

二二二

ゾに通ずるシ

附記。熟語として口語にもつかはれる「いつシカ」又は「いつシカモ」といふ語は「いつソ」に感動のカ又はカモを連ねたものである。その外に「何時カ」と疑ふ意味にも、「いつ(の間)にやら」といふ不定の意味にも用ひられるのである。例

(後選) 松もひき若菜もつまずなりぬるをいつシカ櫻はやもさかなん

(六帖) いつシカモけふはくらしつ明日香川わたりて早く玉藻かつがん

第一の歌は「何時カ咲く、さくら云々」といひかけたもので、第二の歌は「いつの間にやら」の意である。

此外に「かくシこそ」「うべシこそ」のやうに「シコソ」と重ねて用ひた例があるが、其はコソの意を強めたに過ぎない。古今集以下には明にシ又はシモを間投詞的に用ひた例もあり、又シモとソ又はコソを重ねたシモゾ、シモコソといふ複合助語を用ひるやうになつたが、範とすべき語法ではない。

口語では此助語をつかふことは絶無であるが、尙「えにシ」(縁)、「はてシ」(盡)等の熟語に其名残を止めて居る。俗語に用ひる次の例中のシは恐らくは助動詞シ(爲)から轉じたものであらう。

見もしたシ、聞きもしたシ
風はさむいシ、雨はふるシ

ジ

三日月さんではあるまいシ

右の外、遠シ、悲シなどいふ接尾語もこの助語と同義であらうと思はれることは其項下に述べた通りである(第四三頁参照)。

シは又音便によつてジとも發音することがある。例

我ジク。「我其人」、即ち我等自身の意。

時ジク。「時其時」、即ち時々又は隨時の意。

非時の二字をあてたのは正譯ではない。

續紀第二十二詔「又此家自久毛藤原乃卿等乎……家奈利」とある「家ジク」も「家其もの」といふ意である。男ジもの、犬ジもの、鳥ジもの、馬ジもの、露ジものは、男(犬、鳥、馬、露)そのもの、又は男(犬、鳥、馬、露)のやうなものゝ意で他にも此用例は少くはない。萬葉集三卷「久方の天傳ひ來る白雪仕物ゆきかよひつ」とあるのも「雪其もの」といふ意である。

コソ 「是ぞ」の義である。原意を離れて指定の助語となつたゾにコ(此)といふ代名詞を冠した複合助語で、強く指定する意がある。例

(記、神代卷) 今コソハ千どりにあらめ

(萬、二) 秋山の木の下がくり行く水の吾コソまさらめおもほさんよは

(古今) 思へども人目つゝみのたかければ川と見ながら得コソ渡らね

コソ
法語義及用

右の例によつて見るが如くコソと關聯する用言は多くは決定格を用ひる。此は決して法則でも約束でもないが、コソと強く指定するやうな場合には動作、状態が決定的のものであるのが當然なるが故である。さればコソに對して決定格を用ひぬ場合も少くはないのである。例

(萬、十一) わだの原沖を深めておふる藻のとも今コソ戀はすべなき[△]

(同) 難波人あし火たくやのすしてあれどおのが妻コソ常めづらしき[△]

(一) 決定格は邦語最古の時格で動作、状態の決定せることを示すものであるから、古歌にはコソがなくとも之を用ひた例は極めて多い。

(記、神代卷) よげひにありかよはせ[△]

(萬、三) 見えすとも孰不戀有米山のはにいざよふ月をよそに見てしか

(萬、七) 我せこをいつく行かめとさき竹のそがひに寐しく今しくやしも

「時しもあれ」「折しもあれ」「さああらばあれ」の如きも其例である。

コソはゾ、カのやうに句の結びに用ひられることはない。句末にあるコソは次の例のやうに結びの語を略したのである。

(古今) 津の國のなには思はず山城のとはに逢ひ見むことをのみコソ

(後選) あしたづの澤邊に年はへぬれども心は雲の上ののみコソ

前者は「おもへ」、後者は「あれ」をコソの下に補うて聞くべきである。此省略形式はこと

に口語に多い。既に中世でも「上コソ(見たまへ)此寺にありし源氏の君コソおはしたるなれ、など見たまはぬ」(源氏著紫)、「父コソ(來ませ)と呼へば忠行何ぞととへば兒のいはく」(今昔物語)の如く用ひ、現代口語では「あなたコソ」「手前コソ」「ようコソ」などいふ熟語が行はれて居る。又「押しても引いても動かばコソ」の如きは一種の反語ではあるが、コソに反語の意がある譯ではなく、動かバといふ假定と下に略した「あらめ」といふ語に因るのである。

口語では決定格を句の結びに用ひぬやうになつたから、コソを用ひる場合にも用言は常の形を使用する。例

さう思へばコソ注意して置いたのだ

今月コソ行つて見よう

腐りコソせぬがうまくはない

後の例は「腐りコソせぬうまくはない」ともいふことがあるが、此セネは句切ではなく、下に下といふ助語を含めて次句に接続するのである。

之を要するにコソの用法は昔も今も毫も變らぬといひ得る。詞の玉緒にはモコソ、シモコソの如き別をたてゝあるが、其はモ及シモ(亦、尙の兩義がある)とコソとの意を重ねただけで、複合によつて新義を生じたのではない。

附記。古語法の「ありコソ」「つけコソ」の「コソ」は「乞」の原語なるコにシといふ一助動詞の命令法なるソを添へたもので全然別語である(第一六六頁参照)。

へは「方」の義で、ユクへ(行方)、イニシへ(古)のへと同語である。ヤマベ(山邊)、ウミベ(海邊)、ウネビ(畝傍)、ハマビ(濱傍)のやうにべともビとも轉訛し、色々の字を充用するが、意義には變りはない。助語としては「方に」といふ意味に用ひられる。例

(記、朝倉宮) ひけたの若くるす原若くへにゐねてましもの老にけるかも

(同、二) 我せこを大和へやると小夜ふけてあかとき露に我たち濡れし

(同、十) わが宿になきし雁がね雲の上に今宵なくなり國へかもゆく

(古今) 僧正遍照がもとに奈良へまかりける時。云々

右の如くへの意義は極めて明白であるのに、往々格を表示するものと誤解し、ニと混同するものがある。例へば「誰ニやらう」といふべきを「誰へやらう」といひ、「親ニ相談して」といはねばならぬ場合に、「親へ相談して」といふ類である。此のやうな誤用は文語は勿論口語に於ても避くべきことである。

マデ

マデ マテニとも用ひられる。萬葉集には義譯(至、及の如き)、假字(麻低、萬代等)の外に二手、左右手、左右、諸手等の文字が充てゝある。借字たることは勿論であるが、之によつて上古はマテと清みても發音したことが推定せられる。恐らくは原語はマテニでマデ

は其約濁であらう。道路、河流、枝條何にもあれ、分岐したものは其岐點を以て止まりとするから、「俣に」(達する)といふ意を以て「迄」の義を生じたものと思はれる。其故に單にマデといふてもよい場合にも萬葉集にはわざ／＼ニをそへてある。例

(萬、一) 白波の濱松が枝の手向草いくよマテニかとしのへぬらん

(萬、三) 天雲のそぐへの極み天地の至れるマテニ

(萬、九) 古にありける事と今マテニ絶へずいひ來る

(同、三) 大宮のうちマデ聞ゆ網引すと網子とゝのふる海人のよぶ聲

いつマデか野邊に心のあくがれむ

遅くマデ寝もやらす

東京から大阪マデ

通例マデ(マテニ)は到達點をいふものであるが、動詞の連體形に連つて副詞句を形成する場合には程度を意味することがある。例

(萬、一) とゝのふる鼓の音は雷の聲ときくマデ、吹きなせるくだの音も敵見たる虎か

吼ゆると諸人のおびゆるマテニ

(拾遺) 忍ぶれど色にいでにけり我戀ばものや思ふと人のとふマデ

(古今) 朝ぼらけ有明の月と見るマデニよし野のさとに降れる白雪

口語には尙次の如き用例がある

そんなにむつかしい所なら行くまいマデよ(狂言記)

出来ないマデもやつて見る

風が強いのに雨マデ降つて来た

此等のマデは第一義の轉用たることは勿論であるが、尙マタ(亦)の原語モの意が潜んで居るやうな心地もする。上記の三例を文語に直す場合、マデをモに代へれば最よく原意を寫すことが出来る。即ち「行くまいマデよ」は「行かずモあらむ」、「出来ないマデモ」は「出来ずトモ」、「雨マデ」は「雨モ」と譯すべきである。

ヨリ 古語ではヨともユともユリともいうたが、原形はヨで、之に接尾語リがついて(第六六頁参照)ヨリとなり、ヨ、ヨリからユ、ユリが轉化したものであらうと思ふ。

(一) 古事記にはユといふ語は見えず、書紀にはヨはみなユとなつて居る。ユリは記紀には用ひられず、萬葉集にも稀であるが續紀宣命には屢々つかはれてゐる。

ヨは「節」「世」「夜」等を意味する語であるが、其原義は空間又は時の間隔を示したものである。蘆竹類の節間をヨといふのも之によると思はれる。助語のヨも本初は此意味であつたが、一轉して經過、移動の意となつたのである。之を明示せんが爲に運動を意味する接尾語リを添へてヨリとしたので、動詞の「寄」と同義である。ヨをユと轉音したのは感動助

原義

ヨリ

語のヨ(次目参照)と區別する爲であつたらしい。

古歌にはヨ(又はユ)を原義(時間又は空間)に従つて用ひたものが多い。例

(萬、八) 獨居て物念夕にほととぎすモツ此間ユなきわたる心しあるらし

(同、十) 妹が手をとらしの池の波の間ユ鳥が音けになく秋すぎぬらし

(同) 此夜らはさ夜ふけぬらしかりがねの聞ゆる空ユ月たちわたる

(同、十五) 磯のまユたぎつ山河たえずあらば又もあひ見む秋かたまけて

(同、二十) たくづぬの白ひげのうへヨ涙たりなげきのたばく

空間の意を以て用ひられたヨがヲに通ずることは既に述べた通りであるが(第二〇五頁)、ヨリ(寄)となつた後も尙原義に従うてヲと同様に用ひられた例がある。

(萬、二十) ほりえヨリあさしほみちによるこつみ貝にありせばつとにせましを

(源氏、須磨) 沖ヨリ舟どものうたひののしりて漕ぎ行く

(竹取) あたりヨリだになありきそ

陸ヨリ行く

又「によりて」といふ意味にもヨリを用ひた。例

(萬、十三) 人つまの馬ヨリゆくにおのつまの歩ヨリゆけば

(詞花集) 播摩守に侍りける時三月ばかり舟ヨリ上り侍りけるに云々

ヲと相通

來自の意
のヨリ

右の馬ヨリ、歩ヨリ、舟ヨリは「馬によりて」「歩によりて」「舟によりて」と譯すべきである。此「によりて」は後世ニテ又はデと約せられ、「船ニテ渡る」「轎デ通ふ」といふのが通例であるが、尙「舟カラゆく」——カラとヨリとは同義語である——ともいふことがある。

時間又は空間の經過移動を其終端又は中間の一點からいへば「來自」と稱すべきである。此意味に於てヨ、ヨリ(ユ、ユリ)は「自」「從」の義に用ひられるやうになつた。例

(記、水垣宮) しりつとヨいゆきたがひ前つとヨい行きたがひ

(萬、三) 繩浦從そがひに見ゆる奥つ島こぎたむ船は釣しすらしも

(同、五) 遠つ人まつらさよ姫つまこひに領巾ふりしヨリおへる山の名

(同、二十) かしこきやみことかがふりあすユリやかえがむた寝むいむなしにして

(古今) 今ヨリは植ゑてだに見じ花薄ほにいづる秋はわびしかりけり

南ヨリ吹く

又「東京ヨリ大阪へ」「昔ヨリ今マデ」の如く助語へ又はマデと對立して兩端を示すことがある。口語では此場合多くはカラを用ひる。

上記の用法から一轉して空間、時間以外に相異なる事物の経庭をも表示し、通例甲乙を比較するに用ひられる。例

(萬、五) 雲にとぶ薬はむヨは都見ばいやしきあが身またをちぬべし

比較

(同) われヨリも貧しき人の父母は飢寒からむ

(古今) 秋の菊にほふばかりはかさしてむ花ヨリ先と知らぬ我身を

紅葉二月の花ヨリも紅なり

新高山は富士山ヨリ高い

對比事物が明示せられぬ場合にも、ヨリの前續語が比較の標準たることに於ては變りはない。例

(金葉) 諸共にあはれともおもへ山さくら花ヨリ外に知る人もなし

山ヨリも高く、海ヨリも深し

是ヨリ先き

誰ヨリも強い

口語に現用せられるのは主として此種のヨリである。但し歐洲語の比較級を譯する場合 higher を「ヨリ高き」、better を「ヨリよき」とするが如きは我語法の許さざる所である。

カラ 「から」の原義は「莖」で——薬も亦同語である。——轉訛の経路は次の如く説明し得られる。kara—khara—hara—fara—wara——木質のクキにあらざる草莖をいふのである。古事記日代宮段の「なづきの、田の稻からに、いながらに」にあるのは稻莖の意で、書紀一書少彦名神の條下に粟莖に彈かれて常世郷に渡るとある粟莖もアハカラと訓ませてあ

カラ
語義

る。カラは其形状から柄、幹、空、殼等の義を生じ、更に幾多の語を分派した。例へば軀幹をカラダといひ、氏族の幹部をウカラともいふのである。

助語のカラも此語の轉義で、節からヨ、ヨリ(ユ、ユリ)が生まれたと同様に、莖幹から間隔を連想し、更に自、從、因等の義を生じたのである。「故」をカレとよむのもカラ(因)の轉音である。又カラの第一義が間隔であることは書紀天孫降臨章に「雖復天神、何能一夜之間令人有娠乎」とある一夜之間を古來「一夜のカラに」と訓むことによつても立證せられる。之に類した例は少くはない。左に其二三を擧げる。

(萬、九) 語りつぐカラにもこゝだ戀しきをたゞ目に見けむいにしへ男

(古今) すみの江の松を秋風ふくカラに聲うちそふる沖つしら波

(古今) 秋を置て時こそ有りけれ菊の花うつろふカラに色のまされば

右のカラにはアイダニ又はマニ(間に)といふ語にかへて見れば歌意が明になる。

マニが「間に」の意なることいふまでもないが、之を重疊すればマニマニ又はママニとなり、「隨」「儘」といふ意を生ずる。カラにも其意がある。例

(萬、六) 三よし野のあきつの宮は神カラか貴かるらむ、國カラか見がほしからむ

(同、十三) あきつ島やまの國は神カラとことあげせぬ國

右の神カラは人麿が歌に「葦原のみつほの國は神ナガラことあげせぬ國」とある神ナガラ

マニマニ
の意のカ
ラ

と同じく、「神のマニマニ」といふ意である。國柄も同様に「國の隨に」即ち「國おのづカラ」といふことである。口語の家ガラ、人ガラ等のガラも同義で、獨立してガラといふ單語となり、「ガラが善し(悪し)」などとつかはれて居る。

(一) 鹿持雅澄は其大著「萬葉集古義」に於て神カラと神ナガラとは全然別語であると断定したけれども、ナガラといふ單語のあるべき筈がなく、ナは既述のやうに助語ノの原語であるから、神ナガラは神ノカラ即ち神カラと同語であらねばならぬ。

己ヅカラ、身ヅカラ(共に自の字を充當する)のカラも亦「隨」の意であるが——ツは繫辭——「自身」又は「親しく」といふ意味のミヅカラに在つてはカラは極めて軽い修飾語である。之に似たカラの用法が折々古歌にも見える。例

(萬、五) はしきやしかくのみカラにしたひこし妹が心のすべもすべなさ

(古今) 紫のひとと故にむさし野の草はみなカラあはれとぞ見る

右のカラは之を省いても意は通するのである。

カラを來自の意に用ひることは最普通である。例

(萬、十一) 月夜よみ妹にあはむと直道カラわれは來たれど夜ぞ更にける

(古今) 夏むしを何かいひけむ心カラ我もおもひに燃えぬべらなり

天カラ降る、昔カラ今まで

來自の
意
のカ
ラ

故の意の
カラ

來自と同一の着想によりカラに事由といふ意を與へ、之からカレ(故)といふ語を生じたことは上述の通りである。ヨから生まれたヨリといふ動詞にも亦因、由等の意があるけれども、助語としては此意味に用ひられることはない。然るにカラは助語としても「故」の意を表現することがある。例

(萬、十八) 明日よりはつぎて聞えむ時鳥ひと夜のカラにこひわたるかな

(古今) 惜しむカラ戀しきものを白雲のたちなむ後は何こちせむ

此用法は口語にも普通で、「惜しいカラ止めた」「少しでもよいカラ貰ひたい」「しひていふカラ承知した」などといふのである。

此カラはモノといふ熟語(第二二四頁参照)に連つてモノカラといふ複合助語を構成する。

其意義はモノと同じく、原因の結果に伴はぬことを表現するのである。——「故に」の反對である。例

(古今) 古里にあらぬモノカラ我ために人のこゝろの荒れて見ゆらむ

(古今) わたつみの沖つ汐あひに浮ぶ泡のきえぬモノカラよる方もなし

第一の歌は「廢都でもなし」の「」、第二のは「消えもせぬの」の意である。此用法は口語には行はれぬ。

カラは本來比較には用ひられぬ語であるが、口語では「見れば」「おもへば」の如き主觀

モノカラ

比較

ナガラ

的語句と連ねて比較を表現することがある。例

東京カラ見れば京都は閑靜だ

今カラ思へば昔は氣樂だつた

附記。ナガラは上述のやうにナといふ繫辭とカラとを連ねた熟語で、此意義は全然カラと同様である。ナはツと同じく名詞と名詞とを連繫する語であるから、ナガラの上につく語も必ず名詞形であらねばならぬ。カラが動格に連るに反し、ナガラが見ナガラ、聞きナガラのやうに動詞の原形に接續するのは此理由に基くものである。

右の如くナガラは別個獨立した助語として説くべきものではないが、之を一語と考へてゐる人が多いから、左に若干例を擧げてカラと同語であることを證明する。

(一) 例の多くな故大槻文彦博士の廣日本文典にあげて居るものからかりて用ひたのは、同文典に於ては、ナガラをカラとは別の一接尾語として説いてあるが故に、其然らざることを示さんが爲である。

(續紀詔十五) 障事無久奈佐牟止敕賜奈賀良(ママニの意)

(兼盛集) 一年は春ナガラにもくれななむ花の盛をあくまでも見む(「春の儘にて」の意)

(源氏竹川) 御子供六人ナガラ引連れておはしたり(「六人其ママ」)

(源氏夕顔) 御簾のうちナガラのたまふ(「御簾の内カラ」)

讀みナガラ考ふ
歩みナガラ見る
思ひナガラ
さりナガラ
しかしナガラ

カラ即ち「間」の意、「讀む間に」「歩む間に」「思ふ間に」「さる間に」「しかする間に」と解すべきである。前三例のナガラはツツに近いが、連続をいふのみで、反復の意はない。

又ガカラとつゞくことがある。之もガを以て前續語に連ることの外にナガラと異なる所はない。例

(萬、六) 古さとは遠くもあらず一重山こゆるガカラにおもひぞ我せし

(萬、七) 手にとるガカラに忘るとあまのいひし戀忘貝ことにしありけり

己ツカラ、身ツカラのツカラもツがナに代つただけで、全然同意義ある。

ク 今は廢語となつたが、古、クといふ助語があつて、動詞の未來分詞に連つて、「いはくもしるく」「雨の降らぐ」「見まく欲りする」のやうに用ひられた。

從來の文法家之を延言と稱へ、「いふ」「降る」「見む」を伸べたものであると説き、世人も亦無批判に之を肯定して居たが、發音の項下に詳述するが如く、甚いはれのない事である。

此クはコ(此)の轉音で「此」「此事」「此もの」等を意味する助語である。左に二三の例を擧げて之を證明する。但し此助語の存在に氣づかなかつた先賢は多くの場合文意を説き誤

ガカラ
ツカラ

ク

例語義及用

つて居るが故に、煩はしいけれども、註釋を加へることにした。

道のしりこはだ少女はあらそばすねしクをしぞもうるはしみ思ふ

(註) 此歌は古事記明宮の條下に出て居る。應神天皇が日向からめし上られた髪長姫といふ美人を大雀命(後の仁德天皇)に給はつた時に皇子の作られた歌である。應神天皇は其以前木幡の和邇の比布禮の女を後宮にいれたことがある。記には見えぬけれども此時も大雀命は之を乞ひ受けんとせられたらしい。歌の意は「木幡少女を得たいと望んだが、も早争はぬ。此(共に)寢たものを可愛いと思ふ」といふのである。ミチノシリは大和から琵琶湖に出る道後の意である。

夜のほどろ吾出で来れば吾妹子がおもへり四九四おもかげに見ゆ

(註) 萬葉集卷四に出て居る。歌の意は「未明に女の許を出て来れば女が(私を)念うて居たことがおもかげに見ゆる」といふのである。四九四の始のシは過去の助動詞、次のシは上述の助語で、ここではゾにひとしい。

さぬらクは玉の緒ばかりこふらクは富士のたかねのなるさはのごと

(註) 萬葉集第十四卷の歌である。「さぬらク」のサは接頭語、鳴澤は水音の高い谿流である。歌の意は「寐ることは玉の緒ほど短く、戀ふることは富士の高嶺の鳴澤のやうに高鳴りする」といふのである。

クは現在及未來をいふ場合には上例のやうに未來分詞に連り、過去をいふときは時の助動詞シ(連體法)に連る。例

クと動詞
との接着
法

原形	現在又は未來	過去
言ひ	いはク	いひしク
思ひ	おもはク	おもひしク
思へり	思へらク	思へりしク
降り	降らク	降りしク
見む	見まク	
見	見らク	見しク
ね(寝)	ぬらク	ねしク
戀ひ	こふらク	こひしク

右の例に於て見るが如く、一段及二段活の動詞には未來分詞形が特設せられて居らぬから、アリ(有)の未來分詞アラを借り(畧してラとし)、見ラク、寝ラクのやうに用ひたのである。曰クの後に必ず「トいふ」といふ語(畧してトとのみいふこともある)を添へるのは、曰クが「いふ事(は)」の意で言フの延言でない證據である。「言ひしク」「語りけらク」等も亦之に對應する結び語を必要とする。例

(續紀詔) 朕宣自久大臣乃御世重天明淨心以且仕奉事爾依且奈母天日嗣波平安久聞召來流此辭忘給奈弁給奈止宣比之

(萬、五) 神代より云傳てけらク、そら見つやまとの國はすめ神のいつしき國、言たまのさきほふ國と、かたりつぎいひつがひけり

(一) 記紀の文中の言、曰、詔、宣等は過去格を以て訓む場合には「いひしク」「まなしシク」「のりたまひシク」といへばならぬ。然るに宣長は「いはク」「まなきク」「のりたまはク」の如く常に現在格によみて、しかも「トいひき」「トまなき」「トのりたまひき」と結んで居る。例
伊邪那美命言、愛我那勢命、爲如此者、汝國之人草、一日絞殺千頭
このよみ方は今日まで踏襲せられて居るが、時格の前後のものはぬことは古の語法にはあり得ぬことであるから、斷じて誤讀とせればならぬ。

此助語は中世以降全く廢れ、唯慣用語句として歌文に用ひられたのみであるが、多くは原意を誤つて居る。例へば「老いらクの春」「老いらクの友」の如きは殆ど意味をなさぬ。若干の熟語は口語にも残り、次のやうに用ひられてをる。

いはクがある、 おもはクをした、 恐らクはさうではあるまい
附記。朝鮮語ガ(音キ)は「活用語を名詞形にするに用ふる助語」(總督府編纂「朝鮮語辭典」)で、例へばカ(行く)、ハ(する)にキを添へ連濁によつてカギ、ハギといへば「行くこと」「すること」の意となるのである。此ガは邦語のクと同原の語か、或は偶然の暗合であるか、尙斷定し難いけれども、鮮語コ(音キ)が「其」といふ意味であることを考へあはせると、多少關係があるやうに思はれる。

スラ

スラ 此助語は上記のシに接尾語ラを副へたシラの轉音で、其本義はシと同じく「其」「其もの」等の意である。——ラが必しも複数を示すものでないことは既述の通りである(第四八頁)。——されば古歌には此意味にスラを用ひたるものが多い。例

(萬、五) 寒き夜スラを我よりも貧しき人の

(同、十二) いきのをに我いきつきし妹スラを人妻なりときくはかなしも

(佛足石歌) よき人のまさ目に見けむみあとスラを我は得みずて岩にゑりつく玉にゑりつく

スラが現用の如く轉義せられるやうになつたのも、やはり原語に基くものである。シは「其みづから」といふ意味に於て今のスラの意を表現することがある。——獨逸語の *selbst* も本來「自身」の意であるが、スラ、サへといふ意にも用ひられる——例へば古事記八田の皇女の歌に「大君シよしときこさばひとり居りとも」とあるは、「大君サへよしと思召さば」といふ意である。スラは多くは此意味に用ひられる。例

(萬、六) かくしつゝ遊び飲みこそ草木スラ春はおひつつ秋はちりゆく

(同) 言とはぬ木スライもとせありとふを唯ひとり子にあるが苦し

(曾丹集) とけてスラぬる程もなき五月雨をねさめ勝にてあかす頃かな

口語では原義のスラは全く廢れ、第二義のものさへ餘り用ひられず、通例デモ又はサへ

を之に代用する。例へば「草木デモ」「草木サへ」「木デサへ」といふのである。

(一) 萬葉集にはスラに尙の字をあて、ある。尙はマダともよみ、モの意味を含んで居る。デモがスラに代用せられるのは決して偶然ではないのである。

ダニ ダニのタは「唯」と同原から出たもので、ニは前目所載の標識助語である(接頭語タの條下参照)。従つてダニの本義は「唯」といふことであるが、轉じて「せめて……なりとも」といふ意味に用ひられるやうになつたのである。例

(萬、二) 夢にダニ見ざりしものをおほほしく宮出もするかさひの隈回を

(古今) 今よりは植ゑてダニ見じ花薄ほにいづる秋はわびしかりけり

(同) いのちダニ心になふものならば何かわかれのかなしからまし

(同) うつせみはからを見つつぞなくさめつ深草の山けぶりダニたて

(同) 皆人は花のころもになりぬなりこけの袂よかはきダニせよ

土佐日記に「鷗サヘダニ浪と見ゆらん」とある歌を六帖にサヘタダと直していれてあるのは「鷗サヘタダに波と見える」といふ意であるからであらう。このころまで尙ダニの原義は正當に了解せられて居たと見える。

此語は口語では殆ど用ひられない。しかも之に相當する助語がないから、其に近いデモ又はサへと譯せられ、爲に上記のスラと區別することが困難になつたが、兩者の間に差違

ダニ

サへ

のあることは勿論で、上掲の證歌についていふも、「煙ダニたて」「かはきダニせよ」を「煙スラたて」「かはきスラせよ」といふことは出來ぬのである。

サへ 此語はソへ(添)の轉訛であるといふ説があり、萬葉集には副といふ字をすら充てゝあるが、尙納得しかぬる點がある。或はソウへ(其上)の約ではあるまいか。いづれにしても「亦」の意なることは疑の餘地がない。例

(萬、六) 橘は實サへ花サへその葉サへ枝に霜ふれどいや常葉の木

(同、十六) あさか山かけサへ見ゆる山の井のあさき心を我おもはなくて

(古今) 梓弓おしてはるさめ今日ふりぬ明日サへ降らば若葉つみてむ

(一) 副は四段活の動詞で原形はソヒであらねばならぬ。同行相通によつてサへと轉訛することがないともいへぬが、二音とも變化して別語のやうになるから、實際にはあり得ぬことである。大概氏もソウサへの約であらうというて居る(廣日本文典別記)。

然るに中世すでに之をスラの第一義と同様に用ひて居る。例

(後選) 今日よりは夏の衣になりぬれどきる人サへはかはらざりけり

(拾遺) めづらしき年にはあれど鶯の鳴く音サへには變らざりけり

口語では此助語の用途は一層擴張せられてスラ、ダニにも代用せられるやうになつた。例

(イ)原義を失はざるもの。 水サへ喉に通らぬ、 雨サへ降り出した

ツ

(ロ)スラの意なるもの。 聞く私サへ腹がたつ、 子供にサへ出來る

(ハ)ダニの意なるもの。 飯サへあればよい、 讀むサへ骨が折れる

然しながらスラ、ダニは必しも常にサへと譯することの出來ぬのは既述の通りである。此三語はまぎれ易いものであるから、初學者はよく注意せねばならぬ。

ツ、ツツ ツはツル(蔓)、ツラ(連)等と語源を同うし、連續を意味する語で、天ツ風、國ツ風、遠ツ祖の如く、二つの語を連繫するに用ひられる。日本語は總説に述べたやうに單語の順位連續によつて句をなすもので、必要の場合にのみ助語を用ひて前後の語が互に離るべからざる關係にあることを示すのであるが、其場合にもおのづから二様の別がある。即ち兩語中の一が他を修飾又は支配する場合と、二者相倚つて一表現を形成するものである。前者に對しては多くはノ(ガ)を用ひ、後者にはツを用ひる。例へば八百萬ノ神は多數の神をいふのであるが、五百ツ眞賢木マコガは五百枝(或は多數の枝)を有する一本の神の意である。又天ノ若日子は海人族の(人なる)若彦といふものを指すのであるが、天ツ彦、空ツ彦は天子、太子をいふのである。其故に國ツ神は下界に棲む神といふことで、國を掌る神でも、國家が祭祀する神の意でもなく、時ツ風は季候風で其時々トキトキの風ではない。近世の人がツはノの雅言とのみ心得、「沖ノ白帆」といふべきを「沖ツ白帆」などと歌文中に用ひて居るのを見ると甚滑稽に感じられる。

口語では「上ツ方」「外ツ國」のやうに熟語になつたものゝ外、此ツを用ひず、必然ツがあらねばならぬ場合にも之を省き、若くは音讀するから、往々意義がまぎららしい事がある。例へば「上級者」の上級は絶對的上ツクミ(又はシナ)の意か、相對的上ノクミといふことか甚曖昧である。又航空船といふやうな言ひにくい語——此は二十年前私が軍職に居つたときツペリン伯の Luftschiff を譯する爲に用ひ始めた語で、責任は免がれぬが——を作らずとも空ツ舟といへばよかつたと思ふのである。

右の用法からいふとツは中間接語と名づくべきものであるが、次のツツを説く便宜の爲、こゝに收めたのである。

ツツ

ツツは右のツを重疊したもので、動詞に連ねて連続反復を表現する。例へば萬葉第十一卷にある「中々に君に戀ひすばひらの浦の海人ならましを玉藻かりツツ」の下の句と同じ意味を同第十二卷には「海人ならましを玉藻かるかる」としてある。即ちカリツツはカルカルと同じく刈ることを連続反復する意である。然るに従來の文法家は之を時格を示す助動詞と見て、上例のカリツツの如きもカリツカリツの約であると説いた。世間では無批判に之を肯定して居るやうであるが、カリツは完了格であるから「君に戀ひすば」「海人ならましを」の未來格であるのと調和せぬ。又萬葉集第三卷春日の藏首老が歌に「夜は更けニツツ」といふ句があるが、フケニツといふ語法は有り得ぬことであるから、之を更ニツ、更ニツ

の約なりとすることは出来ぬ

(一) 此ズバがツバの轉化であることは用言の項下に述べた通りである(第一七〇頁)。

連続反復とすれば古歌文に用ひられたツツはいづれもよく了解せられる。例

(記、神代卷) ココにみ佩かせる十拳の劔を抜かしてウシロデにフキツツ遁來たまひ

(同、詞志比宮) 歌ひツツかみけれかも、舞ひツツ釀みけれかも

(萬、十二) 君があたり見ツツも居らむ生駒山雲なたなびき雨はふるとも

(古今) わだつらみの濱の眞砂をかぞへツツ君が千とせの有る數にせむ

ツツは「玉藻刈ツツ」のやうに句の結びとなる場合と上例の如く次の動詞に連る場合とがある。後者は副詞的に用ひられたもので、テと相似た趣があるが、決して同意義ではない。例へば「見ツツあり」と「見テあり」又は「見たり」とは全く別義で、「見たり」には連続の意はあるが、毫も反復といふ義を含んで居らぬのである。「見ツツアリ」の如くツツとアリ(在)とを連用することは正しい語法ではないといふものがあるが、其は勿論誤解で、古語にも用例はある。さりながら近代口語のツツアルは多少意味がちがふやうである。例へば英語の is seeing を見ツツアリと譯するのは當を得て居るが、之を口語の見テキルと同義とし、「繪を見て居る」といふことを「繪を見ツツアル」といふのは誤である。見テキルの文語は見アリで、見ツツアリではない(動詞活用の條下参照)。此誤用は英語譯讀口調から轉じたもの

ツツアリ

ガツとナ
ガラ

で、今では之を改めることが不可能になつたやうであるから、昔のツツは廢語となり、新にツツといふ語が生まれたと見る外はあるまい。

連続反復はやがて動作の進行中なることを意味するから、ツツと俗語のナガラとはまぎれ易い。例へば「讀みツツかく」「飲みツツくふ」は「讀みナガラかく」「飲みナガラ食ふ」と同じことのやうに聞えるけれども、細にいへば其間に差別がある。前者は反復して讀んで書き、又は飲んでくふのであるが、後者は讀む間にかき、又は飲む間に食ふことをいふのである。さりながら口語では上記のやうに昔のツツは消滅して「讀みツツかく」といへば單に「讀みテかく」意か、或は「讀みナガラかく」といふ意味に解釋せられるやうになつたのである。

正しい意味のツツは口語では本初にかへつて動詞を重複して表現せられる。例へば「見ツツあり」を「見イ見イして居る」といひ、「飲みツツ食ふ」は「飲み飲みくふ」といふのである。

ツツ ツツと同形で全然意の異つた語にツツといふのがある。是は數稱のツツから轉化したもので(數詞の條下参照)、「ひとツツひとツツ」を約して「ひとつツツ」といふやうになつたのである。されば本初は數稱をいふにのみ用ひられたのであらうと思ふが、其用途が擴張せられて分量を示すあらゆる語に適用せられるやうになつた。例

ツツ

ガテラ

五圓ツツ渡した、これだけツツでよい、少しツツわかる、いくらツツあればよ

いか

右の外ホド(程)、バカリ等にもつくことがある。

ガテラ カテ、アリの約カテリの轉音で、カタガタ(旁)といふ意である。カテは「かてて加へて」のやうにも用ひられが、カテ、アリとつゞけた場合は一個の熟語で、次の例のやうにつかはれて居る。

(萬、一) 山邊の御井をみカテリ神風の伊勢をとめども相見つるかも

(同、三) 雨ふらずとの曇る夜を濡ひづと戀ひつつ居りき君まぢカテリ

(同、七) 我舟は沖ゆなさかりむかひ舟かたまちカテリ浦ゆこぎあはむ

然るに此カテリは夙にガテラと轉訛して助語のやうにつかはれるやうになつた。例

(萬、十八) 梅の花さきちる園にわれ行かむ君がつかひをかたまちガテラ

(萬、十九) 吾妹子がかたまみガテラと紅の八しほにそめておこたせる衣のすそも

(古今) わが宿の花見ガテラに來る人はちりなむ後ぞこひしかるべき

此語は現代の口語にもつかはれ、其用法も全く同一である。例

花見ガテラに訪ねる、涼みガテラ歌をきく

ノミ 語原不明である。堀秀成は其著「助辭音義考」に「祈ノミと同語で、ヒタブル(一向)

ノミ

の意である」と断定して居るが、心ゆかぬ説である。或はミナ(皆)といふ語を顛倒して(ミナ——ナミ——ノミ)其裏即ち「皆」にあらざることを表現したものであるまいか。奇警に過ぎる嫌はあるが、必しも有り得ぬことではあるまい。次の例のノミの如きはミナ(皆)の反對即ち特に然る意を表現して居る。

(萬、五) 人皆か我ノミヤしかる

(同、三) 世の中はかくノミならし

(尤恭紀) ささらがた錦の紐をときさけてあまたはねすとたゞ一夜ノミ

此意味から一轉して第三例のやうに、上に唯といふ語のある場合は勿論、ない場合にも「唯一」といふ意味に用ひ、次のバカリと同じくワヅカニ(纒)といふ意を表現するやうになつた。例

(萬、三) 日のことごと哭ノミを泣つつありてや

(古今) 知るしらぬ何かあやなくわきていでむ思ひノミこそ知るべなりけり

(同) おとにノミ菊の白露よるはおきて晝はおもひにあへすけぬべし

スヤノミにして行はず

現代の口語ではノミをつかふことは稀で、多くは次のバカリを用ひる。

附記。宣長は其名著「古事記傳」に於て句を終止する「耳」はノミと訓むべからず、「こそ

あれ(あらめ)と訓むべし」というた。其着眼は敬服の至であるが、尙説明の足らぬ憾がある。上記のやうにノミは二次生の語で、上古ではつかはなかつたらしく、神武天皇の御製「久夫都都伊、伊斯都都伊母知、宇知[△]伊斯夜麻牟」とあるのも後世ならば「うたんノミ」といふべき所である。——此場合のノミは漢字でも而已とかく——コソにノミの意があるのは特に此と指定する語であるからで、前例中「かくノミならし」は「かくコソあるらし」とも譯し得る。さりながらノミといふ語が発生した以上、其が他の語と同様に句切にも用ひられることは當然である。

バカリ

バカリ 計、謀等の意のハカリと同語で、助語として當初分量を表現し、イカバカリ

(幾計)、スコシバカリ(少計)のやうに用ひた。例

(萬、五) 行舟をふりとどみかねいかバカリこほしくあけけむ松浦さよ姫

(同、二) かくバカリ戀つつあらずば高山の岩根しまきて死なましものを

此意味を擴げて「二十バカリ重ねたる」「曉バカリうきものはなし」「八月十五日バカリの月」のやうに、ホド(程)とも、コロ(頃)とも、或は俗語のクラキ(位)の義にも通はして用ひ、更に一轉してワヅカニ(纒)、「單に」の意を示す語とした。例

(古今) 山の井の淺き心もおもはぬに影バカリノミ人のこゆらむ

(古今) もがみ川のぼれば下るいな舟のいなにはあらずこの月バカリ

(新古今) 今こむといひしバカリに長月の有明の月を待ち出づるかな
聲バカリ聞ゆる、こゝバカリに日は照らぬ
之をバカリの本義の「計」と區別する爲に、口語ではバッカリ又はバチ(バッチ)ともいふ。

例

そなたの死んだバッカリで
たつたそれバチではいやだ
又バカシ、バッカシとも訛ることがある。イクバク(幾許)、ソコバク(若干)といふ熟語も
イカバカリ、其バカリの轉訛であらうと思ふ。

(一) 文法家中にはノミとバカリは略々同義であると説いて居るものもあるが、此例の如くバカリと
ノミとを重ねて用ひられたことを見ると、其時代には判然たる區別があつたのである。此句は「織
に影ノミ」と譯すべきで、ノミは其本義により特に然ることを表現するのである。

ダケ(口語) タケ(丈)の轉義である。 タケは古の尺度で、長さを示す語であるが、
廣く事物の程度又は限度を表現するやうになつたのである。例
(醒睡笑) てゝらは膝ダケあるきものなり
たかいダケの事はある、 五つダケ欲しい
母にダケ話した、聲ダケ聞える

ダケ

後の例は「聲バカリ聞える」というても意は通ずるけれども、尙多少の相違がある。聲ダ
ケといへば聞えるものゝ最少限度は聲であるといふ意を表はし、聲バカリとすれば纔に聲
を聞くといふやうに聞なされるのである。

(一) 尺、寸の制が輸入せられるまでは我國の尺度はツカ(握)、タ(手)、ヒロ(両手をひろげた長さ、尋)、
タケ(身長)の四種であつたやうである。

此語は標準を示す意味にも用ひられる。例

勉強するダケ學問が進む、 藥をのむダケ早くなほる、 近ければ近いダケよく聞える

シカ(方言) 語原は不明であるが、其意は「承諾するホカなし」などいふホカ(外)と同
一である。關東地方の方言で、多くはヨリといふ助語に連なり、打消の語句のみ用ひられ
る。例

五つ(ヨリ)シカない 私(ヨリ)シカ知らぬ

小錢(ヨリ)シカ持たぬ 十里(ヨリ)シカ歩かぬ

ヨリ、シカを略してヨリカ又はヨカともいふを見れば或はシカ(然)といふ語で、ヨリと連
ねて始めて上記のホカ(外)に匹敵するものであつたのを往々ヨリを略して用ひられたので
あるまいかと思ふ。

ナド ナニソの約である。ナニソは不定の事物なさす語で、京畿地方では「ナンゾ欲し

シカ

ナド

「のやうに用ひる(關東では此場合何カといふ)。助語のナドも同じ意味で、或る語(句)につして「其他」「等」⁽¹⁾といふ意味をあらはし、成はわざとおぼめかしていふに用ひる。例(枕草子) 覺ある人の子供ナドは雑色ナドおりて馬の口ナドしてをかし、馬にナド乗りて

釣れますかナドと文王そばへより

(一) 複数の意味ではないことは「子どもナド」といふを見ても明である。

附記。「お茶ナドめしがれ」のナドはナリトモの略である。

古語では次のやうな語も助語的に用ひられた。

ガネ カネテ(豫)、カネコト(兼約)などのカネで、豫め充當する意である。「ハヤブサ別の御おすひガネ」(記、仁徳天皇卷)、后ガネなどいふ。今も掣ガネといふ語を用ひることがある。

ガニ 「絶ゆガニ」「あゆるガニ」は「絶ゆるかの如く」「あゆるかの如く」といふことである。上記疑の意の助語カの轉音であらう。

ナベ ナはノの原語、べはウベ(宜)の原語である。當に然るべしといふ本義から轉じ

て「従つて」といふ意に用ひられた。

モコ 上記の助語モにコ(處)を連ねたものでモト(許)と同義である。

ナス ノスともいひ、「如」の意である。「クラゲナス漂へる」(記、神代卷)の如く用ひられる。

此等の諸語は夙に廢用になつたものであるから、例を擧げて説明することを見あはせる。其他ホド(程)、ホカ(外)、クラキ(位)、サウ(然)、ヤウ(様)等も助語的に用ひられるが、獨立し得る語でもあり、語義も明白であるから、助語中にいれぬことにした。

感動助語

カ 前目に掲げた疑の助語の外に感動を表示するカといふ音がある。本初歎賞の場合に用ひられたものであらうと思ふが、口語には全く廢れたので、之が確證を擧げることが出来ぬ。唯次の如き例によつて推定せられるのである。

(記、難波高津宮) 吉備人と共にしつめばたぬしくもあるカ

(萬、三) わたつみはあやしきものカ淡路島中に立て置て云々

(古今) 浅みどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳カ

(同) ぬきみだる人こそあるらし白玉の間なくも散るカ袖のせばきに

カモ、カ
ナ

此方は同じく感動詞なる後記のモ及ナと連ねて廣く感動を表示するに用ひられた。例

(記、明宮) うたたけだに向ひ居るカモい添ひ居るカモ

(萬、十四) 大君の命かしこみかなし妹が手枕はなれ夜立ち來ぬカモ

(古今) わだの原よせ來る波のしはしばも見まくの欲しき玉津島カモ

(同) 郭公なくや五月のあやめ草あやめも知らぬ戀もするカナ

カナは平安朝以後に行はれた語で、萬葉集にはカ又はカモのみを用ひ、古今集ではカ、カモ
カナが併用せられて居る。其以後の和歌、俳句には専らカナが用ひられ、昔の口語にもつか
はれたやうであるが、今では全く廢れた。

(一) 語其ものは上古から存在して居たと見えて、之にシを接着してカナシといふ形容詞を設けた。
カナシに「悲」の意と、いとほしむ意とがあるのは、カといふ語に感傷の外に後述のやうに希望の
意をも含んで居るからである。

カ、カモには前目に述べたやうに疑の意を表示するものがあつて(第二一六頁参照) 甚まぎ
ららしいが、疑のカ(カモ)は比較の後代に獨立したもののやうであるから(第二一五参照)、
明に疑又は間を表示して居る場合の外は概ね感動詞に屬するものと見て妨がないのであ
る。次の諸例が之を證明する。

(萬、八) あすか川ゆきたむ岳の秋萩は今日ふる雨に散りカ過ぎなむ——「散り過ぎな

疑のカと
の區別

むヨ」の意。

(同、十五) 大舟にかし振り立てて濱きよきまりふの浦にやどりカせまし——「宿りせ
ましモ」といふに同じい。

(同、十五) 我妹子がかたみに見むをいなみづま白波高みよそにカモ見む——「よそに
見むカナ」ともいひ得べし。

(古今) 今もカモ咲匂ふらん橘の小島が崎の山ぶきの花——「今もさき匂ふらんカナ」
の意

(新古今) 蛙鳴く神なび川に影見えて今カ咲くらん山吹の花——「今咲くらんカナ」と
いふ意

(一) 宣長は「玉の緒」に於て今モカモのモは二つともヤスメ詞で、單に今カといふ意であると説いて居
るが(「玉あられ」にも同説を掲げて居る)、無用の語は日本語には存在せぬ。假に其が無意義に近
いとしても、カを介して上下に連ることは奇怪である。されば今モカモ、今日モカモはモにカモ
といふ感動詞がついたものとせねばならぬ。

カの種類音コはコヒ(乞、欲)の語幹で、希望の意がある。——恐らくは賞歎の意から轉じ
たのであらう——カも亦此意味に用ひられることがあるが、此場合には之を區別する爲に、
通例ガ、ガモ、ガナの如く濁つて發音する。例

希望の意
のカ

(記、明宮) かもガと我見し子ら、かくもガと我見し子に
 (萬、八) 我宿の尾花が上の白露をけたすて玉にぬくものにもガ
 (同) さにぬりの小舟もガモ、玉まきのマかひもガモ
 (古今) あなこひし今も見てしガ山かつの垣ほにさける大和なでしこ
 (同) こゝろかへするものにもガかた戀は苦しきものと人に知らせん
 (同) かくしつゝとにもかくにもながらへて君が千歳に逢ふよしもガナ
 (同) 耳なし山の口なし得てしガナおもひの色の下ぞめにせむ
 右のガ(ガモ、ガナ)をカ(カモ、カナ)と別語と考へて居るものもあるやうであるが、古事記朝倉宮の段の「まひするをみな常世にも加母」及萬葉集に屢々見える「得底之可」「見而師香」等の加、可、香は明に清音であるけれども、希望を表現して居る。之を濁るのは單に音便の爲である。

附記

(二) 古歌に「あらヌカ」又は「あらヌカモ」と結んで希望の意を表現したものがあつた。
 (萬、四) 久方の雨も落糶あまつみ君にたぐひて此日くらさん
 (同) 佐保川のさざれふみわたりうば玉の黒馬のく夜は年にも有糶
 此又は希望の意のナ(後記参照)の變形でカ(カモ)も亦希望を表現するものである。

ヌカ

カシ

(二) 源氏物語以下にカシといふ語が屢々つかはれて居る。句末につく一種の感動詞ではあるが、語原、語義ともに不明である。例
 さはおもひつカシ、絶えずなんおはしめすめるカシ
 言の葉だにかけよカシ、とく行きねカシ
 此語は上古にも見えず、現代の口語にもつかはれぬ。朝鮮語にも之と同様の場合に用ひられるコソコ(音コチョコ)といふ語がある。或は之が輸入せられてカシと變化し、一時の流行となつたのではあるまいか。

ナ かけ聲に用ひるナと同しく自然の發聲であるが、助語として他の語に連ねて用ひられる場合には感動を表現する。例

(記、日代宮) うべナうべナ君ましかたに我けせるおすひの裾につき立たなむよ
 (同) 空はゆかず足よゆくナ
 (同、明宮) あからをとめをいざささばよらしナ
 (萬、九) 明日よりは我はこひむナ名欲山石ふみならし君が越えいなば
 上記のカナのナも之に屬するものである。又

(萬、三) 馬莫疾うちてな行きそけならべてみても我行しがにあらなくに
 (同、十二) いつはナモ戀ずありとはあらねどもうたて此頃戀のしげきも

此二首の歌のナ、ナモも亦感動を表現するものである。然るに先賢は之を解き得ずして種々の説をたてたが、^(一)も承服し得られるものはない。

(一) 鹿持雅澄は第一の歌の初句「馬莫疾」とあるを「我馬疾」の誤寫とし、後の歌のナモは志母の誤字と推定した。しかし前の歌は京にかへる人が見送りに來た戀人に詠みて與へたもので、其意は「相並びて志賀(汝)にかけたり」を見つゝ入京すべくもあらぬに、駒を早むることなかれ」というので「我馬」としては意が通ぜぬ。又次の歌はナモとかかつて「ありとは」と結んであるから不審をたてたのであるが、——略解には第二句を「こひすある」とは」と訓んで居るが、其では疑問のやうに聞えるから勿論妥當でない——ナモをゾと同列の語とする事の誤なるは次に説く通りである。「いづはシモ」といふ語をつかうた場合には第二、第三句は「こひさらめども」といはねばならぬ。

ナモ、ナ

此ナモは記、紀、萬葉の歌の中には右の外用例が見えぬけれども、續紀の宣命には屢々つかはれて居る。例

天下乃公民乎惠賜比撫賜幸止奈母隨神所思行佐久止詔(第三詔)

顯久出多留寶羅在羅之止奈母神隨所念行須(第四詔)

忘不給止自且奈母孫等一二治賜布(第十三詔)

此等の例によるに、奈母といふ語を省いても文脈には少しも變りはない。此語は他の文獻には見えず、平安朝以降ナンといふ語を以て代へられたけれども、尙名古屋地方の方言に残り、「あの人ナモ」「ほんまにナモ」のやうにつかはれて居る。「さうギャモ」も亦恐ら

くは「さうかナモ」の約であらう。

ナンはナモの轉訛であるが、用法は多少ちがつてゐる。例

(古今) 袂よりはなれて玉をつゝまめやこれナン其とうつせ見んかし

(同序) 其始をおもへばかゝるべくナンあらぬ

(同) 柿本の人まろナン歌の聖なりける

(伊勢) その人形より心ナンまさりたりける

(古今、詞) 此歌はまだ殿上ゆるされざりける時にめしあげられてつかうまつるとナン右の如く歌には其例が少いけれども、散文には濫用に近いほど頻々と用ひて居る。句の結びが多くは連體形であるのは餘情を残さんが爲である。然るに後人此結びに惑はされてナンとの間に約束があるものやうに誤解し、更に一步を進めてナンとゾとは同意義であると臆断した結果、必ずゾとはいはねばならぬ場合にもナンを用ひるものを生じた。しかしナンがゾと同一語でない證據には土佐日記に「心あるものは耻ぢずゾナン來りける」と、ゾとナンとを重ねてつかうて居る。又宣命などに屢々用ひられる「物會止」「事會止」を「ものナンと」「ことナンと」といふことは出來まい。要するにナンはナモと同じくナの一變形で感動を表現するに過ぎぬ。口語ではナンは全く用ひられぬ。

(一) 宣長はこの句を「誤なるべし」といふ一言を以て片付けて居るが、平安朝初期の人なる貫之が

ナンはゾ
と同義に
あらず

其當時の口語を筆にするにあたり、そんな卑近な謬をしたとも思はれぬ。假に誤寫であつたとしても其當時から文人にもてはやされた書物であるだけに、未代まで誤寫に氣のつくものもなかつたとは推定し得られぬことである。

ナが動詞の未來分詞に連なる場合には意嚮(volitive)又は希望の表現となる。例

意嚮又は希望を表すナ

(萬、一) にぎ田津に舟乗せむと月まてばしほもかなひぬ今はこぎでナ

(同、九) あぶり干す人もあれやもぬれ衣を家にはやらナ旅のしるしに

(同、十四) たかきねに雲のつくのす我さへに君につきなナ高嶺ともひて

(同、十七) 道の中につ美可米は旅ゆきもし知らぬ君を恵みたまはナ

詞の玉緒第七卷(全集五卷一四九頁)には此ナをンの意と説き、「唯此ナはみづからしかせんとする事にのみいひ、他の上をおしはかり疑ふやうのことにいへる例多し」とことわりて、最後の「道の中」の歌を例外として居るが、何故にナガンの意となるかといふ理由を説いて居らぬ。恐らくは一々の歌意から推して臆断したものであらうが、上例の語句に未來の意があるやうに聞えるのは、ナのうけた格が未來分詞なるが爲で、「こぎでバ」「やらバ」「つきなバ」といへば未來助動詞ムを添へずとも未來(豫想)を表示するのと同二事である。

希望の意のナン

此ナが意嚮を意味することは、其から出たナンが未來分詞に連なり希望を表現する語として古今集以下に普く用ひられて居るのを見て明白である。例

(古今) わすれ草かれもやするとつれもなき人の心に霜はおかナン

(同) 人しれずおもふ心は春かすみ立いでて君が目にも見えナン

(拾遺) をくら山みねのもみち葉心あらば今ひとたびのみゆきまたナン

(後選) 白雲のゆくべき山もさだまらずおもふ方にも風はよせナン

右の諸歌にも未來をいふ心もちがあるから、ナンのンは未來助動詞のムであると思つて居るものもあるが、未來の意は上述の如く未來分詞其ものに含まれて居るので、ナンがナメと活用した例のない所を見ても、上記感動のナンと同様にナモから轉訛したものとせねばならぬ。

此ナは又ネと轉訛して希望の意に用ひられた。例

(記、白檮原宮) うかひがとも今すけにこネ

(同、難波高津宮) たかゆくや隼別さゝぎとらさネ

(萬、一) 此をか茶つます子、家のらへ名のらさネ

(同、十四) つくばねの嶺ろに霞居すぎかてにいきづく君をみてやらさネ

右のネが助動詞ニ(ヌ)の命令法ではないことは常に動詞の未來分詞に連るのを見ても明白である。^(二)助動詞ニ(ヌ)は原形につくものである(用言の項下参照)——「來ネ」は「來ナ」^(三)「とらさネ」は「取らさナ」と同じく、口語でもナをネと轉訛することがある。

(一) 本居春庭の「詞通路」には「とらさネ」は「とらせ」、「のらさネ」は「のらせ」の延言として居るが、延言といふものゝ存せぬことは發音の項下に述べる通りである。

(二) 此ナは「あらヌカ」のやうにヌとも用ひた例があるから(前號附記參照)、古は一用言であつたかとも思はれるけれども、他の時格の活用を缺いて居る所を見ると、やはりナといふ助語が色々に轉訛したものとせねばならぬ。

打消の命令法に添付するソネのネも亦之に屬るものである。即ち「鹽干なりありソネ」(萬、二)は「鹽干なありそナ」、「波なさきそネ」(萬、二十)は「波なさきそナ」といふことであらう。

口語のナ、ネ、ノ

ナは口語では概して韻を伸へてナアと發音するが、用法に於ては大差はない。例

早く行かうナ (voitive)

さうしたまへナ (希望)

其人はナア、あのナア (ナモ、ナンに同じ)

東京語ではナ又はナアをネ又はネエと發音する。方言ではノッと訛り「暑いノッ」「早くつたノッ」などいふことがある。

モ も亦自然の發聲である。マア、モシの形に於て今も尙かけ聲に用ひられて居る。助語としては廣く感動の意を表示する。——修飾助語のモとは全然別語である。——此モはカ、ヤ、ソ、ハに連ねて用ひられることが多い。例

モ

(萬、二) 石見なる高角山の木の間よもわが袖ふるを妹見けむカモ

(同、三) こもりくのはつせ少女が手にまける玉はみだれてありといはずヤモ

(古今) 色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅ゾモ

(萬、二) 晝ハモうらさびくらし、夜ハモいきづきあかし

右の外動詞をうけて句末に位する場合もある。例

(記、難波高津宮) 梯だての倉橋山をさかしみと岩かきかねて我手とらすモ

(萬、三) わが行くは久にはあらじ夢のわたせとはならずて淵にてあれモ

(同、一) さざ波の國つみ神のうらさびてあれたるみやこ見れば悲しモ

(同、三) ものゝふの八十字治川のあじろ木にいざよふ波の行方しらすモ

(同、四) 逢はむ夜はいつもあらむを何すとか其よひあひて事のしげきモ

(同、一五) 秋の夜を長みにかあらむなぞこゝばいのねられぬモ獨ぬればか

上記諸例に於て見るが如く、此場合のモは句切に補足的に添付せられたもので、之に連なる動詞の形は文意によつて或は動格(終止形及連體形)又は決定格たり得るものである。

又

(記、日代官) さねざしさがむの小野にもゆる火のほ中に立ちとひし君ハモ

(萬、二) 高ひかるわが日の皇子の萬代に國しらすまし島つ宮ハモ

等のハは結句を省いて餘情を残したもので(第二二頁参照)、モは更に補足的に添付せられたのである。

平安朝以降上記のモの用法は殆ど廢れた。實朝卿が「海人の小舟綱手かなしモ」など詠んだのは寧めづらしい例であつたが、近世萬葉調が流行して再び短歌につかはれるやうになつた。

口語では上記のマア、モンが掛聲として用ひられる外にモツといふ形に於て廣く使用せられる。例

其はモッ感心です

モッ少し下さ

モツちつと(約してモツトと云ふ)

徳川末期の草冊子などに見える「モッ嬉し」は「マッ嬉し」といふことであるが、現代ではマアとモツとは多少用途を異にして居る。

附記。未來助動詞ムから轉訛した次の例のモが感動詞のモと別語なることはいふまでもなし。

(萬、八) 高山の菅の根しぬぎ降る雪のけぬとかいはモ戀のしげけく

(同、十四) かみつけのをどのたどりか可波治にも子らはあはなモ獨のみして

口語のモ

ヤ

開投詞的用法

ヤは自然の發聲である。神武紀に「かむかぜの、伊勢のうみの、大石オホイシに、ヤイ、はいもとへる、したたみの」とあるヤイの如く本來一種のかけ聲で、今の語にも「ヤァ今日は」「ヤァしばらく」のやうに用ひられる。助語としては場合によつて多少の意味を帯びるやうになつたが、本初は全然開投詞的に用ひられたのであつた。例

(記、神代卷) をとめのなすヤ板戸をおそぶらひ

(同、遠飛鳥宮) 笹葉にうつヤあられのたしだしに

(同、朝倉宮) みもろにつくヤ玉垣つきあまし

(古今) 難波津にさくヤこの花冬ごもりいまを春べとさくヤ此はな

(同) 思へどもおもはずとのみいふなればいなヤ思はじおもふかひなし

右の外「天なるヤおとたなばた」「我まつヤしぎはさやらす」「おしてるヤ難波」「つきねふヤ山城」のやうに單に句と句とをつなぐ爲にも用ひられることがある。之から一轉して左の如き用法を生じた。

石見のヤ 高つぬ山 あふみのヤ 鏡の山

菅原ヤ 伏見の里 さゝ波ヤ しがの浦

大原ヤ をしほの山

此等のヤは上の句が枕詞につかはれたことを表現するものであるが、次の句に地名を明言

轉用

せぬ場合にも之を准用することがある。例へば「伊勢の海ヤ釣する海人」「難波江ヤ葦のかり寝」等の上の句は釣、葦にかゝるべき枕詞ではないけれども、尙用法は之に准じたのである。後世之を濫用して「ゆふしでヤ」「さむしろヤ」「萩の葉ヤ」等の如くあらゆる名詞に添付するやうになつた。「高砂ヤ此浦舟に帆をあげて」の如きも其一例で、謡曲、但歌に最多くつかはれて居る。

「これヤこの」「はたヤはた」「いかにヤいかに」のやうに同じ語を重疊する場合にもヤを以て連繫することがある。中世の歌文に「花ヤ紅葉」「雨ヤみぞれ」「歌ヤ詩」などと用ひてあるのは此用法の一變化である。

古來最普く用ひられたヤは感動を表示するものであつた。上記間投詞的のヤ及後述の特別用法を除き、ヤはすべて之に屬するともいひ得る。例

感動のヤ

(記、神代卷) あぢしき高ひこねの神ソヤ

(同、日代宮) 少女の床のへに我おきし劍の太刀その太刀ハヤ^(一)

(同、近飛鳥宮) おきめモヤ近江のおきめあすよりはみ山隠りて見えずかもあらむ

(萬、二) 吾はモヤ安見子得たり皆人の得がてにすといふ安見子得たり

(古今) かひが峯をねこし山越しふく風を人にもがモヤことづてやらん

(後拾遺) 心あらんひとに見せバヤ津の國の難波わたりの春のけしきを

例中ヤの上に接するソ、ハ、モ、バ等は各固有の意味を保有する。例へば「おきめモヤ」の歌は「おきめモ明日日から山にかくれて見えぬだらう」といふ意である。此等の助語は往々省略せられることがある。例へば「あればヤ」を「あれヤ」ともいふ。又助語を省略して其位置にヤを配することもある。例

(記、高津宮) ながみこヤつひに知らむとかりは子産らし

古池ヤ蛙とびこむ水の音

前例のヤはハに、後例はニとかへて聞くべきものである。

又ヤの上にあるべき或る簡単な語句を略することもある。例

あはれなる我みのはて(なり)ヤ浅みどりつひには野邊の霞と思へば

菊の香(のする)ヤ奈良には古き佛達

括弧内は省略せられた語である。此語法の特に俳句に多いのは十七字に制限せられて居るからである。

用言の項下に述べたやうに問を表現する爲に屢ヤを用ひることがあるので(第一八一頁)、ヤ自牒に問又は疑の意を寓するかのやうに解して居るものもあるが、語義上からはさう見ることが出来ぬのみならず、一々の例についても、ヤが疑を意味するか、感動を表現するかを辨明することは困難な場合が多い。其故に上記のカと同様に明に問又は疑を表示して

疑問を表
示するヤ
との辨別

居るものの外、ヤは盡く感動助語と見るのが安全である。左記の歌の如きは問又は疑を意味するものではあるが、ヤを以て之を表示したのではなく、△印の所にあるべきカを省略したのである。

(古今) 秋萩も色つきぬればきりぎりす我ねぬごとや夜は悲しき△

(同) はる霞立つをみ棄てゆく雁は花なき里にすみやならへる△

(同) 夢だにあふ事かたくなりぬるは我やいをねぬ人ヤ忘るる△

ヤを疑の助語と誤解した結果、未來時格の動詞を以て終る推量又は懷疑の意のある句中のヤは疑を表現するものゝやうに見られて居るけれども、其はラム、ラシ、ケムのやうな助動詞に其意味があるので、決してヤに因するものではない。萬葉集には此場合多くは感動のカ(カモ)を用ひて之を表示する。又後世の歌に屢用ひられたナドヤ、ナゾヤのヤをも誰カ、何カのカと混同するものがあるが、ナド、ナゾはいづれもナニゾの約であるから、ナニゾカといふことが出來ぬ限り、ヤに疑の意があるとはいへぬ筈である。古今集に「ナドカ我身をせめぎけん」とあるナドは「何と」又「何とて」の略で、ナニゾの約のナゾとは別語である。

(二) 左に其證歌をあげる。

(古今) 袖ひちて結びし水のこほれるを春立けふの風ヤとくらむ

(同) 夏山にこひしきヤ入にけん聲ふりたててなくほととぎす

(同) 立田川もみぢ亂れて流るめり渡らばにしき中ヤたえなん

ヤは上記諸例に於て見るが如く未來格の外、動詞の各形に連ることが出来るが、原則としては文脈に影響を及さず、其有無によつて動詞の形はかはることがないのである。例へば「すみならへる」「見てしのばん」といふ句にヤを挿入すれば「すみやならへる」「見てしのばん」の如く原形又は分詞形をうけることとなり、「こひしき(は)なぞ」「ある(事)こひしき、なき(事)悲しき」といふ場合には「こひしきやなぞ」「あるヤ戀しき、なきヤかなしき」のやうに連體形に連るやうに見え、「あらめ」「おもへ」「すべし」の如き句の末にヤが連る時には、「あらめヤ」「おもへヤ」「すべしヤ」となつて決定格又は動格(終止形)をうけるのである。

(一) 宣長が詞の玉緒第四卷に「半におくヤの上は必ずつゞく格の辭より受け、とちめに置きて切るヤの上は必ず切る格の辭よりうくるが定まりなり」と説いたのは稍々意を盡さぬ憾がある。「とちめのヤ」にも決定格及連體形をうけることのあるのは上記の通りで、「半におくヤ」でも「我くろかみはなですヤありけん」は動格(終止形)に連るのである。

ヤモ、ヤハは本來ヤにモ又はハを添へたもので、特別の意義を有する複合詞ではない。萬葉集ではヤハを用ひた例は極めて乏しく、古今集以下にはヤモは殆んどつかはれて居ら

ヤモ、ヤハ

ぬ。ヤモのモには前目の修飾助語と上記の感動助語との二種がある。後者を連ねたものは感動の意が加はるのみであるが、前者は反語となることが多い。例

(萬、三) こゝにして家ヤモいづく白雲のたなびく山をこえて來にけり(感動)

(萬、六) をのこヤモむなしかるべき萬代にかたりつぐべき名はたてずして(反語)

ヤハはヤの意を強めたのみで、ヤと同様に感動の意にも用ひられ、或は反語を表示することがある。例

(新古今) おく露にいろもかはらぬやなぎ葉の香をヤハ人のとめて來つらん(感動)

(古今) 春の夜のみはあやなし梅のはな色こそ見えぬ香ヤハかくる(反語)

(一) 詞の玉緒第五卷にはヤハの一格として、古今集にある「櫻花春加はれる年だにも人の心にあかれヤハせぬ」外六首を掲げ、「あかれヤハせぬ」は「何とてあかれぬぞ、あかれよかし」の意なりといふて居るが、其では花を愛でる意味にならぬ。案するに「あかれヤハせぬ」は單純な問の句で「あかれはせぬか」といふことであらう。次の六首も同様に解釋すればよく會得が出来るやうである。

口語のヤ

現代の口語ではヤの用途は殆んど次の場合に限られてゐる。

詩ヤ歌をよむ 花ヤ紅葉ヤを見る

此用法は中世の歌文にも見えて居る。ヤを重ねたのは單に口調の爲である。又此ヤに接尾語ラを添付することがある。例

踊るヤラはねるヤラ 時計ヤラ指環ヤラ

此外にヤ、アランを略してヤランとし、更にンを省いたヤラが事物の不定なることを表現する意味に於て普く用ひられる。例

どうヤラ出來たらしい 人ヤラ幽霊ヤラわからぬ

ヤとヨとは本來同原から出たものであるから、夙にヤを呼格に用ひた。例へば枕草子、源氏物語に見えた「花ヤ蝶ヤ」は「花ヨ蝶ヨ」である。此場合ヤにイを添へてヤイといふこともある。例

爺ヤ、一太郎ヤイ

此ヤは接尾語のやうに轉用せられることもある。例

五ツまで婆ヤにだかれてねた

又掛聲としてはヤア、ヤイといふ。

附記。古歌には「よしゑヤシ」「はしきヤシ」といふ語が屢用ひられて居る。「はしきヨシ」「よしゑヨサとも」などもいふから、ヤシは上記のヤから分派したものであらう。シは形容接尾語である

イ ヤの轉音らしく思はれるものにイといふ語がある。夙に廢用となり、且用例も餘り多くはないから、沿革は不明であるが、間投詞的に用ひられたものゝやうである。例

- (一) いなといへどかたれ語れとのるにこそ志斐イはまをせしひ語りとのる(萬、三)
- (二) 玉緒のたえずイ妹と結びたる云々(萬、三)
- (三) 我せこの跡ふみもとめおひ行かばきの關守イとゞめなむかも(萬、四)
- (四) むかつをの若かつらの木しつえとりはなまつイ間になげきつるかも(萬、七)
- (五) 藤原朝臣鷹等伊負圖龜一頭獻止(續紀詔)

右の外續紀の詔敕、同じ時代の宣命體文章には此イを用ひた例が多い。朝鮮語にイ(音イ)といふ主格を表現する助語(「此」といふ意味から出たもの)があるから、其と同系の語のやうにも考へられるが、第二第四例のやうに前續語が主格でない場合にもつかはれて居る所を見ると、尙ヤの轉音で感動の意の間投詞と解すべきであらう。但し平安朝に於て一時流行した原因は朝鮮語の影響であつたかも知れぬ。

ヨはヤと同じく本來かけ聲である。現代の口語でもヨッといふ掛け聲は普く用ひられて居る。恐らくはヨとヤとは本初同語であつたのであらう。助語としての意味もヤと大同小異である。例

- (一) あはもヨめにしあれば(紀、神代卷)
- (二) こもヨ、みこもち、ふくしもヨ、みふくしもち(萬、一)
- (三) いまはヨ、いまはヨ、あゝしやを、いまだにも、あごヨ(神武紀)

ヨ

ヨヲ相通

- (四) さねどこもあたはぬかもヨはまつ千鳥ヨ(紀、神代卷)
 - (五) 今は吾はしなむヨ我せ生けりとも吾によるべしといふといはなくに(萬、四)
 - (六) よき人のよしとよく見てよしといひし芳野よく見ヨよき人四來三(萬、一)
- 右の諸例によればヨの用法は後世と大差はない。即ち第一例、第二例の「モヨ」はモヤといふに同じく、第三例のハヨはハヤに同じい。——前目のヤの例中「おきめモヤ近江のおきめ」「我はモヤ安見子得たり」「其太刀ハヤ」と對照せば自ら明白である。——第四例の「あたはぬかもヨ」は「かなヤ」で、第五例の「死なむヨ我せ」は「死なんカナ」の意である。呼格に類するヨ(「濱つ千鳥ヨ」「あごヨ」等)及命令法のヨ(「芳野よくみヨ」)は後世の口語でも普く用ひられる。

此ヨがヲと相通することは既に第一目に述べた通りである。其例にひいた萬葉集第十卷にある「渡守舟渡せヲとよぶ聲の」のヲは上例中「芳野よく見ヨ」のヨと同義なることは勿論である。更に他の例をあぐれば、古事記の日代宮段に

尾張に、ただにむかへる、をつの崎なる、ひとつ松あせヲ、人にありせば、太刀はけましを、きぬきせましを、ひとつ松、あせヲ

といふ歌の「あせヲ」「吾兄ヲ」は前例中のあごヨ(吾兒ヨ)と用法が似て居る。——書紀には「一松あはれ」としてある——此は歌の意には調係のない囃し詞で、恐らくは「吾兄ヨ」即

口語のヨ

ち「オイ兄弟」といふ程の意であらう。

現代口語のヨの用例は次の通りである。

蝶ヨ花ヨと大事がる

呼格

洋犬ヨ来い来い

ヨウしばらく(かけ聲)

そんな事は知らんヨ(間投詞)

呼格のヨはヤと轉訛し、「坊ヤ」「玉(猫)ヤ」などいふことは前條に述べた通りである。近年年少婦人の間に「だはヨ」語といふものが流行し、次の如く用ひられる。但しまだ一般的用法とはなつて居らぬ。

さうだハヨ、もう見たハヨ

此ハヨは感動の意を含むものである。

上記の外感動詞としては古語にヤシ、ヨシ、アア、アナ、アヤ、シヤ、シエ等があり、口語にもアラ、オヤ、ハア、オイ等の外に、第二次生のオヤオヤ、トテモ、ステキ等があるが、他の語と連る事がないから助語と見ることは出来ぬ。又諸否を表示する聲ヲウ、ハイ、ヘイ、エイ、イエ、イヤ等も一種の感動詞又は體言といひ得るが特に説明を與へる必要はないと思ふ。

六 發音

日本語音の性質

語音

語音が種々の音聲の結合から成立するものであることは今日聲音學上何人も之を否認するものはあるまい。日本語の語音も亦大體に於て子音と母韻とから構成せられて居るが、子音は單獨では發音することが出来ぬ。例へばカといふ音は音符文字にて示せばkとaとの二分子から成立するものであるが、aを切り離したkは獨立し得ぬのである。單獨で發音のできぬものを語音とは名付けられぬから、日本語に於てはア、イの如き母韻か、若くは之と子音の結合したカのやうなものを以て語音の單位と見なさねばならぬ。或は我國には子音が之を表現する字母がない爲に獨立を失うたのであるといふものがあるかも知れぬが、漢字音から反切の知識を得、悉曇の建立を學んだ當時の學者が子音と母韻との區別に氣がつかかなかつた筈がないから、若し子音の發音が可能のものであつたなら、縦ひ文字は一個一音節を示すものを便としたか、或は之を採用せざるを得ぬ事情があつたにしても、何等かの方法——例へば支那の三十六母の如き——を以て之を表示することを怠らなかつたであらうと思はれる。五十音圖は悉曇章を模倣したものゝやうであるから、カナ作製者

日本語に於ける子音の性質

非

は十分音符文字の使用法を心得て居たと思はねばならぬ。されば能ふべくは釋迦(Siddha)、佛陀(Buddha)のごときも原音に近く轉寫せんことを希望したであらうし、さうでなくとも漢字音譯の爲には發音符字の存在を便としたであらう。數世紀後に作製せられた朝鮮の諺文(ハングル)は一種の發音符字で、範を梵字にとり、若くは悉曇起原の蒙古字を模倣したものであるといはれて居る。然るに日本語には何等字母の別を示さうとした形跡のないのは、其必要を認めなかつたといふよりも寧ろ、語音として存在して居なかつた爲であると見ねばならぬ。

私は更にカナ發生以前に於ける日本語音と漢字との音譯法について考察して見よう。我々の祖先是 ng n m を以て終る閉音節の漢字を原音の通り發音し得なかつたと見えて、ng は u 又は gu go, n は ni nu, m は mi mu mo など、發音した證據が古書に數多く見える。例へば天のカグ山、カゴ坂王のカグ、カゴは共に鹿兒の意であるから、ko(音便 go, gu)なることは明瞭であるのに之に香の字をあて、ウツン身を嚮瞻とかき、アラナクニ(ニは助語)、見ケム(ムは未來格)を不有君、見監と譯して居る。入聲の宿、越、始がスク、ヲト、アヒの假字に用ひられたのも、子音に母韻を添へて日本語音化して發音して居たことの一證であるといひ得る。

語音の此特質は今日に於ても變りはなく、我々は西洋の言語を學び、子音、母韻の別を

カナの特
色

十分心得て居りながらも、尙 *feet, dog, the* を正しく發音することが困難で、ともすれば *feeto, doggu* に近くなるのである。さりながら邦音の *t, g* 等は西洋字の示す *to, gu* とも多少相違がある。フの音を分析すれば *f* と *u* となり、ジの音は *j* と *i* とに分ち得るけれども、此四つの字母を結び合はせなば、*ts* は英、佛、獨、伊國いづれの人に讀ませてもフジの山のフジの音にはならぬ。其は恰も水を分析すると水素二、酸素一であるけれども、同分量の水素ガスと酸素ガスを一容器にだけただけでは水にならぬと同一の理である。之を要するに日本の語音を最よくあらはす文字は日本字(即ちカナ)の外はないのである。ローマ字で日本語をかけたといふのは發音の根本を改めよといふと同じことで、ローマ字の發音を日本化——我々の祖先が漢字に施したやうに——せぬ限り、我々の語音を之でかき表はすことができるものではない。或は近い音を寫し得ることもあらうが、結局西洋人の日本語で、日本人の日本語にはなり得ない。鸚鵡よく人語を學べども鳥聲たるを免かれぬといふことを我ローマ字論者は知らぬらしい。

右の如く子音が單獨では發音し得られぬから、日本語には閉音節といふものは有り得ぬ。漢字音の韻とする *ng, n, m* が普通ウ、ニ(又はヌ)、ムと音譯せられたことは上記の通りであるが、朝鮮語では子音符 *ㄱ, ㄷ, ㄹ* を以て表現せられる入聲の字の如きも我國では獨立した一個の語音を以て音譯せられた。例へば各(각)をカク、質(질)をシツ、

閉音節の
不存立

答(守)をタフとするの類である。漢字音の入聲は本來ng, n, m韻を極度に促めたものであるから、右の三鼻音と發音位置を同うするカ行、タ行、ハ行——古、ハ行をPと發音したことは次目で述べる——を以て之を表現したのは聲音學上から見ても極めて當然なことである。蓋し右三様の發音位置に於て閉鎖を破つて聲を出せばk, t, pとなり、氣息を鼻孔に放出すればng, n, mとなるからである。梵語の *charma* (達磨)のrの如き韻も日本語ではルといふ語音に移してダルマというた。即ち漢、梵の一閉音節は日本語では二語音——又は其以上——となるのである。

語音と音節

ア行を除くの外、日本語音は西洋風にいへば閉音節であるが、音節(*syllaba*)といふ語は音の群の意で、子音を一語音單位として見た場合、語音との中間構成をいふ呼稱であるから、語音から直接語を構成する場合には不必要である。さりながら後述のやうに拗音、擦音が現出した今日に於てはこれと單純語音とを區別する名目として用ひられねばならぬ。

複子音、
複母韻

今一つの特質は複子音又は複母韻が存立し得なかつた事である。悉曇の系(*Kṛn*)、牙(*Pna*)のやうな音節は日本語ではクラ(*Kura*)、プナ(*Puna*)の如く二語音を以て譯する外はなかつた。——今でもさうである——即ち原音にない母韻を一つ加へたのである。複子音は漢字音にもなかつたので、國語は新に之が出現を促がすやうな刺激を受けずして今日まで其儘傳はつて來たのであるが、複母韻は漢字音讀の心要上、夙に發生したので、今で

ア行の音
で終る語
はない

は上古の日本語には複母韻が存立し得なかつたといふ事をすら氣づかぬやうになつた。さりながら注意して調べて見ると二語音以上より成る固有の日本語でア、オを以て終るものは一つもない。イ、ウ、エを以て終るものは見えるが、其は本來ヤ行のイ、ユ又は利行のウに屬するもので、昔はイ、イ、ウ、ウと發音せられたのであらうと思はれる。例へば骰子は今ではサイといふが、古は「雙六のサエ」(萬、十六)の如くサエと發音せられ、ウマイ(熟睡)のイはイメ(夢)のイと同じくヨ(夜)から分派せられた語である。又用言中ア行に活用せられるものは「得」といふ一語だけであるが、古はエ、ユと變化するヤ行の語であつたことは既に用言の項下に述べた通りである。

此事は漢字音譯に於て最明白に現はれて居る。水(*mi*)、類(*mi*)等のイをスサ、ルキの如く盡く平にあらためたのは母韻の重複を避けんが爲であらねばならぬ。*mi*の如きも *mi*とせられたものらしい。例へば拜はハイと訓むが、ハヤシ(林)といふ地名に拜志又は拜師(和名鈔)といふ字が充てられて居る所を見ると、ハイは *hayi* で、*hai* ではなかつたことが明瞭である。又愛知は書紀、萬葉には吾湯市又は年魚池とあり、愛甲は和名鈔にアエカハといふ地名に充てゝあるから、愛の訓アイは *ai* ではなく、*avi* であつたとせねばならぬ。ハセウ(芭蕉)をハセウとかくのも、此ウが *mi* であつた證據である。

漢音の沙、受の如きは彼に在つては一個の子音と一個の母韻とからなるものであるが、

我國には之に相當する語音がなかつたから、當初はサ、ズともいうたらしく、古事記、萬葉集等にも其假字に充當してある。さりながら其は正しい發音ではないから、火、旅等と共に成るべく原音に近く轉寫する爲に、グエンジ(源氏)、クワンブツ(灌佛)、シャウゴン(莊嚴)のやうなかなづかひがあらはれたのである。此場合今日ならば——複母音の發音が既に久しい以前から可能であるので——グエンジ、クアンブツ、シャウゴンとすべきで、此方が遙に理に適うて居るのであるが、昔の人は殊更にy又はwといふ子音を加へて母韻の重複を迴避したのであつた。寛永板韻鏡(堀秀成著音圖大全解所載)がキャ、クワ等の拗音を掲げ爾來其例にならうたのは古の遺風を遵守したものである。

右の如きかなづかひ若くは其變化したものが今日でも尙墨守せられて居るけれども、聲音學上からいへば理由のないことで、我々は火事をクアジ(或は略してカジといふ)、旅行をリオカウ(又は訛つてリオコウ)といひ、クワ、リヨの如き發音はカナを便りに字音を覺えた人が口にするのみである。國語調査會がキャ、キョ、クワ式の字音がなづかひに改正を加へなかつたのは因習に捉はれた爲ではあるまいか。邦音の研究を忽にして Queen, Rue の如きを態々クエン、リョーとシ、Stein, Genève をシュタイン、ジュネーヴとかつて西洋語の發音をあらはし得たと鼻うごめかして居るものゝあるのは笑止千萬なことである。

濁音は清音變化で、別個の音ではないといふ説(音義大全解)には猝に同意し難いが、本初

濁音

ズデの約

文字と音

濁音がなかつたことは、原語と見るべき語に濁音を用ひたものが一つもなく、同一語系に屬すると思はれる朝鮮語、アイヌ語では今でも音便によるの外、音を濁ることのないのを見ても肯定せねばならぬ。さりながら濁音の發生は打消の助動詞ズト、ト、トの條下に述べたやうに、極めて古いことで、——おそらく高天原人が將來したのであらう——音便の外は、意識して之を用ひたのであるから、之を表現する特別の字形はないけれども、尙獨立した語音と見るのが至當である。ナガカに轉じたのは少くとも nga, ga といふ語音の存して居たことを證明するものである。日本語では濁音は同音異義の識別及音の省約の場合に用ひられた。上記のズ、ジを始め、ハカリ(計)をバカリ(助語)とし、接尾語ヒとヒ、キとギとを區別したるが如き類である。又ズテをデとしたのは省約の標識に濁音を用ひたことの一例である(第一六八頁参照)。

音韻

五十音圖は其が作製せられた當時に於ても、總ての語音を網羅したものではなかつた。上記濁音及パ行(半濁音と稱するもの)は勿論、f, ng, kh等の音が存して居たと思はれる形跡があり、方言には尙其以外の語音もあり得た筈であるが、最少限度に於て之を以て言語を書き現はし得るとせられたのであらう。言語は決して個々の音の組合はせのみによつて

表現し得られるものではなく、音の長短、高低、強弱、抑揚等が大なる要素をなすのであるが、其は決して萬人一律であり得ぬのみならず、聞く人の耳によつても印象を異にするのである。例へば我々は鳥の聲はカァカァ、鶏鳴はコケッコォーときめて居るが、西洋人の耳にはクロウ、又はケキリキリーと鳴くと聞えるさうである。其故に如何なる文字、如何なる音符を以てするも、寸毫の遺憾なく原音を描寫することは出来ぬ。唯社會が認められた一定の符號を介して各自の了解に訴へるのみである。此意味に於てカナは伸縮自在で極めて重寶なものではあるが、音符としては聊か漠然たることを免かれぬ。ことにハ行の如き變遷の劇しい語音に在つては現代の發音を寫すに適せぬこと、ローマ字論者又は一部のかなづかひ改正論者の説の通りであるが、音韻の本質を明にせずして猥に文字又は綴字法を改めんとするのは國語を墮落に導くものといはねばならぬ。以下に記述する所はカナが表示する音を説明するのではなく、日本の語音の研究について乏しい私の管見を披瀝して大方の教を乞はんとするのである。——便宜の爲、私は五十音圖の順序に従うて、行毎に記述する。濁音、半濁音及類似音等は各々其清音の條下に攝する。

ア行

ア行(母韻) 上古の母韻はア、イ、ウの三音のみであつたらうと思はれる事は既に述べた通りであるが——チャムバーレン等も亦此説を稱へた——傳説が語り繼がれるやうになつた頃の標準語には既に五韻が(其用途に廣狹はあつたにしても)備はつて居たやうである

から、茲には三韻時代には觸れぬことにする。但し沖繩語にはエ、オ韻なく、東北地方ではイとエとが混淆せられる場合の多いことに留意すべきである。

母韻の伸縮長短には一定の規則はないが、最長音に在つてはアア、イイ、ウウ、エエ、オオのやうに聞えることがある。

ア行とヤ行及ワ行

イ、エにはア行のものと同ヤ行のものとあり、ウにもア行のものとワ行のものとがある。本初は勿論異つて發音せられたのであらうが、古事記、萬葉集の編輯せられた頃には既に其區別がなくなつて居たと見えて、用字上から之を辨別することが困難——不可能でないとしても——になつた。ア行のイ、エ、オとワ行のキ、エ、ヲとはカナ文字も異り、文語では嚴重に區別して居るけれども、口語では殆ど同様に發音せられる。但しア行のイ、ウ、エ、オが開口音なるに對し、ワ行のキ、ウ、エ、ヲが合口語であつたことだけは確實である。例へば漢字音の語尾の ng に充てられたウは開口音ではあり得ぬから、必然ワ行のウであらねばならぬ。

昔は母韻の重複を厭うて其やうな場合にはヤ行若くはワ行の語音を用ひたことは既に述べた通りである。ヤ行、ワ行はイ又はウと五母韻とが結合したものであるから、之を充當したのは宜に適ふものであるといはねばならぬ——英語でも y 及 w は半母韻と稱へられるのである。

カ行

カ行の範疇に屬するものの中には悉曇の対(三三)のやうな音もあつたのでなからうかといふ疑を私は代名詞の條下に述べて置いた(第八六頁参照)。漢字の朝鮮音と對比して見ても、我日本語でカ行に發音せられる河、何、蝦、汗、旱、寒、翰、漢、恨、害、亥、行、好、和、禾等は鮮語では總て古(ハ行)を發聲とするのである。

ガ行にngの音があつたことも亦前に述べた通りである。カグヤマ(香山)、シグレ(鐘禮)、サガム(相模)、アタゴ(愛宕)の香、鐘、相、宕はngを韻とするものであるのに、之をガ行の假字にあてたのは右のガ、グ、ゴがga gu goと發音せられて居たからであると思はねばならぬ。現代の口語でもマガリ(曲)、カギ(鍵)、カグ(艀)、スゲ(菅)、コエタゴ(肥桶)等のガ、ギ、グ、ゲ、ゴはリと發音せられるのである。 *まじりこまじり ng とす*

サ行

サ行のシ及タ行のチが同行の他の四語とは發聲を異にし、sh(ś)、ch(tś)を子音とするといふことは定説となつて居る。本來さうであつたか、或は昔はsi、tiであつたかは不明であるが、カナは必しも一行一律に同子音を發聲とすることを表示するものではないから、シ、チがサ、タ等と子音を異にして居ると別に不思議とするに足らず、或は初から両者が併立共存して居たのかも知れぬ。sの外にś音のシもあると小倉進平氏(發音概説)はいうたが、私も之に同意する。江戸訛のシ(火)、シト(人)の如きは必然! (ś)であらねばならぬ。

カ行の音の分類表
カ行: e, ai, i, u, ai, u, ai, u
タ行: tu, ai, tu, ai, tu, ai, tu

濁音ジ、チも上記と同一の理由で、現在s, dと發音せられる。チについては尙次のタ行に於て述べる。

(一) 小倉氏の此著作は日本語及朝鮮語の發音を聲音學の原理から説明したもので、我々語學に志すものに大なる裨益を與へた。音韻の特質、異同は此書に詳であるから、私は敢へて蛇足を加へず、此名著を讀者に推薦することを以て満足とする。

タ行

タ行 チについては上述の通りであるが、ツも亦現在ハと發音して居る。其が原音であるか、口蓋音化した爲に訛つたものであるか判明せぬが、之に關する西洋の日本語研究者の論争はカナが的確に一語音のみを表示するものであらねばならぬといふ豫斷から出發したもののやうであるから、私の立場からいへば一顧の價値もない。譬へばchiとśふ音節は西洋諸國ではチともシともキともヒとも發音するのであるが、昔は一律にチ(又はシ、又はキ、又はヒ)であつたと斷定するものはあるまい。恐らくは日本語にもti, tu 兩音があつていづれにもツのカナを用ひ、語によつて發音を異にしたのであらう。

ヂ、ヅの發音も今ではジsi、ズzuといふものが多いことは事實であるが、dの音が日本國民の耳と口とから全然消えてしまふたと斷定することは出來ね筈である。土佐では今日でも尙di, duに近い發音が残つて居るから、現状に於てはヂ、ヅの假字によつて示される語音は三種であると見ねばならぬ。然るに國語調査會では活用言のかなづかひの外はチ、ヅ

を用ひぬことに定めたといふことであるが——學問上の問題を多數決やジャン拳できめることが出来るものとは思はれぬけれども——恐らくはズにはd又はd^hといふ音が少しも含まれて居らぬといふことに気がつかないのであらう。

ナ行 上記の^hはナに近く發音せられることもある。助語のナがノ(no)ともガ(ga)とも變化するのは、既記の如く、原音が^hであつたからであらう。i^hを以て表示せられる語音は我國には存在しなかつたらしい。

ハ行 今のハ行の語音が昔はP音で、其からf音に轉じ、遂に今の音になつたのであるとは英人エドキンス、チャムバーレン等の東洋學者が唱道した説で、上田萬年博士によつて祖述せられ、當時異論紛々であつたが、今では定説として誰も怪しまぬやうになつた。さりながら今のハ行が盡くf音を経てP音に還元すべきものとは考へられぬことは小倉氏の所論の通りである。私はP、h兩音のみならず、fも同時に併立共存し、ハ行は此等諸音を總括的にあらはすものであつたと信ずる。「伊勢の海のオイシ(大石)に」(記、神代卷)の如くオホイシがオイシと約せられ、「青丹寸天、白丹寸天」(同上)のやうにタへをテと約したのを見ると、ホがpo又はto、ヘがpe又はfeの如き唇音であつたとは考へられぬ。——タビ(手火—乗炬)は^hであるが故に、チとは約せられなかつたのである——ハフル(放)からアフル(溢)といふ語が生まれ、ハラヒ(被)がアラヒ(洗)となつた例に照しても、此等のハ

ハ行
カキリ
カワリ
カカリ

立説
p h f 併

Haha Fafa
↓
kaka

カキリ
カワリ
カカリ
ハ行
理由

行語音は喉音であらねばならぬ。書紀の眉輪王を古事記にはマヨワ(眉弱)王とし、ワカレ(別)といふ語を防人歌に「波可禮が行かむ」といひ、ハツカ、サハグがワツカ、サワグとも稱へらるることを見ても、ワとハと相通じたことは明白であるから聲音學上此ハは^hと見るべきである。動詞語尾のヒ、フ、ヘをイ、ウ、エと訛つたのは鎌倉時代以前からの事であるが、若し一部の人の主張するが如く其當時h音がなかつたとすれば、唇音のf音が喉音のア行に轉じた理由を説明することができない。活用接尾語がヒとビとに分れ、ビに四段活のものゝ二段活のものがあるのは(第六一、六二頁參照)h、p、fを區別する爲ではなかつたらうか。ハ行濁音が^hであると同時に^v(fの濁音)をも表示するものであつたことを忘れてはならぬ。

マ行 ウベ(宜)、ウマ(馬)、ウメ(梅)をムベ、ムマ、ムメともかいた例のあることによつて、古mといふ字音が獨立して發音せられ(換言すれば語音として存立し)、m-be, m-ma, m-me. といふたことがあつたのであらうと推斷した小倉氏の説は聞くべきであると思ふ。此はミクロネシア諸語にも例のあることで、例へばトルク語ではm-mangは大馬鹿、パラウ語の m-ei. は大舟といふことである。子音は獨立しては發音せられぬことを例とするが、ン(n)が一個の語音となつたやうに、mも亦單獨で發音せられることが有り得た筈である。さりながら此語音は後記のやうにンと混同せられて、今では全く姿を没した。

ヤ行

ヤ行 イ、エがア行のイ、エと混一せられたことは既に述べた通りである。奥羽地方ではユキ(雪)をジッキなどいふこと、英語のjの發音と趣を同うして居るのは頗る注意すべきことであるが、私はまだ其理由を研究して居らぬ。

ラ行

ラ行 エ(ユ)がレ(ル)と轉化することは既に助動詞キ(得)の條下に述べた通りである(第一六二頁)。仙臺地方ではツロイ(強)をツロイといひ、其他の方言でもラ行をヤ行に(或ツロイはヤ行をラ行に)訛る例は少くはない——ラ(ラカ)、ロ(ロカ)がヤ(ヤカ)、ヨ(ヨカ)ともいはれることは既に接尾語の條下に述べた——此は發音部位の變化によるものであるが、舌端に振動を起さぬ所を見ると、國語のラ行はlと發音せられたか、若くはせられ得るものと見ねばならぬ。現代の標準語では常にrと發音せられる。

ワ行

ワ行 本初ウと五母韻とが結びついた語音であつたらうと思はれるが、發聲が甚しく薄弱となり、キ、ウ、エ、ヲが殆どア行即ち母韻と同様に發音せられることは上述の通りである。ワも亦決してものウアではなく、一種特別の語音となつた。其故に英語のWをワックスというては英人にはわからぬ。又日本語のワ(輪)をwaとかいて示したら、西洋人はウアと發音するであらう。今のワは寧ろ發音符字vaを以て示すべきものである。此ことが世間一般に了解せられたなら、「私ハ」のハを發音通りワとかくことを咎めるものが少くなるであらう。感動詞に用ひられる場合には「またどれへやら行くワ」(狂言記・宗論)、「我は

日本一のことを企みたいワ」(醒睡笑)のやうに、室町時代からワとかいても怪しまれなかつたのである。

撥音

撥音 古の語音には撥音も促音も存在しなかつた。天然の響、鳥獸の聲には勿論此種の音も存して居るのであるが、語音は昔も今も決してあらゆる音響を實寫し得るものではなく、唯人間の備へて居るものを以て、成るべく近く之を模倣することが出来るといふのみである。されば昔の人の意識では太鼓の響の琴々はドロドロでよいとせられ、風の音の颯々はサヤサヤと聞なしたのである。右の理由により漢字音のng, m, nといふ韻も當初はウ、ム(モ)、ニ(ヌ)の如き語音にあらためられたのであるが、漢音に習熟するに従ひ、原音を學んでnといふ語音が生まれ、カナのニの尻を撥ねて作つたンといふ假字——んはハといふ變體カナから作られたのである——を以て表現し、m, n韻に共通に充當するのみならず、未來助動詞のムにも適用せられた。さりながらかくして出來たンはm, nよりも寧ろngに近く發音せられたから、ngがウと譯せられたと同一の理由の下に、ウとも發音するやうになつたのである。例へば行カムは行カンとなり、更に行カウと訛つた(次頁参照)。此音は獨立して發音せられ、雲雨、運動の如きは、文字にはウンウ、ウンドウとかくが、實際の發音はンム、ンドウである。但し他の語音につゞく場合には前續語音と合して一音節を構成する。例へば「千噸」はセンととンの二音節より成るものである。

ンの發音

促音

西洋の促音と相違

促音^{ツマ} 漢字の入聲を寫すにフ、ツ(チ)、ク(キ)を用ひたことは上述の通りであるが、甲冑、鼈甲、獨鈞のやうな物件が其稱呼と共に輸入せられるに及び、原音の儘發音せられるやうはなり、遂には次第に掲げるやうに他の語にも及ぼされたのである。文字にかく場合には當初は已む得ずカフチュウ、ベチカフ、ドクコ等としたが、成るべく發音に近く寫さんとする努力から、ツの字を以て標識する方法が案出せられた。——ツは勿論音を寫したものではなく、助語のツと同じく連繫の意味から轉用せられたのであらう。古い例には引ツ組ミテをヒクミテ、却ツテをカヘテのやうにツを挿入せぬものがある。——さりながら之を英語の cat, dog, apple, lesser 等と同一視することは出来ぬ。彼に在りては特別に縮まつた母韻を用ひた場合か、若くは二つの子音が重なつたため、氣息が舌の位置をかへることなくして、普通の音の二倍の長さに亘る音を出す爲に、邦語の促音と同様に聞えるのであるが、日本語では一語音が全體として促められるのであるから、決して子音が殘存することはない。其故に引ツ組ミを hik-kumi、引ツ立テを hit-tate と轉寫すれば相似た音になるが、hik, hit の如き k, t 音は實際には存在せぬのである。されば強てローマ字で示す爲には hi-tate, hik-kumi のやうな符號を用ひる外はあるまい。apple, lesser に於ける複子音はいはゞ一種の伸音であるが、日本語では極度に短縮せられた語音が獨立を失うて前續語音の附庸となるのであるから、促音といふ名稱が適當して居るのである。此場合促音

なまよつ
かうあ?

と其前續語音とは一音節をなすものと見なされねばならぬ。

音 便

音便の意味

音便といふ語の定義は漠然たるもので、國學者、文法家中には各自説があるやうであるが、私のいふ音便は其やうなむづかしいものではなく、語義を變更修飾せぬ音の變化といふ位の意味で、敢て規則を設けて之を律さうとするのではなく、現に行はれ、或は昔行はれた變化について二、三の説明を試みんとするに過ぎぬ。私の見る所では此等の變化は單に發音の便宜上から起つたもので、別に變化を促さねばならぬ理由があつたとも思はれぬから、其意味に於て音便といふ熟語をかりたのである。

同行變化

同行變化

同行中の語音は必要に應じて彼此相通ずる。例へばウヲ(魚)はイヲ、イヅク(何處)はイヅコ、オレ(己)はオラ、タワヤメはタヲヤメともいひ、タダチ(直)の古語はタダテであつた。カウベ(頭)をコウベ、タイ(鯛)をテイ、マラス(申)をマウスといふが如く、現代口語にも普く行はれて居ることで、此やうな例をあげたら數限りもないが、一定の標準があつて變化するわけではなく、單に慣用によるものである。其故に「ベチに差支はありませんか」といへば唯でも「別に」といふ意には解するけれども、あの人は片言をいふ——古い用例があるにも拘はらず——というて笑ふのである。さりながら此片言が流行

して一般に用ひられるやうになれば、音便といはれるのであるから、此やうな變化が可能であることを認めねばならぬ。

同列變化

タナラ相通

同列變化 五十音圖の同じ段にある他の語音に變化することをいふ。これは任意の行に變化するものではなく、發音部位の近いものに限るやうである。古來タナラ相通というて、舌音に屬するタ行、ナ行、ラ行は互に通はして用ひられた。例へばハタハタがハナハダ(甚)となり、イタダキ(頂)をイナダキといひ、ハンマ(播磨)、スンカ(駿河)とかいてハリマ、スルガと發音する。動詞アリ(有)が既述のやうにアイヌ語でも沖繩語でも、アン(又はン)であるのは音便——いづれが原語であるかわからぬが——によつて變化したものと思はれる。平家物語等にはアルナリをアムナリ又はアンナリ、カルメリをカムメリと用ひた例が少くはない。サカリ(盛)をサカン、ノコリ(殘)をノコン、クダリ(條、件)をクダンといふのも此音便に屬する。ユエン(所以)も恐らくはユエ(ア)リの轉訛であらう。

サ行とタ行、バ行とマ行

サ行とタ行、バ行とマ行とも亦同し理由によつて相通する。常立トコの神は紀の一言には底立尊とあり、イザサの小濱イイタサの小濱ともかいてある。上述のやうにヂ、ヅが口語ではジ、ズと發音せられるのも相通音なるが故である。ケブリ(煙)はケムリともいひ、スサビ(荒)はスサミと稱へられることがある。

右の外にも同列變化の異例は少くはないが、決して濫に行はれる譯ではなく、イ列の外

は希である。イ列では「後手にフキツツ」(記、冥界神話)のやうにフリ(振)をフキといひ、ニホ(鳩)、ニナ(蜷)はミホ、ミナとも稱へられ、ヒギ(搏風板)は後世専らチギとよばれた。動詞のケシ(消)、ハナシ(放)はケチ、ハナチともいはれるのである。

イ、ウ音便

此種の音便中最多く用ひられるのはキ及シをイ、クをウとするもので、今の口語でも普く意識して用ひて居ることであるから、例證を省略する。言ヒタリをイウタリ、飲ミテをノウデといふが如くヒ、ミをウとするのは音韻共に變化をうけた異例であるかのやうに見えるが、其實は二次に轉訛したものである。即ちヒは同行の他の語音と共にア行に同列變化してイとなつたのが、更に同行變化によつてウに轉じたのである——イウテと音を伸はすことの代りにイツテの如く促めることもある。——其故に二段活の語コヒ(戀)、シヒ(強オヒ(生)の如きはコイテ、シイテ、オイテとはいふが、コウテ、シウテ、オウテとは變化せぬのである。ミも亦音を促めてmとなつたのが、ンと轉し、更に前續語音との類化(後記参照)をうけてウと訛つたのであるから、ノミ(飲)、タノミ(頼)、イトナミ(營)の如き特別の語の外は此音便は行はれぬのである。——現代口語ではノンデ、タノンデといふのみで、ウの音便に用ひられぬ。

連濁

連濁と稱へられるものも亦同列變化の一種である。其は二語を連結する場合、後續語の語韻が濁音又はP音(半濁音)たり得れば、之を轉呼することをいふので、シンハシ(新橋)

をシンバシ、コンホン(根本)をコンボンといふ類である。現代口語にも行はれて居ることであるから、説明の必要もないが、アラバ、アレバのバ、行ケドモのドモも亦連濁である(行ケドの下はさうでないことは次條に述べる)ことを氣づかぬものが多いやうである。助語のゾも亦原音はソで——コソといふ場合には清んで發音する——他語に連ねて用ひられるが爲に濁音化したのである。

撥音便

撥音便 固有の撥音(漢字音を含む)の外に、音便によつて音を撥ねることがある。ワラハベ(童)をワランベ、ネモコロ(懇)をネンゴロ、ヌキイヅ(擢出)をヌキンヅといふが如きは之に屬する。——ユエン(所以)はユエ(ア)リの音便であることは上に述べた。無クンバ、有ラズンバ、爲テンゲリ等も、無クバ、有ラズハ、爲テケリにンを挿入したものではなく、無ク(ア)ラバ、有ラズ(ア)ラバ、爲テ(ア)リケリの約である。日本語には無意義に語音を挿入することは有り得ぬのである。——此音便は多くは口調の便宜によるものゝやうであるが、ニ、ミ、ヒガンと發音せられる場合の多いのは理由のあることである。ニは當初漢字音のニを寫すに用ひられた程であるから、之をンと發音することのあるのは少しも不思議ではない。死ンダ、去ンダといふことの外に、助語のニも亦ンとなることがある。例へばイカニ(如何に)をイカン、ナカニツク(就中)をナカンヅクといひ、イツクニゾ(何處にぞ)はイツクンゾといはれるのである。

ミを促めて發音すればmとなるから——mが獨立し得る音であることは既に述べた通りである——之をンと變化したのは至當の事で、讀ンデ、飲ンダリ、怪シンダの如く發音せられるのである。此ンが既述の如くnよりも寧ろngに近く發音せられるやうになつた結果、漢字のng韻轉寫の場合と同じく、ウと訛つて飲ウダ、頼ウダなどともいふやうになつたのである。ピは同列變化によりミとなり得るものであるから、右に准じて飛ンデ、並ンダの如く轉化するのである。

促音便

促音便 上記撥音便と同じく固有の促音(漢字音を含む)の外に音便によつて聲を促めることがある。ヲヒト(男人)をヲット(夫)、タフトシ(貴)をタットシ、カチテ(勝ちて)をカッテ、ヤツコ(家子)をヤッコ(奴)、ヒキタテ(引立)をヒッタテ、トクト(疾と)をトットといふが如く、多くは漢字入聲の轉寫に用ひられる語音、即ちヒ、フ、チ、ツ、キ、ク等が促められるのであるが——恐らくは漢字音の感化によるものであらう——用言の語尾のりも亦之に准じて促められることがある。例へば欲リスをホッス、降りテをフッテといひ、アリタリはアッタリといふことがあるのである。助動詞のタリ、ケリがタ、ケとなつたのも、極度に促めた結果りの音が消えたので、之を省略したのではない。其故にダッケ(タリケリ)とつづける場合には促音が再現するのである。

ハットリ(服部)、マッシロ(眞白)、モツパラ(專)、モットモ(最)、ウッタへ(訴)等は古書に

はハトリ、マシロ、モハラ、モトモ、ウタへとかいてあるが故に、兩語間に促音が加はつたかのやうに考へて居るものもあるやうであるが、之はハタオリ(機織)、マツシロ(ツは連繫語でマナツルのナと同一質のもの)、マツバラ(マ詳)、^マトモ(第八一頁に出づ)、^{モト}タへ(タ平は上申の意)の促まつたもので、ハトリ、モトモ等とかいてハットリ、モットモとも發音したのであらう。——却ツテを鎌倉時代にはカヘテとかいたことは上述の通りである——アツパレ、ゼツピの如きもアハレ(哀)、ゼヒ(是非)をアアハレ、ゼエヒの如く發音したことがあつて、其が更に促められたのではあるまいか。マツタク(全)等も同様であらうと思ふが、私はまた之が理由を研究して居らぬ。

類化 (Assimilation)も亦同行又は同列變化の一種であるが、唯前後の語音の影響によつて起ることを異りとする。母韻の類化(同行變化)はコヒシ(戀)をコホシ、ヨラシ(良)をヨロシの如く變化した例はあるが、日本語に於ては判然とあらはれて居らぬ。之に反し子音類化(同列變化)の形跡は明瞭で、前續語の影響によるのは撥音又は促音の後に來る語音に限られて居るやうである。大槻氏の廣文典に據つて最普通に用ひられる數例をあげる。

ナムアミダブツ(南無阿彌陀佛)——ナムマイダブ
ゼンアク(善惡)——ゼンナク

類化

サムキ(三位)——サムミ
シンエ(嗔恚)——シンネ
ウンウ(雲雨)——ウンム。
ウンウン(云々)——ウンヌン。
インエン(因縁)——インネン。
クワンオン(觀音)——クワンノン。
オンヤウシ(陰陽師)——オンミヤウジ
サンヨウ(算用)——サンニョウ
セツイン(雪隠)——セツチン
ゼツオン(舌音)——ゼツトン

雲は文韻即ちnであるからウンヌ。となるべきであるが、ウンムと
いうて居るやうである。

即ちア、イ、ウ、エ、オは前續語の韻がm又はnなるによつてマ行又はナ行に同列變化し(ウンムは異例)、ヤ行はミ又はニを加へる。又促音に連る場合には之に類化せられてア行にかはるのである。

止ンデ(ヤミテ)、死ンデ(シニテ)、飛ンデ(トビテ)の如くテを濁るのは連濁であるとも説明し得られるが、尙ン(ng)の影響をうけて無聲音が有聲音化した(濁音になつた)とも解すべきである。又室町時代から江戸時代までの口語に用ひられた「切腹ノ(を)仕リ」「兩人ナ

(は)承リ」のナ、ノも前續語に類化せられたものであらう。

上記の如くアリナリをアンナリ、カルメリをカムメリといひ、「件^{ツク}ノ如し」「殘^コノ雪」のやうにラ行がナ行にかはる事も亦、見方によつては後續語頭のn又はm音の類化であるといふ事ができる。但しナ、ラ兩行の相通は本來發音部位を同する事に因るものであるから、サカリ(盛)の如きサカンデアルとも、サカンラシイともいひ得られるのである。

省約 語音の省約には二つの場合がある。其一つは常用の語が簡約せられて短い形となるので、他は二語を連絡する場合、語間に行はれる約縮(Contraction)である。後者は約言又は縮言と稱せられて、過重視せられて居るが、日本語に於ては約言又は縮言は隣接民族語ほどは甚しくはなく、一定の場合の外は殆ど行はれぬというても差支がない。之に反して前者には餘り世人は注意して居らぬやうであるが、用言及助語の項下にも述べたやうに頗る重要なものがある。例へば助語のデはシテ、ニシテ、モチテ、ヨリテ等が簡約せられて出來た語である。此場合簡約の行はれた語は可能なる限り濁音となるのである。行ケド、見レドのドはトモを約したもので、決してドモのモを省いたのではない。——モを省くと反接の意がなくなる——マテニをマデといひ、ナニソ、ナリトモが約せられてナドとなることは各々其條下で述べた通りである。バ(場)、ド(處)の如きは我々が日常用ひて居る語であるが、ニハ(庭)、トコ(床)又はトコロ(口は接尾語)の約であることを知る人は少

省約

約濁

い。神名及上代の人名に屢々見えるビ——熊野。久須毘命、大直毘神、大日毘命(開化天皇)等——はヒコ(日子、彦)を簡約したものであらう。ウマシアシカビヒコヂの神のチはツチ又はチチの約で、オホヂ(大父)、ヲヂ(小父)のヂも單にチを連濁したものとすることは出來ぬ。ノタマハク(日)の約はノタバク(萬、二十)である。フミヒト(文人)をフビト、ホシシシ(乾肉)をホジシ、オホキミマチ(正親町)をオホギマチといふのも此例に屬する。——濁音の此作用については先覺に説がないやうであるから、私は假に約濁といふ名を與へて置く(第二八一頁參照)。

濁音たり得ぬ語も亦簡約せらるゝことがある。イへ(家)をへ(戸)といひ、オモヒ(思)をモヒといふ類である。助動詞アリ(有)は結合の場合にはラム、ラシ、ラレ、ラクの如く上昇して用ひられることが多い。シ(爲)といふ動詞も亦ナシ(産、成、作、爲等の意)の省語であるかも知れぬ。

語間の約縮は後續又が母韻化可能の語音(ヤ行、ワ行、ハ行の如き)を以て始まり、若くは一定の動詞である場合に限られたもので、漢音の反切法の如く、前續語の子音と後續語の母韻とが結びついて省約が起るといふことは日本語音の本質上寧ろ希有である。然るに國學者の多くは延約説に惑はされて、意義不明の語に出あふごとに都合のよささうな二語に分析して説明を下さうとする傾がある。眞淵について最よく反功法をふり廻したのは宣

反切法の誤解

長及其一派の學者で、ユツ——ユは齋、忌等の字をあてゝ居るが、支那にない宗教觀念を表現する語で、ツミ(罪障)、ケガ(過穢)、トガ(咎恙)、マガ(曲災)の反對、即ちイミ(忌)、キヨ(淨)、ダダ(直)、マサ(正)等の意を含むものである。——をイホツ(五百個)の約であるといひ、「ケ長く」のケをキ(來)、へ(經)の約と説いた(第二五頁参照)。ヒトトセ(一年)、チトセ(千歲)のトセはトシ(年)、へ(經)の意であるとするに至つては(詞通路)殆ど滑稽に類するもので、何が故にトシの音便(同行變化)と説明してはならぬのか、殆ど了解に苦しむのである。

後續語が母韻で始まる場合にも必しも反切の法則によるとはきまつて居らぬ。ハヤウマ(早馬)からハユマ(驛)といふ語が生まれ、用言の項下に述べたやうに飲ミアリ、降リアリはノメリ、フレリと約せられるのである。又「と言フ」はトフともテフともチフとも約せられる。

最多く用ひられる約言はニアリ又はノアリの約ナリ、トアリ又はテアリの約タリ、クアリの約カリ、ズアリの約ザリ、キアリの約ケリ等であるが、用言の項下に詳述したやうに此諸語は音を省約すると同時に、アリが助動詞として用ひられて居ることをも標識して居るので、決してクアリ、ズアリ等と全然同一語と見ることは出来ぬ。春庭は如クアリをゴトカリといへぬことを不思議としたが(詞通路)、如クは本質上助動詞アリと結合して繼續

法又は完了格をつくることのできぬ語である。「いつはなも戀ひズアリとはアラねども」(萬、十二)は「こひザルとはあらねども」とは聊意味が異ふことに注意せねばならぬ。

約言の例を一々舉示することは煩はしいが、萬葉集にあるものから一、三を拾へば、ニヒナアへ——新肴饗の意、春庭がニヒノアへの約としたのは誤である——はニヒナへ(新骨)となり、吳の藍はクレナキと稱へられる。ワギへ(我家)、アルミ(荒海)、カフチ(河内)、ヤヌチ(屋内)、モタゲ(持上)、カカゲ(搔上)等は説明を待たずとも明白な約言である。

二つの母韻が連用せられることは日本語音の本質上あり得なかつたのであるが、音便によつてアフ(逢)がアウ、オフ(負)がオウ、エヒ(醉)がエイと變化した結果、兩母韻が更に約せらばアウ、オウはオー、エイはエーの如く發音せられるやうになつた。此オー、エーには尙若干ウ、イの原韻が、残つて居るから、之を間單にo、uと轉寫することは出来ぬ。ローマ字論者には先づ此等の問題を解決する義務があると思ふ。

附記。眞淵以來右の約言又は縮言の外に延言又は伸言といふものゝ存在を説くものがある。其は音を約すると同様に反切の法を逆用して語音を加へることが古語にあり得たとするのである。春庭の「詞通路」は最細に之を論述したもので、サ行、ハ行、ラ行延言の三種にわけて居る。之に對して疑を挿んだ國學者、文法家も少くはないが、まだ積極的に否認したものはないやうであるから、私は茲に此妄説を打破する爲に一言を費

すことにする。

屢述べた通り日本語の本質として無用に語音を加へることはない。語音が加はれば必然意味も如はるのであるから、延言又は伸言とよぶことは出来ぬ。春庭がサ行の延言として掲げたものを見るに、活用接尾語シの條下(第五七頁)に附記したマシ又はナシと結合した複合語、即ち行カシ、知ラシの類とミシ(見爲)といふ語とであるが、之は行キ、知リ、見を延べていふ爲にシを添へたのではなく、其々意味があるのである。

之に附帶して「おしひらカネ」「御格子まゐリネ」「我名問はサネ」は各「おし開ケ」「まゐレ」と「へ」の延言としたのは甚しい謬説で、第一例と第三例のネは希望の意のナの轉音、第二例のネは完了格助動詞ニの命令法であることは各其條下に述べた通りである。動詞の未來分詞を受けたものと、原形に連るものとに別にすら氣がつかなくかつたと思はれる。

ハ行延言の例としてはツギ(續)をツガヒ、ヨソヒ(裝)をヨソホヒ、カクス(隱)をカクサフ等をあげて居るが、單に語を伸ばすだけが目的ならばツガギ、ヨソホニ、カクサツというてもよい筈である。然るに語尾がハ行に限るといふのは理由があらねばならぬ。雅澄も此兩者——原語と伸言——との間には意味の相違があるといひ、山田氏も同様の説を發表して居るが、正に其通りで、ハヒ(延)、アヒ(合)又はカヒ(交)といふ語が動詞の原形と結合したものであらねばならぬ。例へば「言ひツガヒケリ」は「言ひ、

ツギ、ハヒ、ケリ」で、「家ノラへ」は「家ノリ、アへ」である。後世の歌人は既に此語法の由來を忘れたので、ツガヒをツギと同じ意味に用いたものもあり、又意識して反切を逆用した人も有るやうである。モミデニケリをモミダヒニケリと用ひたるが如きは確に其例であるが、語の原則に背いて居るから聞く人の耳に快くは響かぬのである。

ラ行延言は助語中に述べたクの意義(第二三六頁参照)を知らずに牽強附會した説であるから、カ、サ、タ、ハ、マ、ラよりクに延ばすといふ理由は示し得なかつたのである。雅澄がフラクは「降る事」の意としたのは卓見であるが、尙此クが「いひシク」「我シク」のクと同語であることを説かなかつたのは遺憾である。

之を要するに延言(又は伸言)といふものは日本語の本質上あり得ぬことである。

附錄
證歌釋義

小序。本編に引用した歌詠の数は三百數十首に上るが、長歌は勿論、短歌でも必要の句のみを擧げた場合が多いので、参照の爲、首尾を備へた全き形ものを巻末に再録するつもりであつたが、主として例證を古事記、日本紀、萬葉集に取つたので、原文の儘では讀みにくいのみならず訓み方についても古來疑義のある點も少くはないから、之を漢字交りの平かな文に書き改めることにしても尙、若干の註釋を施さねばなるまいかと考へて居た所へ、書肆からも同様の希望が出たので、大略次の要領によつて此「證歌釋義」を記述したのである。

一、記、紀の歌は原書の順序に従ひ、萬葉集の歌は巻別にして本編引用の序列によつて掲載し、他書と参照の便宜の爲め、國歌大觀と同一の番號を附した。——古今集以下の歌は多くは意味が明白であり、且本文にも全首引用してあるから、之を省略した。

二、誦讀中に意味が了解せられるやうに、正しい漢字を出来るだけ多く充當する事にしたが、縦ひ慣用字であつても借字アテジ又は不當な義譯は之を用ひぬ事にした。例へば白妙シロタヘ、新玉アラタマ、山縣ヤマガタ、檀弓マユミの類である——此等の字が誤譯であることは次々の註釋中に述べる。

三、片かなを用ひてかいてあるのは漢字で逐語譯のできぬもの、本文と参照を要するもの並に註釋を加へた語である。例へばオスヒ、吾ハモヨ、ヤスミンシンの類である。

四、度々あらはれるヤスミシシ、新タマノのやうな語でも註釋は一ヶ所に施したのみであるから卷末の索引から檢出せられたい。

五、簡約を期するため語釋上の論議は一切省略した。新説を主張するものが論據を詳述せぬのは不都合であるといふ非難もあらうし、臆斷の譏を免かれぬ虞もあるが、近く刀江書院から刊行せられる古語大辭典に擧げてあるから之を省略した。

初版の此稿は僅々十日の間に起筆したものであるから、手許にないものは勿論、持ち合はせの書物でも、一々参照することが出来なかつたので、後人の改竄に氣つかず其儘轉寫し、誤訓を踏襲したのもあつたので今次改版にあたり、盡く之を改訂した(昭和三年七月)。

古事記

(神代卷) 八千矛の 神の命は 八洲國 妻まぎかねて 遠々し 越の國に 賢し女を 在りと
聞かして 細し女を 在りと聞こして サ呼ばひに あり立たし 婚ひに あり通は
セ」 太刀が緒も 未だ解かずテ オスヒをも 未だ解かねバ 少女の 鳴すヤ板戸
を オソブラヒ 我立たせれば ヒコヅラヒ 我立たせれば 青山に ヌエは鳴き
サ野つ鳥 雉はどよむ 庭つ鳥 雞はなく うたれたくも 鳴くなる鳥か 此の鳥も
うち止めコセネ」 イシタフヤ 天馳使 事の語りごとも 此をば

二六、一一九、二二一、二三四

オスヒはソ(衣)及モ(裳)の上にきる衣服で、一枚の布を引廻しのやうに纏うたのである。上古は男女ともに裝飾用にも防寒防雨の爲にも、家居にも行旅にも用ひたらしい。布というても粗製剛剛したものであるから、今も田舎人の用ひる絲ダテと稱する産に近かつたらうと思はれる。オソブラヒは押し放ラヒ、ヒコヅラヒは引きツラネの意である。ヌエは鳥の名に相違はないが、頼政か射落した異禽とは別のものであらねばならぬ。ヌエ草といふ草もあるから、ヌエの語義は別に存したものであらうと思ふが、私には判明せぬ。ウチ止メヨセネは「止めて呉れ」といふことである(第一六六頁参照)。歌は右を以て終つて居る。あとの四句は古歌を朗誦する場合に添へてい

た語であらうといはれて居る。次の歌にも同じ句があり、或は單に「事の語りことも此をば」のみ添へたものもある。イシタフヤは天馳使(天使)の枕詞で、石飛といふ意である。石を抛けて信號とした古習があつたらしいとはアツサ弓及玉ツサの語釋に於て詳述する。此四句の意は「之を天使の語り言といふ」といふことである。

(同) 八千矛の 神の命 ヌエ草の 女にしあれば 我心 浦渚の鳥ぞ 今こそは 千鳥に

あらめ 後は ナ鳥にあらむを 生命は な死せたまひそ」イシタフヤ云々 二二三

ヌエ草がメ(芽、女)にかゝる枕詞であることは疑がないが、どんな草か判明せぬ。ナ鳥は食用鳥の意で——ケ(主食)及シシ(獸肉)にあらぬ食品は魚でも蔬菜でも總てナと稱へた。サカナ(酒ナ)のナも其である——之を汝の鳥にいひかけたのである。「今は心が騒いで居るが、後には御意に従ふから落膽なさるな」といふ意である。

(同) 青山に 日がカクラバ ぬば玉の 夜は出なむ 朝日の 笑み榮え來て タクヅスの

白き腕 泡雪の ワカヤル胸 ソたたき たたきマナガリ マ玉手 たま手さしまき
モモ長に いは寝さむを あやに な戀ひ聞こし 八千矛の 神のみこと」 事の語
りごととも 此をば 三二、三六、一二八

タクヅヌは樹皮を敲いて作つた綱——タクといふ木ではない——の意で、白の枕詞である。ワカヤルは若といふ語の中性動詞(第一一五頁参照)、マナガリはマタガリの音便(發音の項下参照)、モモ

は諸のモノ疊語で共にといふ意である。

(同) ぬば玉の 黒き御衣を マつぶさに 取裝ひ 沖つ鳥 身見るとき ハタタ肝 これは
適はず 邊つ波 そに脱き棄て 翠鳥の 青き御衣を マつぶさに 取裝ひ 沖つ鳥
身見るとき ハタタ肝 こも適はず 邊つ波 そにぬぎ棄て 山ガタに 蒔きし ア
タネつき 染木が汁に 染め衣を マつぶさに 取裝ひ 沖つ鳥 身見るとき ハタ
タ肝 此シ宜し」 イトコヤの 妹の命 群鳥の 我が群れいなば ひけ鳥の 我が
ヒケいなば 泣かじとは 汝は言ふとも 大和の 一本薄 うなぶかし 汝が泣かさ
マク 朝雨の サ霧に立たむぞ 若草の 妻の命」 事の語りことも 此をば
三二、二〇二、二二二

傍點を施したものは皆枕詞であるが、此の如き濫用は古歌の體ではない(本文枕詞の條下参照)。宇治拾遺に見えた「フリフリに夜の更けて、サリサリに寒きに、フリチウ罽丸をアリチウ炙らん」の類で、寧ろあひに近いとせねばならぬ。沖つ鳥ムナのつぎ合ひは確説を缺くが、邊つ波は磯にかゝり、ハタタ肝は心にかゝるのである。昔の人は腹中にムラ(群)肝とハタ肝——鱸と同語、羽の如きものをいふ。ハタタに其疊尾語(第二二頁参照)である——とが心(コ又はココロ)を取圍んで居るものと考へて居たらしい。アタネは勿論茜であらう。ポリネシア語ではカは常にタに轉訛する。「山ガタに蒔きし茜(赤根)春き」は染木の序である。ヒケはヒキ(引)の音便と解すべきであ

らう。山ガタとイトコとの釋義は他の歌の條下で述べる。

此シ宜シまでの三十句はイトコ(最濃)といはんが爲の序で、歌の意は「泣かぬというても私か立つた後で一本薄のやうに悄然とうな垂れて泣くことが朝霧のサ霧の中に面影に見えようぞ」といふに止まるのである。

(同) 八千矛の 神の命や 吾が大國主こそは 男に坐せば 打見る 鳥のさきさき かき
見る 磯のさきおちず 若草の 妻もたせらめ 吾ハモヨ 女にしあれば 汝を置て
男はなし」 あや垣の フハヤが下に ムシ衾 ニコヤが下に タク衾 さやくが下
に 泡雪の ワカヤル胸 タク綱の 白き腕 ソたたき たたきマナガリ マ玉手
たま手さしまき モモ長に いをしなせ」 豊御酒たてまつらせ 三九、一五九

初の一節の意味は明白であるが、アヤ垣以下の數句は記傳の曲解に誤まられて居るものが多いやうである。此は八千矛の神が方々で女に逢ふことを形容したので、嫡妃スセリ姫の寢所をいふのではない。フハヤは檜葉屋の意、ムシ衾はムシ即ち苧麻製の衾、タク衾は樹皮をたつき展べた衾で、いづれも其ころ普通に用ひられた寢具である。泡雪以下は上述の通りである。此は上記四つの歌と共に神語といふ歌曲であるから、スセリ姫が奇妬であつたといふ傳説のみに捉はれて解すべきものではない。

(同) 天なるや おと棚機の うながせる 玉のミスマル ミスマルの あな玉はや ミ谷

二わたらす アジシキ 高ヒコネの神ソヤ

二二八

アジシキ高ヒコネの神を歌うた夷振といふ曲である。歌の意は織女の頸にかけた聯珠の美しい孔玉は谷二つに互る高ヒコネの神の光彩艶麗に類するといふことである。ミ谷のミは接頭語である(第三四頁参照)。

(白檮原宮) 宇陀の タカキに 鳴良張る 我が待つや 鳴は塞らず イスクハシ 鯨さやる」

コナミが ナ乞はさば タチソバの 實の無ケクを こきしヒエネ ウハナリが ナ
乞はさば イチサカキ 實の多ケクを こきだヒエネ」 エエ シヤコシヤ 此はイ
ゴノフぞ アア シヤコシヤ 此はあざ笑ふぞ 三七、五五

イスクハシは勇強の意、タカキについては本文に説がある。歌の本旨は鯨サヤルまでで終り、コナミ以下は囃である。此は押機を設けて神武天皇を討ち奉らんとした兄宇迦斯が失敗を嘲笑せられたもので、「鳴良を張つて待つて居た所へ大鯨が引かゝつたやうなものだ」といふ意である。ワガは兄ウカシ自身のことである(此用法は本文第八七頁に詳述してある)。

コナミは子持女、ウハナリは大ハナリと同語で、若い女をいふのであるが、後世前妻(又は本妻)及後妻(又は妾)の區別稱呼に轉用せられたので、此一聯の意義が難解となつたのである。ヒエは「引据ゑ」といふ意。コキシ、コキタのシ、タは接尾語で、コキはココと同じく許多の意である。之を要するに此一段の意味は「子持女がナ(副食物)を呉れというたら實の無いタチソバをやれ、

若い女が呉れというたら、イチサカキの實の多い奴を與へ」といふのである。イチ、タチは接頭語、ツバは柚、サカキは榮木で、いづれも種名ではない。

エエ、シヤコシヤ、アア、シヤコシヤは「オオ、其々」といふ程の意である。イコノフは憩イキヒといふ動詞の語幹に活用接尾語ナヒ(第七〇頁参照)がついたもので、一息するといふことであらう。

(同) 大坂オサカの 大室屋オホムロに 人多オホに 來入り居り 人多オホに 入り居りとも ミヅミヅシ 久米の子が

株クサツツイ 石ツツイもち 撃ちてしやまむ」 ミヅミヅシ 久米の子が

ク
ブツツイ 石ツツイもち 今撃たばヨラシ 五〇、二四九

ツツイはツイの疊頭語、ツイのイはエの轉音であるから、衝柄ツキエの意即ち杖と同語で、クブ(株)のついて居るものをクブツツイ、石のついて居るものを石ツツイというたのであらう。即ち今のカケヤの類で、ツチ(槌)といふ語もツツイの約ではあるまいか——ツツは槌、イは助語とする説は言語學的には成立せぬ——ミヅはメデ(愛賞)と同原から出た語である。

(同) 神風の 伊勢イセのうみの オヒシに 匂ニホひもとほるふ 細螺シノクミの イハヒもとほり 撃ちてしやまむ 三五、二八六

上五句はイハヒモトホリの序で、イハヒは齋の意である。書紀によれば此歌は國見岳の八十梟帥討伐の際の御製で、其前に天神地祇を祀られた事が出て居る。モトホリは廻ることであるが、後の神功皇后の御製にもホギモトホシとあり、反復して行ふ意があるのである。

(同) タタ並めて イナサの山の 木の間ヨモ イ行き守らひ 戦へば 我ハヤ痿ぬ 鳥つ

鳥 鶺鴒ウカヒが伴 今助けに來ネ 二二六一

タタナメテは楯並べてといふことであるが、こゝでは伊那佐の山のイ(射)にかけた序である。鳥ツ鳥はウの枕詞。

(同) 大和の 高さじ野を ナナ行く 少女ども 誰をしまかむ 一〇〇

マカムは求めむといふ意で、マケ(任、設)も之から出た語である。

(同) 佐井川ヨ 雲立ち渡り 畝火山 木の葉さやぎぬ 風吹かむとす

畝火山 ひるは雲とゐ タざれば かぜ吹かむとソ 木の葉さやげる 二二八

兩首共に神武天皇の皇后イスケヨリ姫が所出の三皇子に身邊の危険を暗示せられた歌で、其意は明白であるが、其場に居られた筈のタギシミの命(神武天皇の長子で、イスケヨリ姫を犯し、其三異母弟を殺さうとした人)に覺られなかつたといふことについては疑がある。筑紫のアダ族のアヒラ姫を母とした此皇子は大和の語には堪能でなかつたのではあるまいか。

(水垣宮) 此ハヤ ミマキ入彦ハヤ」 オノガ長を 盗み死せむと 後つとよ イ行きたがひ

前つとよ イ行きたがひ 窺はくシラニト」 ミマキ入彦ハヤ 一六六、二三〇

オノガは「我々の」といふことである(第八八頁参照)。後つと、前つとのトはタ(方)の轉音(第四六頁参照)である。歌の意は「我々の長(天皇)を殺さうとして前後から行ちがひうかがうて居るのも

知らいで」といふので、首尾にミマキ入彦ハヤ(崇神天皇の御名)をつけたのは「天皇様も御いとしや」といふほどの意味である。諷示ではなく極めて露骨な告發であるから、大彦の命も驚いて直に引かへしたのである。

(日代宮) ヤツメサス 出雲梟帥が 佩ける太刀 ツヅラ多卷き サ身なしに哀れ 二二六

ヤツメサスは彌ツ芽刺で、嚴藻にかゝる枕詞。ツヅラはツラ(蔓)の疊頭語(第二頁参照)である。

出雲土豪の太刀に身のないのが笑止であるといふ意である。

(同) サねざし さがむの小野に モユルひの ホナカに立ちて 問ひし君ハモ 二六、一一一

橘姫入水の條下にあけてあるので、焼津の災厄を追想して詠んだものと説かれて居るが、語には少しも其やうな意味はない。モユルヒは耀ルヒ(カギロヒ)と同義で、ホナカ——ホノカ(仄)の轉音——の枕詞に用ひられて居るのである。サネサシは根差で、サ(麻)にかかる枕詞である。上三句は序。初戀の昔を偲んだ歌である。

(同) 新ばり 筑波をすぎて いく夜カねつる

カガなべて 夜にはこの夜 日には十日を

四〇、二二七

新ばりは舊説の如く新墾の意、新ばりをツク(築、作)といふ意で筑波にいひかけたものである。倭建命の御間に對し火焼の老人が言下に九夜即ち十日と答へたので、東の國造に任せられたとあるが、他の扈從者が皇子の歌を解し得なかつたのでも、之に答へ得なかつたのでもない。唯火焼

翁がカカナヘテといふ語をつかうたのを賞美せられたのである。カガは篝火の事で、翁は職掌上毎夕篝火——照明にも、煖をとる爲にも、猛獸を禦ぐ爲にも必要であつた——を焚くからカガを並べて九日を経たといふことを、日をならべてといふ意にかけたのである。時にとつて皇子が興を催されたことは想像に餘りがある。

(同) 久方の 天の香山 トカマに さ渡るクビ ひはぼそ たわや腕を まかむとは 吾

はすれど サ寝むとは 吾は思へど 汝が着せる オスヒの裾に ツキ立ちにけり

二二、二七

トカマが誰彼時、クビが鶴の意であることは本文に述べた通りである。オスヒは上述のやうに古代の外套であるが、ミヤズ姫は之を裝飾の爲に着用して居たのであらう。上五句はタワヤ腕をいふ序で、歌の意は「やさ腕を枕にして一緒に寝ようと思つたのにオスヒの裾に經血がついて居るわい」といふのであるが、「ツキ(大陰)立ちにけり」といふ結びの一句をいはんが爲に、香山の夕まぐれ鶴のなきわたる光景をのべたのである。

(同) 高光る 日の皇子 ヤスミシシ 我大君 アラタマノ 年が來經れば アラタマノ

月は來經行く ウベナウベナ 君待ちがたに 我が着せる オスヒの裾に ツキ立た

二五七

なむヨ

ヤスミシシの語義は萬葉集第一卷の註釋に詳述する。アラタマノはアラタ(新)、モノ(物)の音

便で、更革アラタるものといふ意である。「年月は經行アツくものであるから私のオスヒの裾にもツキが立ちもしよう」と巧ウツクにいひなしたのである。

(同) 尾張オウヱに 直ナに向へる 尾津オウツの崎サキなる 一つ松 アセヲ 一つ松 人にアリセバ 太刀タチ佩ハけましを 衣キヌ着キせましを 一つ松 アセヲ 一五五

アセヲは 吾兄アセヨ(セは男子の敬稱)で、神武天皇御製中にあるアゴヨと同じく一種の感動詞である(神武紀の歌参照)。

(同) 大和は 國クニのマホロバ タタナヅク 青垣山 こもれる 大和しうるはし 二九、三三
ナヅクは並ナミ着キク意で、轉じてはマトヒツク(纏繞)、ナレル(狎妮)ことをもいふのである。次の歌にもナヅキ、ナヅムとあり、ナヅの木(枯野の歌参照)のやうに用ひられた例もある。タタ及マホロバの意義は本文に述べた通りである。

(同) 命イハレの 全ヘケむ人は 疊ヘ菰グ 平群ヘの山の クマ樫クマが葉を ウズにさせ其子 五四
クマ樫の次の吉野の國栖の歌にあるカラ樫と同一物ではあるまいか。ウズは髪にさす一種の護符をいふものゝやうである。タタミコモは手で編むタタむ着キ裳モで、本來服装具の名である。ヘリ(縁)を施してあつたのでヘグリの枕詞に用ひられたのであらう。

(同) 少女メウメの 床トの邊ヘに 我ワが置きし 劍ツルギの太刀 其太刀ハヤ 二六六
タチ(斷タチ)、ツルギ(貫切ツルギ)は刀劍の効用に對して與へられた名であるが、必しも別種のものでは

ない。其故にツムガリ(尖刈ツムガリ)又は草薙の太刀を叢雲の劍ともいふのである。劍の太刀若くは劍太刀と重ねて用ひた例は萬葉集にも多く見え、いづれも劍若くは太刀をいふのである。

(同) ナヅキの田ノ 稻莖ノに いながらに 匂ニひもとほろふ 野老ノづら 二三一
淺篠原 腰ナヅム 空ハ行かず 足ヨ行くナ 一四
濱つ千鳥 濱ヨハ行かず 磯傳ふ 二〇五

大葬オホムスヒに用ひられる挽歌四首の中である。記には倭建命の遺族の傷身哭泣を詠じたものとしてある。ナヅキ、ナヅムの語義は上述の通りで、ナヅキの田は御陵に觸接する田の意であらう。歌の意味は稻莖にまとひつく野老の蔓のやうに匂ひまわるといふことである。篠原に行き惱み、磯の岩間を傳ひ行くやうに、身も心も傷むことを詠じたものと思はれる。

(詞意比宮) いざアギ 振熊アギが 痛手イタおはズバ 鳩鳥トビの 淡海アワミの海に かづきせなワ 八五
アキは朝鮮語阿只と同じく我子即ちアゴであるといふ金澤博士の説が當を得て居ると思ふ。神武天皇の御製にアゴヨといふ語が用ひられたと同様に、此イザアギも一種の感動詞で、英語の My Dear にあたる。「振熊の手にかかるよりも寧ろ入水して死なむ」といふ意である。

(同) 此神酒ミカヅは 我神酒ミカヅならず クシクシの神 常世トヨヨに坐イマす 岩イハたたす スクナ御神スクナミカの 神壽カキき ほぎくるほし 豐壽トヨシき ほぎもとほし まつりこし神酒ミカヅぞ あさアサず食クハせ ササ 二五
クシの神は藥の神即ちスクナヒコの神をいふ。スクナ御神に——ここにノとあるはニと解すべ

きである。ノ、ニは同原から分れた語である——献つた御酒であるから、澤山めしがれといふ意である。

(同) 此神酒を かみけむ人は 其鼓 白に立てて 歌ひツツ かみけれかも 舞ひツツ

かみけれかも 此神酒の あやに ウタ樂し ササ 二六、二四五

ウタは歌の原語で、エヒ(醉)、エラグ(噓樂)のユから分派せられ、歡樂を意味する。

(明宮) ちばの 葛野を見れば 百千足る やにはも見ゆ 國のホも見ゆ 三三

應神天皇が近江へ行幸の際、宇治野から葛野を望見せられた實景を叙べられたものである。ヤニハは齋庭の義である。

(同) 此蟹や いづくの蟹 モモツタフ 角賀の蟹 横さらふ いづくに至る いちぢ島

ミ島に着き 鳩鳥の かづき息づき シナダユフ さざなみ路を すくくと 我い

ませば 木幡の道に 逢はしし少女 ウシロデは ヲダテロかも 花實好し ヒヒ

シなす 櫟堰の ワニサの土を 初土は 肌あからけみ 極土は 土黒き故 三つ栗

の 其中つ土を カブツク マヒにはあてず 眉がき 濃にかきたれ 逢はしし女

かもがと 我見し子ら かくもがと 吾見し子に ウタタケダニ 向ひ居るかも イ

添ひ居るかも 四六、五〇、二五四

應神天皇が近江へ行幸の途次、木幡村でワニのヤカハエ姫に逢はれて翌日還御の際、其家に立

よられた所が、姫の父ヒブレの臣が大御饗を奉り、右のヤカハエ姫がお酌をしたから、天皇頗る御満悦で、即興でお詠みになつた歌である。此蟹と歌ひおこされたのは御肴の中に蟹があつたからであらう。歌の大意は「昨日後を見た姫がお側に侍つて居るのは嬉しい」といふことである。

——宜長は前半の意を誤解して居るやうである——モモツタフは「諸集ふ」の意で、ツ(津)にかゝる枕詞、シナダユフは恐らくは「風戸結ふ」で笹にかゝるのであらう。ウシロデはヲダテロかもは本文の解釋の通りである。ヒヒシはヒシ(菱)の疊頭語で(第二頁)、キシ(雉)をキギシといふと同例である。恐らくは櫟堰といふ池の輪廓を形容したのであらう。ワニサはハニ迫の音便で、ハニは赤土又は黄土といふ字をあてた例もあるから、一般に色土をいうたものと思はれる。カブツク、マヒといふ關聯は私には不明であるが——從來の説明には承服しかねる——日又は火にあてぬといふ意である。ウタケは歡喜、ダニは直ニの約である。「花實好し」から「濃にかきたれ」まではヤカハエ姫の艶姿をいうたので、此うもあゝも思うた娘といふことの序である。

(同) イザ子ども 野蒜摘みに 蒜摘みに 我が行く道の カ細シ 花橋は 上枝は 鳥居

枯らし 下枝は 人取り枯らし 三つ栗の 中つ枝の ホツモリ 赤ら少女を イザ

ささばよらしナ 二四

ホツモリは穂薈の意、イザササバは誘ひナサバの約である(第五六頁参照)。

(同) 道の尻 木幡少女を 争はず 寝しクをしもぞ 麗はしミ思ふ 二三七

附録 證歌釋義 三一九

歌の意は本文に述べた通りである。

(同) 品田の 日の皇子 大ささぎ 大ささぎ 佩かせる太刀 もとつるぎ 末ふゆ 冬木
ノス からがしたきの サヤサヤ 二六

本が劍で末がフレて居るといふから、瓜哇の蛇形劍(クリス)のやうな太刀であつたのであらう。カシは葉を飲食物器に用ひた木の總稱であるが、此頃はすでに或る種類の木の名稱となり、其變種にカラガシ——韓又は柄の意——といふものがあつたと見える。冬木ノスはカラ(枯)にかゝる枕詞で、ノスのノは助語、スはシ(其)の轉音であらうと思はれる。即ち冬木ノスは「冬木のやうな其」といふ意であらう。此ノスはナスともいひ、「如」と同様に用ひられて居るが、ナスがナセルとも、ナサンとも活用せぬのを見ると、動詞でないことは勿論である。タキは手工の意(第五三頁參照)カラ榎作りの鞘をサヤサヤ(囃)にいひかけたのであらう。

(同) 榎のフに ヨクスをつくり 横白に かみし大神酒 ウマラに 聞しもち食ぜ まろ
がチ 四九

フは生で産地の意。第二句のヨクスは善き栖(住所)を横白にいひかけたのである。さうでない「榎のフに」といふ前句が生きて來ぬ。横白は太丸太を二つに割り、其平な面を削り窪めたもので、今でも山村では水受などに用ひて居る(今氏談)。酒をかみ入れる器である。チは尊稱。

(同) チハヤブル 宇治の渡に 棹とり 速ケム人し 我モコに來む 四五

チハヤブルのチは上述のチの原語で、靈異の力、ハヤは捷健の意、ブルは活用接尾語(第七一頁參照)であるから、チハヤブルは勇者の形容で、神、氏、人の枕詞になるのである。モコのモはモロ(諸)、モモ(百)のモと同じく相伴ふ意で、コは處である。其故にモコは「許」の意にも、「共」の意にもなるのである。

(同) チハヤ人 宇治の渡の 渡り瀬に 立てる アツサ弓マ弓 イ切らむと 心は念へど
イ取らむと 心は念へど 本方は 君を思ひで 末方は 妹を思出 イラナケク 其
處に思出 悲しケク 此處に思ひで イ切らず來る アツサ弓マ弓 二四、二二八

アツサ弓マ弓を梓及檀の木で作つた弓と解するのは俗説である。梓は弓になる木ではなく、檀は弓材となるが故にマユミと命名せられたのである。案ずるにマ弓は普通の弓、アツサ弓は其と制式を異にしたものであらう。アツはウテと同語で、投擲を意味し——チャモロ語では投石機をアツ。バト(バトは石)といひ、アイヌ語でも投槍をアトチウといふ——サは刺の語幹で、箭の意にも用ひられたから(天武紀に射中ニ一箭とある)、アツサは投箭の義であらねばならぬ。しからはアツサ弓は投箭弓であるが、其制式は判明せぬ。イラナケクはウラナシと同語で、ウララカでないことをいふのである。此は宇治の稚郎子の歌で、自分を殺さうとした兄大山守を憎めども、近親の情誼上、矢を中てるに忍びなかつたといふ意がよくあらはれて居る。

(高津宮) 山ガタに 蒔ける青菜も 吉備人と 共にシ摘めば たぬしくもあるカ 二五三

山ガタは山アガタの約、アガタは吾田である。古は天皇の御料地をも、臣下の私領をもアガタというたが、天皇の御アガタは追々と擴張せられて、造(宮ツ子)を置かれるやうになり、遂に行政區劃の稱呼になつたのである。こゝのアガタは吉備の黒姫の氏族(海人氏)の私領地の山邊にあるものをいうたのである。

(同) ツギネフヤ 山代河を 川のぼり 我が上れば 川の邊に 生ひたてる サシブを
サシブの木 其が下に 生ひ立てる 葉廣ユツ眞椿 其が花の 照りいまし 其が葉
の 廣り坐すは 大君ロカモ 五〇

サシブ契沖説によればヒサカキ(杓)であるといふことである。ユツのユは強て漢字をあてれば齋であるが、こゝでは清いといふことである(第三〇〇頁参照)。ツギネフが山代の枕詞になる理由については色々説があるが、私はまだ納得の行くやうな解釋を發見せぬ。

(同) ツギネフヤ 山代川を ミヤ上り 我のほれば 青土ヨシ 奈良を過ぎ ヲタテ 大
和を過ぎ 我見が欲し 國は葛城 高宮 我家のあたり 五一
ミヤ上りは前の歌の川ノボりに對立するものであるから、「水彌上り」の意であらう。葛城高宮は石の姫皇后の父ソツ彦の領地である。

(同) 御諸の 其タカキなる 大ゐこが原 大猪子が 腹にある 肝ムカフ 心をだにも
相おもはずあらむ 三七

肝ムカフまでは心をいはんが爲の序で、歌の意は「心だにも相思はずあらむや」といふのである。昔の人が腹の中に肝と心とがあると考へて居たことは既に述べた通りである。

(同) 八田の 一本首は 獨居りとも 大君シ 好しと聞こさば 獨り居りとも 二四〇
八田の郎女(仁徳天皇の皇后)に子がないのを天皇憐れがり給ひて「立ちあかれなむアタラ首原」と詠まれたに對する返歌である。歌の意は明白である。

(同) 高行くや 隼別の 御オスヒがね 二五二
高行くは隼の枕詞、オスヒは前に註した通り外套である。ガネは豫の意、こゝでは料と譯すればよい。

(同) 雲雀は 天にかけ 高行くや 隼別 鸚鵡取らさネ 二六一
隼別王の情人女鳥女王の詠と稱せられる歌で、ササキは仁徳天皇の諱である。歌の意は明白である。

(同) 梯立の 倉梯山を さかしみと 磐かきかねて 我が手取ラスモ 二六三
垂仁紀に「神の神庫も樹梯の隨」ともあつて、倉は普通の住宅よりも床を高く作り、梯子をかけて昇降したので、梯立が倉の枕詞となつたのである。

(同) 靈刻 ウチのアソ 汝こそは 世の長人 空見つ 大和の國に 雁卵産と聞くや
五七、一八二、一八三

ウチのアソは氏の長者といふことである。オミ(臣||大身)のうちの最も門地の高いものを後世アソミ(アソ、オミの約)と稱へた。朝臣はあて字である。

(同) 高光る 日の皇子 宜しこそ 問ひ賜へ マコソニ 問ひ賜へ 吾こそは 世の長人
空見つ 大和の國に 雁卵産と 未だ聞かず 二一九、二六七

歌意明白である。

(同) 枯野を 鹽に焼き シが餘り 琴に造り かき弾くや 由良の門の となかの イク
りにふれ立つ ナヅノキの サヤサヤ 二六

イクリは海中の岩即ち英語の *rock* にあたる語である。今でも方言では暗礁をグリと稱へて居る。ナヅは上述のやうに並び付く意で、こゝでは渚の岩礁に沿うて立ち並んで居る木をいふのである。或は上古には我國にもマンガローヴが生育して居たのではあるまいか。

(若櫻宮) たちひ野に ねむと知りせば タツゴモも 持ちて來ましも ねむと知りせば 一五五、二二四

コモは着裳の轉音で、腰以下を覆ふ被服の名である。古は植物纖維を編み若しは手で綜て裳をつくり、之をコモ、コロモ(口は接尾語)ともいうたが、後にはコロモは今我々の來て居るやうな上下つゞいた被服の稱となり、コモは蓆(ムシロ)はモシロで裳の料を意味し、やはり被服の名である)の意に用ひられた。コモに菰の字をあてるのは此軟い草が身體につける編ものをつくるに

適して居るからである。之を帷の代にもちひる場合にはタツコモと稱へた。忽卒の際寢具をも携へずして墨江の皇子の亂をさけられたことを履中天皇が詠まれたのである。

(同) 大坂に 逢ふや 少女ヲ 道問へば 直には告らず タギマ道をのる 一九一

タギマは當麻とかくが、勿論あて字で、湍瀾の意から得た名であらう。

(遠飛鳥宮) 笹葉に うつや霰の タシダシに む寝てむ後は 人謀カユとも」 うるはしと サ
寝ンサ寝てば 荊菰の みだれば亂れ サ寝ンサ寝てば 二六五

タシダシは霰が笹葉をうつ音(昔の人にはさう聞えたと見える)であるが、足シ足シ即ち満足にといふことにいひかけたのである。荊菰はミダレの枕詞で、サは接頭語、シはソ(助語)である。

(同) 君が行き ケ長くなりぬ 山たづの 迎を行かむ 待つにはまたし 二二五

萬葉集第二卷には第三句以下が「山たづね迎へか行かむ待ちにかまたむ」となつて居り、歌意も明瞭であるが、古事記のものは三句ヤマタツが疑問とせられて居る。これは早く廢語となつたと見えて、記の條下にも是今造木也と註してあるが、其造木がまた議論の種となつた。種々の説があるが、タツキと同一く山路の葉であらう。末句は「行くには行けず」「まつには待てず」など口語でも用ひる語法である。

(同) コモリクの 初瀬の川の 上つ瀬に イ杭をうち 下つ瀬に マ杭をうち イ杭には
鏡をかけ マ杭には マ玉をかけ マ玉なす 吾が念ふ妹 鏡なす 吾が念ふ妻 在

りと言はばコソニ 家にも行かめ 國をも偲シヤばめ

二一九

コモリクは瀧り處の義であるが、何が故に初瀬にかゝるのか不明である。ハツ瀬のハツはホツ(最)、フト(太)と同語で、最上流の瀬又は大なる湍といふことであるから——其故に長谷ともかくのである——地形によつてコモリクを枕詞としたのではあるまいか。イ杭はマ杭に對する語であるから、イクヒを齋杭の意とすれば、マ杭は御杭ミマの音便であらねばならぬ。鏡と玉とは神に獻る幣ヒラとして用ひられるものである。郷里に残した愛人の死を悲しむ意が明白にあらはれて居る。輕太子が同母妹輕郎女と情死せられたたときの歌とする古事記の傳承は恐らくは誤であらう。

(朝倉宮) 引田ヒキタの 若栗栖原ワカヅナハラ わかくへに ゐ寝てましも 老いにけるかな 二二六

ヒケタ、クルスは地名であるが、——クルスは國栖の訛であらうと言はれて居る——こゝでは低野の幼栗林といふ意に用ひ、ワカクへ即ち若い時分といふことの序としたのである。

(同) ミモロに 築くや靈垣クマガキ 築き餘し タにかも依らむ 神の宮人 二二五

モロはムロ(室)の音便で、土を掘り下げて作つた家であるが、ミといふ美稱を冠すると、ヤ(屋)がミヤ(宮)になると同様に、神社を意味するのである。タマガキは御室の周圍に匝らす垣であるが、今の神社の玉垣のやうに若干の石柱を築き、其各個を宮人、即ち神の氏子の坐席の凭れ柱としたものらしい(拙著「太平洋民族誌」神社の章下參照)。此歌は「神主が所要の數よりも多く靈垣の柱をつくつたが、其中どれに倚らうとするのであるか」といふ意で、天皇を神の宮人に、自分を

築き餘しのタマガキに譬へたのである。——宣長、守部以下皆解釋を誤つて居る。——タはドとも轉化し、必しも人間をさすものでないことは代名詞の條下に述べた通りである(第九一頁參照)。

(同) アグラキの 神の御手もち 弾く琴に マヒする女ヲミナ 常世トコヨにもカモ 二五六

アグラは上座アゲクラの約である。上古は土又は床ユカの上に坐るのが普通であつたが、貴人は榻を用ひ、之をアグラと稱へた。マヒ(舞)は幣といふ義もあるので、神の縁語として用ひられたのである。アグラ居の神は天皇御自身のことである。

(近飛鳥宮) 置女オキメモヤ 近江の置女 明日よりは ミ山隠りて 見えずカモあらむ 二六六二七三

歌意明白である。オキメは老女を意味する。

日本紀

(神代紀) 沖つ藻は 邊にはよれども サ寢床も 與はぬかもヨ 濱つ千鳥ヨ 二七三

サは接頭語(第二六頁参照)、「寢床を與ふ」といふ語は上代屢々同衾の意に用ひられた。歌の意は「沖の藻は岸邊に寄ることもあるといふに同寢を拒むことよ」といふので、豊吾田津姫を無情の濱千鳥にたとへたのである。

(神武紀) 神風の 伊勢の海の 大石に ヤイ 匍ひもとへる 細螺の アゴヨ 細螺の イハ 二六五

古事記白檮原宮の段にあげたのと同じ歌で、オイシをオホイシといひ、モトホロフ、モトホリをモトヘル、モトヘリとしたのは傳承を異にしたのであらう。アゴヨはヤイと同じく感動詞である。尙次の歌に於て述べる。

(同) 今ハヨ 今ハヨ アア シヤヲ 今だにも アゴヨ 今だにも アゴヨ 二七二

アゴヨは吾兒ヨでアアと同じく感動詞的に用ひられたのである。アセヲ、アギなどというた例もある。シヤヲは「其よ」といふ程の意、今ダニは「今直に」である。口語に譯して見ると「今、今、オオ、其よ、今すぐ、今すぐ」となり、極めて事情急迫したときの獎勵の聲で、歌ではない。

(同) エミシ男ヒタリ モモナヒト 人はいへども 手むかひもせず 一〇〇

エミシのシは熊襲、國栖、木曾等のス、ソと同義で、集團の意である。エミはユミ(弓)の轉音で、此民族が射術を善くすることをいふのである。エビス、エゾは皆エミシの轉訛であらう。歌の意は「エミシの男一つあれば百人に敵するといふが、手むかひもせぬ」といふことである。此歌は神武天皇が忍坂邑の大室屋に敵の嚙類を招き寄せて鏖殺せられたときの御製であるから、大和の八十梟師と稱するものは今いふアイヌ族であつたと思はれる。

(應神紀) 水溜る ヨサミの池に 蕪くり 延ケク知らに 堰杭つく 河俣江の 菱殻の 刺ケク 一五七

ク知らに 吾が心し イヤをこにして
ヨサミは勿論池の名ではあるが、寄水の意で命名せられたのであらう。延ケク、刺ケクは延ヘシコト、刺シシコトの意である。延ケラク、刺ケラクの如き繼續語法(第一四頁参照)と混同せぬやうにせねばならぬ——歌の大意は「底意の存する所を知らなかつたのは愚であつた」といふことである。

(仁德紀) 角障ハフ 石の姫が オホロカニ 聞こさぬ ウラ桑の木 寄るマジキ 川の隈々 一七二

角障ハフは岩の枕詞である。鹿の角が岩に障はるといふ意から出たのであらう。オホロカのロカは接尾語(第五〇頁)で、原義はオホ(大、凡)であるが、轉義によつて「大様に」といふ意にも用ひられるのである。ウラクハはイラ桑即ちイラのある桑といふことであらう。當時石の姫は筒木

の韓人ヌリノミの許で養蠶傳習中であつたので、「容易には許し給はぬイラ桑の木が、寄る筈でない川隈を傳うて流て行く、皇后御自身はかへり給はずして」と怨言を述べられたのである。

(同) ツギネフ 山城女の子 歟もち うちし大根 根白の 白腕 卷カズケバこそ 知らずとも言はめ 一六九

「根白の」までは白腕クナムキの序、歌の意は「添寝した中でなければ或は耳をかさぬといふこともあらうが」と同じく怨を述べられた(天皇が)のである。

(允泰紀) 我せこが 來べき宵なり ササガニの 蜘蛛の行ひ 今夜しるしも 一七五

ササガニは小蟹で、形状相似から用ひられた蜘蛛の枕詞である。

(同) ささらがた 錦のひもを 解きさけて アマタはねずト 唯一夜ノミ 七七、二〇二、二四八

ササラ形は笹の形の意、ラは接尾語である。ヒモはヒメ緒の約で、こゝでは衣の前を結ぶ紐をいふのである。トの語義は本文に註した通りである。迹といふ字があてゝあるので、古來邇の誤寫とする説もあるが、「ねず」といふ語は餘り聞きよくない。

(同) とこしへに 君に逢へやも イサナトリ 海の濱藻の よる時々ヲ 一〇八

イサナトリは磯魚取又は磯菜取の意で(古は主食ケの外は皆ナというた)、海の枕詞である。勇魚イサの義で鯨を意味するといふ説は少くとも此枕詞にはあて嵌まらぬ。いかにとなればウミは大

の意で湖沼淡海をも含んで居るが、琵琶湖で鯨がとれたことは曾て耳にせぬからである。逢へやモは後世なら逢ハメヤといふ所で、反語である。時々ヲのヲは感動助語のモに通ずる。歌の意は「始終逢ふのではないから、夜時々逢ひたい」といふのである。

(雄略紀) あたらしき キナメの匠 かけし墨繩 シがなけば 誰かかけむよ あたら墨繩 九〇

キナメは猪名部である。本来猪名部は船匠であるが、家屋の建築もするやうになつた。其は昔の建築中専門の技術を要したのは多くは彫刻で、舟に施すものと同一工藝に屬したからである。ミクロネシア諸島では今でもさうである。

(推古紀) マ蘇我よ 蘇我の子らは 馬ならば 日向の駒 太刀ならば 吳のマサヒ 宜しかも 一七四

蘇我の子等を 大君の 使ハスラシキ

マは皆接頭語(第三二頁)、サヒは刺刃サシバの義で、劍をいふのである。吳は樂浪をいふのであるが、こゝでは舶來の劍といふほどの事である。

(齋明紀) 山越えて 海渡るとも 面白き イマキのウチは 忘らユマシジ 一六二、一七一

イマキは皇孫建王タケルノミコを葬つた地名で、生母蘇我氏の所領である。ウチは大主の意で、恐らくは御生前もこゝに居住せられたから、イマキのウチとよばれたのであらう。面白きは皇子の御色の白いことを意味する。

萬葉集

(第一卷)

〔七三〕 三芳野の 山の嵐の 寒ケクニ ハタヤ今宵も 吾獨寝む

四五

寒ケクニは「寒い事であるのに」といふ意である。

〔一〕 籠もよ ミ籠もち フクシもよ ミフクシもち 此丘に 菜ツマス子 家ノラへ 名

ノラサネ 空見つ 大和の國は 押なべて 吾コソ居れ しきなべて 吾コソ坐せ

吾こそはのらめ 家をも名をも 五七、一二〇、一七八、二六一、二七二

ミは接頭語、フクシは圃申で、植付穴を掘る最も原始的な農具である。

〔三七〕 ヤスミシシ 我大君 神ナガラ 神サビせすと 吉野川 たぎつ河内に 高殿を 高

知まして 上り立ち 國見をしせば たためる 青垣山 山神の 奉る御調と 春べ

ば 花かさしもち 秋立てば もみぢかさせり 遊副 川の神も 大御饌に 仕へ奉

ると 上つ瀬に 鶺鴒川をたて 下つ瀬に 小綱さし渡し 山川も よりて仕ふる 神

の御代かも 七〇

ヤスミは彌住で大居宅をいひ、轉じては皇居の意に用ひられ 大安殿(正寢)といふ語となつたのである。シシはチ(主)シ(其)の轉呼で、タラチシ、アラチシと同じく「主の」といふ意。ヤスミ

の主は天皇であるから、大君の枕詞に用ひられるのである。他の片かな書にした語は其々引用の箇所に註釋してある。歌の意は吉野宮に(持統天皇)が行幸せられたとき山川の神も奉仕したといふことである。

〔五二〕 ヤスミシシ 我大君 高光 日の皇子 荒タへの 藤井が原に 大御門 始め給ひて

埴安の 堤の上に 在り立タシ 見シ給へば 大和の 青香山は 日の經の 大御門

に 青山と 繁みサビ立てり 畝火の 此瑞山は 日の緯の 大御門に 瑞山と 山

サビ坐す 耳無の 青管山は 背面の 大御門に 宜しナベ 神サビ立てり 名細シ

吉野の山は 影面の 大御門ヨ 雲るにぞ 遠く有りける 高知るや 天の御蔭

天知るや 日の御影の 水こそは 常磐にあるらめ 御井の清水 七〇、一五五

藤原宮の御井を詠じた歌で、極めて形の整うた作である。歌の大部分は皇居の形勝を叙し、終の七句を以て清泉の滾々として盡きざることというたのである。

〔三六〕 ヤスミ知シ 我大君の 聞こし食す 天の下に 國はしも 澤にあれども 山川の

清き河内と 御心を 吉野の國の 花散らふ 秋津の野邊に 宮柱 太しき坐せば

モモンキの 大宮人は 舟並めて 朝川渡り 舟競ひ 夕川渡る 此川の 絶ゆるこ

となく 此山の 彌高からし 玉水の たぎつ都は 見れどあかぬかも

一〇三、三三二

モモシキは多くの(百)石城といふ意で、ミヤ(御屋)にかゝるのである。ミヤコ(都)は宮處を意味し、必しも都會をいふのではない。行在所をもミヤコというた例がある。

〔四〕 我妹子を イザミの山を 高みかも 大和の見えぬ 國遠みかも 一〇四

イザミは地名で率見にいひかけたのである。

〔二六〕 春過ぎて 夏來たるらし 白夕への 衣乾したり 天の香山 一〇六

百人一首でおなじみの歌であるが、第二句を「來ニケラシ」に、第四句を「衣ホステフ」に改めてある。其は天の香山を實在の山ではないと考へた爲であらうが、「天」といふ語を地上の事物に用ひた例は極めて多く、單に一種の美稱である。持統天皇は度々各地を巡幸せられた方であるから大和の香山の實景をお詠みになつた歌であることは勿論である。百人一首の如く改めては歌にならぬ。

〔二三〕 高山は 畝火をヲシと 耳梨と 相あらしひき 神代より かくしあるらし 古も

然にあれこそ うつせみも 妻をあらそふラシキ 一三四、一七四、二一〇

ヲシは男志といふ字があてゝあるけれども、曳志の誤寫でエシと訓むべしといふ説もあるが(古義)、ヲシにも愛惜の意があるから態々あらためるにも及ぶまい(第三五頁参照)。歌の意は明白である。

〔三五〕 これや此の 大和ニシテハ 我戀ふる 木路にありとふ 名にあふせの山 三〇七

セの山は地名、夫にいひかけたのである。

〔二七〕 良き人の 好しと よく見て 好しと言ひし 吉野よく見ヨ 良き人 よく見 一七八、二七三

〔一〇〕 君がヨも 我ヨもしれや 磐代の 岡の草根を イザ結びてナ 一八〇

ヨは壽齡の意である。シレヤは「知れば」といふ意に感動詞をそへたのである。古へ草木の葉を結んで祝福する風習が存したのであらう。

〔二〇〕 茜さす 紫野行き しめ野行き 野守は見ずや 君が袖ふる 一八三

紫は赤の最濃いものをいうたので、茜サスを枕詞に用ひたのである。語は明白であるが、よしありげな歌である。

〔四〕 潮さゝに いらごの島邊 こぐ船に 妹のるらんカ 荒き島回を 一八四

潮サキは潮のざわめくことをいふ。イラコ(苛砂)といふ地名を引あひに出したのも、「荒き島回」といふ感じを強くせんが爲である。

〔六五〕 アラレウツ アラレ松原 住の江の オトヒ少女と 見れどあかぬかも 二〇〇

アラレ松原とオトヒ少女とは語義はどうであつても固有名詞に相違ないが、初句のアラレウツは霞の枕としては腑におちかねるけれども、まだ其眞義をきはめて居らぬ。

〔四三〕 我せこは いづく行くらむ 沖つ藻の ナバリの山を 今日カ越ゆらむ 二一五

ナバリを隠とかいてあるのは全く借字で、伊賀の名張をいふことは勿論である。沖つ藻を枕詞に用ひたのはナ(菜)にかゝるのである。

〔七〕 秋の野に ミ草刈り葺き 宿れりし 宇治のミヤコの 假蘆シ思ほゆ 二二一

ミヤコは御屋(宮)處で、行在所の意である。イホは圓錐狀に葺きおろした小屋(穗)の形によつて名付く)をいふのである。

〔四〕 白波の 濱松が枝の 手向草 幾代マテニか 年の經ぬらむ 二二七

手向草は神の爲に設けるものゝ汎稱に用ひられたが、當初はユフ(木綿)、ヌサ(野麻)と同様に草を幣としたことがあつたのではなからうか。歌の意は松が枝にかけられた手向草は幾星霜を経たであらうかといふのであるが、此頃祝福の爲に木の枝に草を結んでかける風習があつたのであらう。

〔八二〕 山邊の 御井を見ガテリ 神風の 伊勢少女ども 逢ひ見つるかも 二四七

〔八〕 熱田津に 舟乗せむと月待てば 潮もかなひぬ 今はこきてナ 二六〇

〔三三〕 樂浪の 國つ御神は うらさびて 荒れたる都 見れば悲しモ 二六三

ウラサヒは憂寂である。「近江の國ツ神もウラサビシク舊都の荒廢して居るのを見ると悲しくなる」といふことである。

(第二卷)

〔二四〕 飛鳥の あすかの川の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下つ瀬に 流れ觸らはふ 玉藻な

す かよりかく依り なびかひし つまの命の タタナヅク 柔肌すらを 劍太刀

身にそへ寝ねば ぬば玉の 夜床も荒るらむ そこ故に 慰めかねて ケダシクモ

逢ふやと思ひて 玉垂の 越の大野の 朝露に 玉裳はひづち 夕霧に 衣はぬれて

草枕 旅ねかもする 逢はぬ君ゆゑ 二九

人麿が配偶を失うた皇女に獻つた歌である。ケダシ(外來語であらう)はモシの意、クは第二三六頁所掲の助語であるから、ケダシクハは「若し其は」又は「若しや」といふ意になるのである。

〔三五〕 古之 姫にしてや かくばかり 戀に沈まむ タワラハのごと 三一

「古之」の二字をフリニシとよめといふ説もあるが、作者の意は寧ろ「昔の女(姫は借字)なら決して小兒のやうに手を束かねて戀に沈吟しては居るまい」といふにあつたのであらう。

〔九五〕 吾ハモヤ 安見子得たり 皆人の 得がてにすといふ 安見子得たり 八六、二六六、二七三

〔三三〕 衾路を ひきての山に 妹を置きて 山道を行けば 生りともなし 一〇三

ヒキテの山は地名である。 一〇七

〔二六〕 久方の 天見る如く 仰ぎ見し 皇子の御門は 荒レマク惜シモ

〔一九九〕

掛ケマクモ ユユしきかも 言はマクモ あやに畏カシコき」明日香アスカの マ神が原マカミに 欠
 方の 天つ御門アマミカドを かしこくも 定め給ひて 神サブと 磐イハがくり坐マす ヤスミシシ
 我大君オホミコの 聞こしめす 外面ソトモの國クニの マキ立つ 不破山フヘヤマ越えて 高麗劍コマリケン ワザミが原
 の 假宮カミヤに 天降アマリり坐マして 天アマの下 治め賜ひ 食國イクニを 定め給ふと 鳥が鳴くア
 ズマの國の 御軍ミツマを 召し賜ひて チハヤブル 人を和ヤスセと まつろはぬ 國を治メ
 と 皇子ながら 任せ賜へば 大御身に 大刀取佩タチウケばし 大御手に 弓取持たし 御
 軍イクサを 誂アトモひたまひ 整トふる 鼓ヰの音は 雷イカヅチの 聲コエと聞くマデ 吹き鳴ナせる 小角コツクの音
 も 敵見アキたる 虎トラか吼ホゆると 諸人の 脅オビゆるマテニ ささげたる 旗ナベの靡ナヒは 冬籠フユ
 り 春ハルさり来れば 野毎ノノに つきてある火の 風のムタ 靡ナヒくが如く 取持トたる 弓
 箭ヤの騒ウラぎ ミ雪降ユキる 冬の林ツツミに 飄ツツかも イ卷マき渡ると 思ふまで 聞カの恐コソく 引放
 つ 矢ヤの繁シケク 大雪オホユキの 亂マりて來レ」 まつろはず 立向タテムカひしも 露ツルシジモノ 消クな
 ば 消ぬべく 行く鳥の 争マふはしに 渡會ワタヒの 齋イヒの宮ミヤゆ 神風カミカゼに イ吹き惑マはし
 天雲アメクモを 日の目も見せず 常闇トコヤミに 蔽カひ賜ひて 定めてし 瑞穂スズホの國を 神ながら
 太シキ坐マして ヤスミシシ 我大君オホミコの 天アマの下 申し賜へば 萬代マンダイに 然シカもあらむと
 木綿花コワタナの 盛シゆる時に 我大君オホミコ 皇子の御門ミコノミカドを 神宮カミヤに 装ヨソひまつり 使ツカはしし 御
 門ミカドの人も 白シラタへの 麻衣アサモ着キて 埴安ウツクの 御門ミカドの原ハラに 茜アヲさす 日の盡ヒノシ 鹿シカジ物モノ イ

匍ムひ伏フしつ つ ぬば玉ヌバタマの タになれば 大殿オホニを 振りさけ見ミつ つ 鶉ウツなす イ匍ムひも
 とほり 侍候サモラヒへど 侍サモラヒひかねて 春鳥ハルトリの さまよひぬれば 數ナガキも 未だ過ぎぬに 思
 も 未だ盡マきネバ 言コトさへぐ 百濟ハクゼの原ハラゆ 神葬カミムスビ ハフリ坐イマして 麻裳アサモヨシ 城上キヤウの
 宮ミヤを 常宮トコミヤと 定め奉りて 神ながら 鎮チまり坐マしぬ」 然れども 我大君オホミコの 萬代
 と 思オモほしめして 作ツクらしし 香山カミヤマの宮ミヤ 萬代マンダイに 過スぎむと思オモへや 天アマの如ノト 振ヒりさ
 け見ミつ つ 玉タマダスキ かけて俣シヌばむ 畏オソかれども 一一九、一五九、一七八、二二七

萬葉集中第一の長編で、高市タカシの皇子の薨シノ去セを悲カミむだ柿本カキモの人麿ヒトの作である。一種の史詩に屬す
 るもので、天武紀と照し合はせて讀めば歌意は極めて明白である。用語にも難解のものは少い。
 二、三片かな書にしたものは本文又は他の歌釋中に説いてあるから、こゝに述べぬ。唯天武天皇に
 對しても、皇子(皇太子)で且宰相に任ぜられたらしい。「天下申賜」は執政の義である(に對しても
 「我大君」といふ尊稱を用ひて居るのが紛らはしいから、天武天皇をさすものには圈點を施して置
 いた。

〔二〇六〕 飛鳥トトリの 明日香アスカの川の 上カミつ瀬セに 石橋イシハシ渡し 下シタつ瀬セに 打橋ウツハシわたす 石橋イシハシに 生ナひ
 靡ナヒける 玉藻タマモもぞ 絶ツゆれば生ナふる 打橋ウツハシに 生ナひ居イれる 川藻カハモもぞ 枯カるればはゆ
 る」何ナニしかも 我大君オホミコの 立タせば 玉藻タマモの如ノト ころ伏フせは 川藻カハモの如ノト 靡ナヒかひし
 宜ヨシしき君キミが 朝宮アサミヤを 忘ワれたまふや 夕宮ユフミヤを 背セき賜タマふや」ウツシミと 思オモひし時に

春べは 花折かざし 秋立てば もみぢ葉かざし シキタへの 袖携はり 鏡なす
 見れども飽カニ 望月の いや珍らしみ 思ほしし 君と時々 出坐して 遊び賜ひ
 し 御食向ふ キノへの宮を 常宮と 定め賜ひて 味澤相 メコトも絶えぬ」し
 かれかも あやに悲しみ ヌエ鳥の 片戀しつつ 朝鳥の 通ひし君が 夏草の 思
 ひ萎えて 夕星の か行き かく行き 大舟の タユタフ見れば 慰むる 心もあら
 ず そこ故に せむすべ知らず 音のみも 名のみも 絶えず 天地の 彌遠長く
 偲び行かむ 御名にカカセル 明日香川 萬代マテニ 好シキヤシ 我大君の 形見
 に此處を 一二八、一八三

明日香皇女の薨去を悼んだ柿本の人麿の作である。歌中に大君とあるは皇女のこと、君とあるのは其配偶者のことで、半は其人の懷を述べ、末句に於て「皇女の名に縁のある明日香川を形見と見て天地の彌遠長く偲び奉らむ」と結んだのであるが、人麿の作としては出来のよくない方である。打橋の打は借字で、ウツは空の意、ウツ橋は舟橋をいふのである——後世ウチ橋と稱へたのは内橋、即ち屋内橋がかりのやうになつたものをいうらしい。——其故に川藻が「生ひ居る」ので、高く架けた橋に藻がつく筈がない。石橋も同様に流に大石を配置して飛石としたものをいふのである。ミケ(御食)ムカフはキ(酒)にかゝる枕詞、アチサハフのアは接頭語(冠詞的用法)で、チサ(萑苳)延フは芽にかゝるのであらう。夕星をユフツツと訓むのは夕のツチ(精)といふ義であ

る。ハシキヤシはハシケヤシともいひ、ヨシエヨシと同義、「縦シサラバ」といふやうな意である。

〔三三〕 鴨山の 岩根し枕ける 吾をかも シラニと妹が 待ちつつあらむ 一六六

岩根を枕にするとは死ぬことをいふのである。古、死體を岩上に放置する葬の一方法があつたので、此のやうな語が出来たのである。

〔八六〕 かく許 戀ひつつアラズバ 高山の 岩根し枕きて 死なましものを 一七〇、一八三

〔二五〕 おくれ居て 戀ひつつアラズバ 追ひしかむ 道の隈回到に シメゆへ我せ 一七〇、一七八

シメユフは占取の標をすることであるが、上古シメナハを張ることを普通としたと見えて、今も此繩にシメといふ語が残つて居るのである。歌の意は「會合に都合のよい物かけを占めて待つて居てくれ」といふことである。

〔二〇〕 我妹子に 戀ひつつアラズバ 秋萩の 咲きて散りぬる 花にアラマシを 一七三

〔二二〕 古に 戀ふる鳥かも 弓弦葉の 三井の上より 鳴きわたりゆく 一九一

ユツル葉のみゐの上を鳴き渡り行くは古を戀ふる鳥かもといふ意である。キは大堰川などいふ堰で、水をせきとめた所をいふのである。神代記にもマナキとある。ミはマに同じい。池塘にユヅリ葉の木があつたので其名を負うたのであらう。

〔九二〕 秋山の 木の下がくり 行く水の 吾コソ益らめ 念ほさむユハ 二二三

秋山の木の下にかくれた水のやうに君が思召すよりも我思は益さるだらうといふ意である。

〔一五〕 我せこそ 大和へやると サ夜更けて 曉時露に 我が立ち濡れし 二二六

〔二四〕 石見なる 高角山の 木の間従も 我袖ふるを 妹見けんかも 二六三

柿本の人麿が女に別かれて石見から京都にかへるときの歌である。其の意は説明をまたずとも明瞭である。

〔七五〕 夢にダニ 見ざりしものを 鬱悒 ミヤデもするか サ檜の隈回を 二四一

ミヤデ(宮出)はマキデと同義であらう。

〔二五〕 ヤスミシシ 我大君の 悼きや 御陵仕ふる 山科の 鏡の山に 夜はも 夜の盡 二四八

晝はも 日の盡 音ノミを 泣きツツ在りてや 百シキの 大宮人は 行き別れなむ

二四八

泣キツツ在リテヤのヤは感動助語で、「泣キツツ在リテ御陵仕ふる大宮人は行き別れなむ」と句を入れかへて解すべきものである。

〔三九〕 難波瀉 潮干なありソネ 沈みにし 妹が姿を 見マク苦しモ 二六二

〔三〇〕 ウツセミと 思ひし時に 手携ひて 吾が二人見し 走出の 堤に立てる 槻の木

此方々々の枝の 春の葉の 茂きが如く 念へりし 妹にはあれど 憑めりし 兒ら
にはあれど 世の中を 背きし得ねば カギロヒの 燃ゆる荒野に 白タへの 天領

巾隠り 鳥ジモノ 朝立ち坐して 入日ナス 隠りにしかば 我妹子が 形見に置け

る 若兒の 乞ひ泣く毎に 取與ふ 物シなければ 男ジモノ 腋はさみ持ち 我妹

子と 二人我寝し 枕つく ツマ屋のうちに 晝ハモ ウラサビ暮し 夜ハモ 息づ

き明かし 嘆けども せむすべ知ラニ 戀ふれども 逢ふ由を無ミ 大鳥の 羽易の

山に 我戀ふる 妹は坐すと 人のいへば 岩根サクミテ ナヅミ來し」 ヨケクモ

ぞなき ウツセミと 念ひし妹が 靈カギル 髮髻にだにも 見えぬ思へば 二六三

「春の葉の繁きが如く思ひ憑んだ妹ではあるが、人間の悲しさには白雲の中に隠れ、入日の如く没したので、形見に残した幼兒の守りをしつゝ、故人の寢所に晝夜悲歎に暮したが、何とも仕方がなく魂を反す道はなかつた。然るに羽易山で妹を見たといふ人があつたので、岩石の險に惱みながら尋ねて來たが、其面影さへ見えぬのは口惜しいことだ」といふのが大意である。初の八句は春の葉を言はんが爲の序で、生存中二人相携へてワシリデの堤に遊びに行つたことを思ひうかべて詠み起したのである。カギロヒは「耀る火」の音便で、陽炎をいふのであるが、「燃ゆる荒野に白タへの天ヒレ隠り」とあるのを見ると、火葬にしたのであらう。タへは植物樹皮を手で綜た布をいひ、其で製したヒレ(領巾)を雲にたとへたのである。「鳥ジモノ朝立ち坐して」は「入日」の序、「腋バサミ持ち」「ツマ屋」は他の歌について説明する。サクミは嶮しと見ること、ヨケクは善き事である。靈カギルといふ枕詞は本文中に述べて置いた(第一〇六頁参照)

〔三七〕 高光る 我が日の皇子の 萬代に 國知ラサマシ 島つ宮ハモ

二六三

下の二句は「國知ラスベカリシ島つ宮ハモ」の意であらねばならぬが、マシ(推量の意の助動詞)を此のやうに用ひた例がないから、若し右の意で詠んだものとすれば語法を誤まつたものとせねばならぬ。

(第三卷)

〔四三〕

天雲の 向伏國の ますら男と 言ハエシ人は 天皇の 神の御門に 外方に 立ち候らひ 内方に 仕へ奉り 玉かづら 彌遠長く 祖の名も 繼ぎ行くものと 母に 妻に子供に 語らひて 立ちにし日より たらちねの 母の命は 齋瓮を 前に 据ゑ置きて 一手には 木棉取もち 一手には 和夕へ奉り 平けく マ幸くませと 天地の 神に請ひ祈み いかならむ 年月日にか つつじ花 匂へる君が 鳩鳥の なづさひ來むと 立ちて居て 待ちけむ人は 大君の 命かしこみ オシテル 難波の國に アラタマノ 年ふるまでに 白夕への 衣手乾さず 朝夕に ありつる君は いかさまに 思ひませばか うつせみの 惜しき此世を 露ジモノ 置いていにけむ 時にあらずして

三二

攝津の國の史生丈部龍鷹といふものが自經して死んだ時判官大伴宿禰三中の作つた歌である。歌意は明白である。

〔三九〕

ナマヨミの 甲斐の國 ウチヨスル 駿河の國と ちちごちの 國のミ中ゆ 出立てる 富士の高嶺は 天雲も イ行き憚かり 飛鳥も 飛びも上らず 燃ゆる火を 雪もて消ち 降る雪を 火もて消ちつつ 言ひもえず 名付けも知らに 靈しくも 坐す神かも せの海と 名づけてあるも 其山の 包める海ぞ 富士川と 人の渡るも 其山の 水のたぎちぞ 日の本の 大和の國の 鎮とも 坐す神かも 寶とも 成れる山かも 駿河なる 富士の高嶺は 見れどあかぬかも

三四

ナマヨミ及ウチヨスルといふ枕詞については色々の説があるが、承服すべきものはない。私も意見はあるが、こゝで論ずると長くなるから古語大辭典に譲る。其外には難解な語はなく、よくわかる歌である。之によると山其ものが神として崇拜せられて居たので、火山信仰が其頃尙存して居たものと思はれる。

〔三七〕

憶良ラは 今はまからむ 子泣くらむ 其子の母も 吾をまつらむぞ

四八

〔四元〕

山際ゆ 出雲の子らは 霧なれや 吉野の山の 嶺にたなびく

一〇四

溺死した出雲の女を吉野に火葬したとき人鷹の作つた歌である。山際から煙がたなびくことを山ノマユ出雲というて、死んだ女をあはせて描寫したのは實に巧な修辭である。歌は皆かうありたいものである。

〔三六〕

モノノフの 八十氏河の アジロ木に いざよふ波の 行方知らずモ

一〇七

モノノフは物部の轉訛で、モノノフのモノは強者、若者、者共のモノと同じく人間を意味し、ベはムレ(群)の意のメの音便である——女及目の意のメと區別する爲に古くからべと發音せられたものゝやうである——後世モノノフといへば廣く武士の稱呼となつたが、古のモノノベは或る大部族の稱號で、饒速日命の子孫が統率して多くの氏族に分派した。其故に八十氏、氏、射等の枕詞とせられたのである。アジロ木は網代木、即ち魚柵である。

〔三四三〕 中々に 人とアラズバ 酒壺に なりにてしがも 酒に染みなむ 一五一、一七〇

ナカナカは俗語のナマナカである。カがマと轉訛したのは一異例である(發音項下參照)。

〔三四六〕 越の海の 角鹿の濱ゆ 大舟に マ梶貫きおろし イサナ取 海路に出て あへきつ

つ 我こぎ行けば マスララの 手結が浦に 海少女 鹽やく煙 草枕 旅にしあれ

ば 獨シテ 見るしるしなみ ワタツミの 手に卷かしたる 玉ダスキ かけて偲び

つ 日本島根を 一五七

手結は地名に男子の裝身具をいひかけたのである。ワタツミはこゝには海神の意に用ひてある。——本來海神はワタツチといはねばならぬのであるが、古事記以來海住民族を意味するワタツミと混同せられて居る——ワタツミから玉ダスキまではカケテといはんが爲の序である。タスキは手次の義で、上古衣の袖がなかつた頃上腕を覆ふものであつたが、夙に廢れて司祭者の服裝にのみ名残を留め、肩から懸けおろして腋下にミテグラ(幣)を捧持する用に供せられた。之を木

綿^フタスキ又は玉タスキといひ、カケの枕詞になつたのである。嬰兒をも同じやうにして携へたと見えて、二卷人麿の歌のやうに「腋挟み持」といふ語があり、緇をもスキと訓むのである。

〔三四〇〕 佐保過ぎて 奈良のたむけに 置くヌサは 妹を目かれず 逢ひ見シメとぞ 一六〇

ヌサは本來野麻の義であるが(第二三頁參照)、轉じて幣をいふにも用ひられる。其はユフ(木綿)が幣の名稱となつたのと同じ事である。「ヌサを奉るのは女に始終逢はせて下されといふ爲だ」というたのである。

〔三四四〕 我船は 比良の湊に こぎ泊む 沖ヘナ避り サ夜更けにけり 一六六

〔三四五〕 世の中を 何に譬へむ 朝ビラキ 漕ぎにし船の 音なきゴトシ 一七七

朝ビラキは早朝出發の意である。 一七九

〔三四九〕 鹽干の 三津の海女の クグツもち 玉藻かるらむ いざ行て見む 一七九

クグツはクヅの壘頭語で、クヅはコツミ(木屑)の音便である。「三津(難波)の海人は木切で藻をかるのであらうか、ドレ行つて見よう」といふ意である——從來のやうに袋であるの、人形であるのというては意味をなさぬ——シホヒは枕詞として用ひられたのである。

〔三四〇〕 藤波の 花は盛に なりにけり 奈良の都を 思ほすヤ君 一八三

〔三四〇〕 嬬竹の 撓よる皇子 サ丹つらふ 我大君は コモリクの 初瀬の山に 神サビて

齋^イき坐すと 玉ツサの 人ぞいひつる およづれか 我聞つる まが言か 我聞つる

も 天地に 悔しき事ノ 世の中の 悔しきことは 天雲の 遠隔の極み 天地の
 至れるマテニ 杖つきも つかずも行き 夕占とひ 石卜もちて 我やどに 御室
 を立てて 枕邊に 齋瓮を据ゑ 竹玉を 繁に貫垂り 木棉ダスキ 腕にかけて 天
 なる ささらの小野の 齋菅 手にとりもちて 久方の 天の川原に 出立ちて 暇
 ぎてましを 高山の 岩ほの上に 坐しつるかも 一九五

石田王といふ人の死んだとき丹生王といふ人が詠んだ歌である。殆ど毎句語釋を要するのであるが、餘りわづらはしいから、之を他の歌の註釋に譲り、こゝには大意を譯するに止める。此歌は三段にわかれて居る。第一段は「蕪竹のやうにしなやかな紅顔の君が死んで初瀬の山の上に葬られたといふ訃音は空事ではないか、無實ではあるまいか」といふのである。第二段は句を轉置して聞くべきもので、「さうと知つたら、どこまでも尋ねて行つて卜占に問ひ、我家に祭壇を設け、神酒を供へ、自分は竹玉を澤山聯ねた頸飾(?)をつけ、ユフタスキ(淨衣の一装飾)をかけてササラ野の淨い菅を手にもち(鈴の用にあてたものである)、天の川原に出で禊して祀つたであらうものを、知らずに居たのは千歳の恨事である」といふ意味になる。第三段は第二段のつづきで、「然るに高い山の岩の上に葬られたのは悲しいことだ」といふのである。此は山上の陵に埋めたのではない。高い岩の上に死體を置いて風化にまかせた古代の葬式に従うたことを悲しんだ意が歌の上にはあらはれて居る。此ころまで尙風化葬が行はれて居たと見える。

タマヅサはツカヒ(使)の枕詞として屢々用ひられる語である。「玉梓」の二字を充當してあるので、従來梓に玉をつけたものを使の徽章にした古俗があつたといふ説が行はれて居るが、其爲ならば梓に限つたことはあるまい。案ずるにアヅサはアヅサ弓について述べた如く(記の稚郎子の歌参照)物を投げることで、上古石などを投げて信號にかへたことがあつたから、イシタフ(八千矛神の歌参照)といふ語も生まれ、アヅサの使とかゝるやうになつたのであらう。タマは珠玉に限らず、總て圓塊状のものをいふのであるから、タマアヅサとつづけて投石の意が完全するのである。萬葉集第七卷に「タマヅサの妹は玉かも足曳の清き山邊に播けば散りぬる」とある歌は私の説を立證するものである。

〔三七〕 妹も我も 一つなれカモ 三河なる 二見の道ゆ わかれかねつる 二一七
 夫婦一心同體であるからか二見の道で別かれにくかつたといふ意である。

〔三三〕 賢らト 物言はむユハ 酒飲みて 醉ひ泣きするシ まさりたらし 二二一
 サカシラトはサカシラといふに等しい。但しニとトとの原義には内外の別があるのであるが、此場合にはどちらでも同様である。

〔三六〕 ヤシミシシ 我大君 高光る 日の皇子 シキ坐す 大殿の邊に 久方の 天傳ひ來
 る 雪ジモノ 往き通ひつつ 彌シキいませ 二二三
 シキは褥を敷くなどいふと同語、マス又はイマスは敬語で「坐御」の意である。フト(太)シキと

もいひ、「太」の序として「宮柱」又は「底つ磐根に宮柱」といふ語句を冠することもあるが、シキは決して柱の縁語ではない。二巻の高市皇子追悼の長編に「神ながら太シキ坐シテ」とあるのも、單に高御位にシキマス(坐御)ことをいふのである。

〔三九三〕 見えずとも 誰戀ひざらめ 山の端に いざよふ月を よそに見てしカ 二二四

見えなくとも戀せぬわけに行かぬから餘所ながらも見たいといふことである。

〔三七七〕 繩の浦ユ 背向に見ゆる 沖つ島 漕ぎ廻む舟は な釣りすらしも 二三〇

〔三七〇〕 雨ふらず との曇る夜を 濡れひづと 戀ひツツ居りき 君待ガテリ 二四七

〔三六八〕 海若は 靈しきものか 淡路島 中に立て置きて 白波を 伊豫に廻し 居待月 明

石の門ユは タざれば 潮を満たしめ 明されば 潮を干しむ 潮サキの 波を恐

み 淡路島 磯がくり居て いつしかも 此夜の明けむと まつからに イの寝らえ

ねば 瀧の上の 淺野の雉 明けぬとシ 立ちどよむらむ イザ兒ども アべて漕き

出む ニハも静けし 二五三

海若はワタツミと訓むのであらう。正しくはワタツチと言はねばならぬが、此歌の誦せられたころ(若宮年魚麻呂誦之但未審作者とある)には、既にワタツミと訛つて居たやうである。明ケヌトシは「明けたとして」といふ意、アベテに「敢て」である。ニハは海的一端をいふのである。ニハ(庭)の原義は展開して區域といふことで、古は必しも陸地のみ呼稱ではなかつたと見える。ナ

ニハ(難波)の語義も波庭ではあるまいか。

〔二六三〕 馬莫疾 うちてナ行きそ ケ並べて 見ても我が行く シガにあらなくに 二五七

歌の意は本文に説いた通りである。

〔二六七〕 こゝにして 家ヤモいづく 白雲の たな引く山を 越えて來にけり 二七〇

〔四八六〕 コモリクの 初瀬少女が 手に巻ける 玉は亂れて アリと言はずヤモ 二六三

此アリは存在の意の動詞である(第一四三頁参照)

〔三三五〕 我行くは 久にはあらし 夢の渡 瀬とはならずて 漕にてアレモ 二六三

夢の渡は地名、「私の行くのも遠からぬことであるから、淺くならず居れ」といふ意である。

〔三七七〕 否といへど 語れ語れと 宣るにこそ 志斐イは申せ 強語りと宜る 二七二

持統天皇の近侍者志斐の姫の歌で、天皇が「否といへど強ふる志斐のが強語此ごる聞かず吾戀ひにけり」とお詠みになつたのに答へ奉つたのである。イは單に志斐の韻を引いただけのやうに思はれる。

〔四八二〕 白タへの 袖さしかへて 靡き寝し 我黒髪の マ白髪に 成らむ極み 新世に 共
にあらむと 玉の緒の 絶えずイ妹と 結びてし 言は果さず 思へりし 心は遂げ
ず 白タへの 袂を別かれ 柔びにし 家ユも出で 嬰兒の 泣くをも置きて 朝霧
の 髣髴になりつつ 山城の 相樂の山の 山の際を 行き過ぎぬれば 言はむすべ

せむすべ知らニ 我妹子と サ寝し嬪屋に 朝には 出立ち偲び 夕には 入居嘆か
 ひ 腋バサム 兒の泣く毎に 男ジモノ 負ひミ 抱きミ 朝鳥の 音のみ泣きつつ
 戀ふれども 効をなミと 言問はぬ ものにはあれど 我妹子が 入りにし山を よ
 すがとぞ思ふ 二七二

ツマ屋は婦人の居住にあてる別屋で母屋の——多くは生家の——側に設けられ、夫が之に就くのが我上代の風習であつた。嬰兒は負ひも抱きもする外に、纏をかけて腋下に携へることもあつたので、腋挟むといふのである。

此歌のイは感動詞として用ひられて居る。「絶えずヨ妹を」又は「絶えずモ妹を」というてもよいのであるが、妹のイに類化せられてイとなつたのであらう。

〔二八三〕 角障フ 石村も過ぎず 初瀬山 いつカモ越えむ 夜は更ニツツ 二四四

更ニツツば「更けに更け行く」といふことである。

〔四七八〕 掛マクも あやに惶し 我大君 皇子の命 モノノフの 八十伴緒を 召し集へ 率
 ひたまひ 朝狩に 鹿踐みおこし 夕狩に 鳥踏み立て 大御馬の 口抑とどめ 御
 心ヲ 見シ明らめし 活跡山 木立の繁に 咲く花も 移ろひにけり 世の中は か
 くノミならし 益ら男の 心振り起こし 劔太刀 腰にとり佩き アツサ弓 鞆取り
 負ひて 天地と 彌遠長に 萬代に かくしもがもと 憑めりし 皇子の御門の サ

バエなす 騒ぐ舍人は 白夕へに 衣取り着て 常なりし 笑まひ振まひ 彌日けに
 變らふ見れば 悲しキロカモ 二四八

御心ヲのヲはヨに通ずるもので、御心カラ見明らかめられた活跡山云々といふ意である。イクヂの語義は「行路」であらう。サバエについては本文第二七頁に詳述して置いた。彌日異はイヤヒケニと訓むのであらうが、ケを異の意に用ひたのであるとすれば家持の誤解である(第二五頁参照)。悲シキロカモは——悲シケロカモと訓むのかも知れぬ——悲シク有ルカモの意である。一本には悲有可聞とかいてあるさうである。

(第四卷)

〔五三三〕 ウチビさす 宮にゆく子を マ悲み 留むれば苦し やればすべなし 三二
 ウチビは珍日である。うつくしい日のあたる宮(御屋)とかかるのである。

〔六五五〕 女郎花 咲澤におふる 花勝見 カツテも知らぬ 戀もするかも 七八
 フミナヘンは佐紀澤(地名)の枕詞で、花カツミは花のさく水草の名である。

〔五五五〕 佐保川の さざれ踏渡り ぬばたまの 黒馬のク夜は 年にもアラヌカ 一九四、三八五
 第十三卷にも「川の瀬の石踏渡りぬばたまの黒馬のク夜は常にアラヌかも」といふ歌がある。アラヌカのヌは希望助語ネの轉音である。

〔七〇〇〕 かくシテヤ 尙やまからむ 近からぬ 道の間を 憫みまゐ來て 一五七

〔五四〕 大君の 行幸ミユキの隨トモに 物部モノベの 八十伴ヤソトモの雄ヲと 出行イッパツし 愛アヒし夫ツは 天飛アマトや 輕カサの道ミチより 玉タマダスキ 畝ウネ火ヒを見ミつつ 麻裳マサヨシ 木路キヂに入り立タち 眞土山マツチ 越コゆらむ君キミは もみち葉ハの 散シり飛トぶ見ミつつ 親シヤしくも 吾アをば思オモはず 草枕クサマク 旅ツをよろしと 思オモひ つつ 君キミはあらむと アソソには 且カは知チれども シカスガに 點シも得エあらねは 我ワせこが 行ユのまに 追ツはむとは 千度思チノドへど 手弱女テノヤメの 吾ア身にミしあれば 道守ミチモリの 問トはむ答コタを いひやらむ すべてをシラニト 立タちて躡ツく 一六六

玉タマダスキは頸ノドにかけるものであるから、畝火の枕詞に用いたのである。アソソはアサアサの約轉で、口語のウスウスといふことである。

〔六九〕 我ワせこが 此コく戀コふれこそ ぬば玉ヌバタマの 夢ユメに見ミえつつ 一六九

〔五二六〕 我ワもたる 三ミツ相サマによれる 絲イトもちて 一七四

男オトコから「獨トコねて絶ツにし紐イトをゆゝし」とせむすべ不知シラねのみしぞなく」といひおくられたに對する女の返歌である。紐は前にも述べたやうに(第三三〇頁)衣の紐で、男は女によりて、女は男によりて解トきもし結ムスびもせられたものである。獨トコねて絶ツえたのを不吉フキツであるとして悲カしんだと男のいひ越コしたのに對し、自分が添ソ寝ネをしたのなら附ツけてやつたものと暗カに男の他の女の許ヨに通トふらしシいことを皮肉ヒツつたのである。

〔七三〕 味酒ウメサケを 三輪ミツのはふりが いはふ杉スギ 手テふりし罪ツミカ 君キミに逢アひがたき 一三五、二一五

「ウマザケ」は三輪の枕詞。三輪も亦酒をいふに用ひられることがあるのであるが、このウマザケは枕詞に用ひられたのではない(第一〇三頁參照)。之はタブを詠んだ歌で、拙著「太平洋民族誌」中に所見をのべて置いたから參照せられたい。

〔七四〕 夜ヨのホドロ 吾ワが出て來キれば 我ワ妹子メコが 念ネへリシクシ 面影オモカゲに見ミゆ 二二二、三三七

ホドロはハダラの轉訛で、斑マダラの意である。夜のホドロは明暗相メイアン斑マダラするころをいふ。クシは「事、其」の意、即ち「妹が念うて居た事、其が倂ナに見える」といふ意味である。

〔五〇〕 久方キウハツの 雨アメも降フラマカ 雨アメツツミ 君キミにたぐひて 此日暮ココノヨさむ 二五六

ツツミは「障」の意である。此語の原義は第二十卷の歌の註に述べてある。

〔七三〕 逢アはむ夜ヨは いつもあらむを 何ナニストカ 其宵逢ココノヨひて 言コトの繁シきモ 二六三

「いつでも逢へるのに何故に其晚逢うて人の口端にかゝるやうなことをしたのであらうか」といふ意である。

〔五五〕 我ワせこが 跡踏アトフミみ求め 追ツひゆかば 木キの關守セキノミイ 留トめなむカモ 二七二

木は紀伊のことである。此イはヤに通ずるものであるが、何が故にイと轉音したか不明である。

〔六四〕 今イマは吾ワは 死シなむヨ我ワせ 生ナけりとも 吾ワに寄ヨるべしと いふと言コトはナクに 二七三

(第五卷)

〔八〇〕 龍リウの馬マを 吾ワは得エてしか 青土アヲニヨシ 奈良ナラの都ミヤに 來キむ人の夕ユフに 七三

〔八〇四〕 世の中の すべなきものは 年月は 流るるゴトシ 取つづき 追ひ來るものは 百種に 攻め寄り來たる」 少女らが 少女サビすと 唐玉を 袂にまかし (白夕への袖振りかはし 紅の赤裳裾ひき) ヨチ子等と 手たづさはりて 遊びけむ 時の盛を留みかね 過しやりつれ」 蜷の腸 カ黒き髪に いつの間か 霜の降りけむ くれなゐの 面の上に 何處ユか 皺か來たりし」 益ら雄の 壯男サビスと 劍太刀 腰にとり佩き さつ弓を 手にぎり持ちて 赤駒に 倭文鞍うち置き はひ乗りて 遊びあるきし 世の中や 常にありける」 少女らが サ鳴す板戸を 押ひらき イたどり寄りて マ玉手の 玉手さしかへ サ寝し夜の いくだもあらねば 手束杖 腰にたがねて か行けば 人に厭ハエ かく行けば 人に憎マエ 凡シをは かくノミならし」 靈キハル 命惜しけど せむすべもなし 七〇、一六四、一七七、二一一

長い歌ではあるが意味は明白である。片かな書きの語は其々本文に註釋してある。シヅ鞍は色を取あはせて彩色して鞍をいふのである。

〔八〇五〕 人皆の 見ラム松浦の 玉島を 見ズテや我は 戀ひひつつ居らむ 一五九

〔九〇六〕 布施おきて 吾は請ひ祈む 欺かず 直に率行きて 天路知らシメ 一六〇

歌の意は「布施をあげて祈願するから亡兒を眞直に天へ案内して下さい」といふのである。

〔八九二〕 風まじり 雨降る夜ノ 雨まじり 雪ふる夜は すべなくも 寒くシあれば 堅鹽を

取ツヅシロヒ 糟湯酒 うちスズロヒて 咳ぶかひ 鼻ビシビシに しかとあらぬ
 髻かき撫でて 吾を置きて 人はあらじと ホコロベど 寒くシあれば 麻衾 引被り
 布肩衣 ありの盡 着そへども 寒き夜スラを 吾よりも 貧しき人の 父母は 飢寒からむ 妻子どもは 乞ひて泣らむ 此時は いかにしつつか 汝が代は渡る」
 天地は 廣しといへど 吾が爲は 狭くやなりぬる 日月は あかしといへど 吾が爲は 照りやたまはぬ 人皆か 吾ノミヤしかる ワグラハに 人とはアルを 人なみに あれも作るを 綿もなき 布肩衣の 海松の如 わわけさがれる カカフのみ
 肩にうちかけ 伏廬の 曲廬の内に 直土に 藁とき敷きて 父母は 枕のかたに 妻子どもは 足の方に かくみ居て 憂ひさまよひ 竈には 煙吹きたてず 甑には 蜘蛛の巢かきて 飯炊く ことも忘れて ヌエ鳥の ノドヨビ居るに イトノキで 短きものを 端切ると 云へるがごとく 笞とる 里長が聲は 寢屋處まで 來たち 呼ばひぬ かくばかり すべなきものか 世の中の道

一五一、一九五、二三一、二四〇、二四八

山上の憶良の作で貧窮問答の歌として知られて居る。歌意は明白であるから語釋のみを施すことにする。(一)ツヅシロヒ、スズロヒ、シハブカヒ及ホコロブはツヅシル、ススル、シハブク及ホコルといふ動作の進行をいふのである(第六二頁参照)。ツヅシリはツヅリ、ツヅキと同じく助語ツヅ

(第二四六頁)の活用で、「少しづつする」ことをいひ、(二)鼻ヒシは鼻ヒリと同じく嚏クサスの事である。ヒシヒシと重ねたのは反復を表示する語法。(三)布肩衣は袖の無い上衣で、上古の制式の遺風である(第三四六参照)。ワクラバは九巻にも「人となる事は難きをワクラバになれる我身は」とあり、古今集に「ワクラハに訪ふ人あらば」とも用ひられ、「稀に」といふ意である。(五)は「人並につくらふを」といふ意、(六)カカフは襪ツクリ、(七)ノドヨビは咽を鳴らす事、(八)イトノキテは「取わけ」の意である。

「綿もなき」からイトノキテまでの二十四句は當時の貧民の生活がよく描寫せられて居り、文化史上重要な資料である。

〔八四〕 神代より 言傳ツツけらく 空見つ 大和の國は 皇神スメガミの 嚴イツくしき國 言靈コトダマの 幸サキはふ國と 語り繼ぎ いひつがひけり 今の世の 人も盡コトゴト 目の前に 見たり知りたり」人多ツバに 充ちてはあれども 高光る 日の御門 神ながら 愛メデの盛に 天の下 奏ウタしたまひし 家の子と 選オホミコトびたまひて 大命オホミコト いただきもちて 唐モロコシの 遠き境に つかはされ まかりいませ 海原の 邊にも沖ウチにも 神鎮カミヅメり うしはきいます 諸モロモロの大御神たち 船の舳ウラに 導ミきまをし 天地の 大御神たち 大和の大國魂 久方の 天のミ空ユ 天駟アマテマり 見渡したまひ 事終り 還らむ日には 又更に 大御神たち 船の舳ウラに 御手うちかけて 黒繩を はへたる如く アマカヲシ 值チ賀ガの崎より 大伴

の 御津ミツの濱備ハマビに ただ泊トドに み舟は泊トドてむ」ツツミなく 幸サキきくいまして はや還マりませ

二二〇

丹治比真人廣成の遣唐使として出發するを餞した山上の憶良の作である。「天の下奏し賜ひし家の子」は廣成のことで、其父祖の中に宰相の位についたものがあつたのであらう。海神、天神地祇の外に特に大和の守護神大國魂の神を引合ひに出したのは廣成が大和の人であるからである。アマカヲシは值賀の枕詞であらう〔古語大辭典〕。

〔八七〕 天とぶや 鳥にもがもや 都まで おくりまをして 飛び歸るモノ 二二四

ヤは感動詞で、空をとぶ鳥になりたや、都までお伴して來ようものをといふ意である。

〔八七〕 遠マツラつ人 松浦マツラさよ姫 夫戀ツツに 領巾レふりしヨリ 負オカへる山の名 二三〇

〔八四〕 雲クモに飛ぶ 藥喰ハむヨは 都見ツツば いやしき吾身アガミ またヲチぬべし 二三〇

飛仙となる藥を飲むよりも都にかへつたら一層若がへるだらうといふ意である。

〔七九〕 好ハしきよし かくのみカラに 慕ホシひ來し 妹が心の すべもすべなさ 二二三

「かばかり慕うて來た妹が心は縦し何とあれ今はかひもない」といふ意である。

〔八五〕 行く舟を ぶり留トドみかね いかバカリ 戀コイほしく在りけむ 松浦マツラさよ姫 二四九

(第六卷) 〔九八〕 奥津島 ありその玉藻 潮ウシひみち イかくりいなば 思オモはえむかも 二四

潮、ヒミチと讀むべきで、單に潮滿ツといふことである。單に散るといふことを「梅の花咲散り過ぎぬ」(萬、十)というたのと同じ一語法である。カクリイナバは「隠れ行かば」の意である。

〔九三〕 萬代に見トモ飽めや 三芳野の たぎつ河内の 大宮處 一二八

こゝの大宮處は離宮の意である。

〔二〇六〕 八千矛の 神の御代より 百舟の 泊るとまりと 八洲國 百舟人の 定めてし 敏馬の浦は 朝風に 浦波騒ぎ 夕波に 玉藻は來寄る 白沙 清き濱邊に 行きかへり 見れども飽かず 宜しこそ 見る人毎に 語りつき 偲びケラシキ 百世へて 偲バエ行かむ 清き白濱 一七四

歌意明白である。

〔九五〕 凡ならば 此も此もせむを 惶ミと 振痛袖を 忍びてあるかも 一七六

〔九七〕 瀧上の 御舟の山に 瑞枝さし 繁に生ひたる 樛の木 の いや繼々に 萬代に か

くシ知らさむ 三芳野の 蜻蛉の宮は 神カラか 貴かるらむ 國カラか 見が欲し からむ 山川を 清み清けみ 諾し神代ユ 定めけらしも 二二二

「清み清けみ」の次の一句落ちたのであらうとはいはれて居るが、尙原のまゝを可とする。

〔二〇三〕 古里は 遠くもあらず 一重山 越ゆるガカラに 思ひぞ我がせし 二二六

「一重山を越えたから遠くもない郷里を遠くやうに思うた」といふのである。

〔九五〕 かくしつ つ 遊び飲みコソ 草木スラ 春は生ひつ つ 秋は散りゆく 二四〇

〔一〇七〕 言問はぬ 木スラ妹と背 ありとふを 唯獨子に あるが苦しさ 二四〇

こゝのイモとセは兄弟姉妹のことである。「一人しか子が無いのがさびしい」といふ意である。

〔二〇九〕 橋は 實サへ花サへ 其葉サへ 枝に霜降れど イヤ常葉の木 二四二

〔九八〕 男の子ヤモ 空しかるべき 萬代に 語り繼ぐべき 名は立てずして 二七〇

(第七卷)

〔三五〕 我心 ユタにタユタに 浮尊茶 邊にも沖にも よりかつマシジ 三三〇

マシジは今の語のマジである。原文益士とあるのをマシヲと訓んだのは誤である。歌の意は

「自分の心が尊茶のやうにユラユラして居るからどちらへも寄り得まい」といふのである。

〔二六五〕 マ鉦もち 弓削の河原の 埋木の あらはるマジキ 事とあらなくに 三三三、一七二

マカナモチは弓削の枕詞に用ひられたのである。

〔二四四〕 マ鳥すむ うなでの神社の 菅の根を 衣にかきつけ 着せむ子もがも 三三三

神社をモリと訓むのは神の社が多くは森に設けられたからであらう。杜とかくのも社木の合字と思はれる。

〔二三〇〕 我宿に 生ふる土榛 心ユも 思はぬ人の 衣に褶ラユな 一六四

〔三三〇〕 南淵の 細川山に 立つ眞弓 弓束まくまで 人に知ラエジ 一七〇

立ツマユミの意味は不可解である。弓がタツとはいへず、マユミを木の名としても生ひたるマユミの木と解することは出来ぬ。尙一考を要する。

〔二六七〕 百シキの大宮人の 蹈みし跡處 沖つ浪 來寄らザリセバ 失せザラマシを 一七一

歌意明白。施頭歌である。

〔二二三〕 佐保川の 清き川原に なく千鳥 蛙と二つ 忘れかねつも 二〇〇

千鳥と蛙と二つを忘れかねるといふことである。

〔二四二〕 我せこヲ 何處行かめと サキ竹の 背向に寝シク 今シくやしも 二二四

寝シクは「寝シ事」の意である。サキ竹は割竹で、背向の形容的枕詞である。「何處へも行きはしまいと思つて夫に背を向けて寝たこともあつたが、死んだ今となつては悔しい」といふ意である。初句は第四句につゞくもので、ヲはヨリに通ずる。

〔二九七〕 手に取るが カラに忘ると 海人のいひし 戀忘貝 コトにしありけり 二三六

コトニシアリケリは「名のみである」といふ意である。

〔二〇〇〕 我舟は 沖ユな離り 向ひ舟 片待ちガテリ 浦ユこぎ逢はむ 二四七

「沖を遠かるな。待受ガテラ浦を漕ぐ迎舟に行き逢はう」といふ意である。

〔二五九〕 向つ丘の 若楓の木 下枝とり 花待つイ間に 嘆きつるかも 二七二

第十卷にある「青柳の糸の細しき春風に亂れぬイ間に見せむ子もがも」のイも之と同用例に屬す

る。「花まつ間」「亂れぬ間」といふ意であるから、イは間投詞的に挿入せられたものとせねばならぬ。

(第八卷)

〔二四二〕 戀しヶば 形見にせむと 我宿に 植ゑし藤波 今咲きにけり 五四

〔二五五〕 梅の花 折りも折らずも 見つれども 今夜の花に 尙しかズケリ 一六九

歌の意は本文に述べた通りである。

〔二五七〕 我宿の 尾花がウレの 白露を 消タズテ玉に ぬくものにもが 一五九、二五六

ウレは梢の意である。

〔二四五〕 魂キハル 命にムカヒ 戀ひむユハ 君が御舟の 梶柄にもが 一七一

ムカヒは抵抗しての意、即ち命がけて戀ひむよりは入唐船の梶柄になつても隨行したいといふのである。

〔二五〇〕 彦星は 棚ばたづめと 天地の 別れし時ユ イナムシロ 河に向き立ち 思ふそら
安からなくに 嘆くそら 安からなくに 青浪に 望は絶えぬ 白雲に 涙はつきぬ
かくのみや 息づき居らむ かくのみや 戀つつあらむ サ丹塗の 小舟もがも 玉
卷の マ橈もがも 朝風に イかきわたり 夕潮に イ漕ぎわたり 久方の 天の河
原に 天飛ぶや ヒレかたしき マ玉手の 玉手さしかへ あまたいも 寢てしがも

秋にあらずとも

二四、二五六

ムシロは裳料の義であるから、稻莖でつくつたものをイナ蓆と稱へて敷くためにも外套用即ち身の皮としても用ひられたから、カハの枕詞になつたのである。ヒレは襟の完備しなかつた時代に頸部を掩ふに用ひたものであるが、相當の大きさで假寝の床に敷くこともあつたと見える。今四角な布片をフロシキといふのはヒレシキの轉訛である。天トプヤを枕詞に用ひたのは布片の翻

翻たることを形容したのであらう。歌の意は明白である。
〔四九〕 少女らが 挿頭の爲ニ みやび男の 鬘の爲ト シキ坐せる 國のハタテに 咲きに ける 櫻の花の 匂ハモあなに 一九一

語義及歌意は本文に述べた通りである。「シキ坐セル國のハタテに」といふ二句は初に移して心得べきものである。

〔四七五〕 橋の 花散る里の 時鳥 片戀ひしつづ 鳴く日シゾ多き 二二一
〔四七六〕 獨居て 物念ふ夕に ほとときす 從此間鳴き渡る 心シあるらし 二二九
ココユはココヨ、コユ又はココヨと訓んでもよい。此處をといふ意である。
〔五七〕 明日香川 行き回む丘の 秋萩は 今日降る雨に 散りカ過ぎなむ 二五四
〔六五〕 高山の 菅の根しぬぎ 降る雪の 消ぬトカ言ハモ 戀の繁ケク 二五七
シゲケキは繁き事といふ意である。

(第九卷)

〔一八七〕 鶏が鳴く アツマの國に 古に ありける事と 今マテニ 絶えずいひ來る」葛飾の眞澗の手兒奈が 麻衣に 青衿つけ 直サヲを 裳には織り着て 髪だにも 搔きは梳らず くつをだに はかず歩けど 錦綾の 中に包める いはひ兒も 妹にしかめや 望月の たれる面わに 花の如 ゑみて立てれば 夏蟲の 火に入るが如水門 入に 舟こぐ如く 行きカグレ 人のいふとき 幾ばくも 生けらしものを 何すとか 身をタナシリテ 浪の音の さわぐ水門の 奥つ城に 妹が臥せる」 遠き代に ありける事を 昨日しも 見けむが如も 思ほゆるかも 三三〇

短命の美人を詠んだ歌である。アツマは東國に住んだ民族の呼稱である。トリガナク即ち鶏鳴は恐らくは吾夫(アツマ)にいひかけた形容詞であらう。青衿を従來青エリと訓んだのは誤で、和名鈔に衿は小帶也とあるに従うてアヲヒモと讀むべきである。古事記仁徳天皇及雄略天皇の條下に紅紐之青褶衣とある紐と同じものである。ヒタサヲの裳は海人のする腰蓆のやうなものをいふのである。カグレはコガレの訛である。——此歌により當時の民家の兒女の服裝がよくわかるのであるが、他日機會を得てとくことにする。

〔一七七〕 空蟬の 世の人なれば 大君の 命かしこみ 敷島の 大和國の 石上 ふるの里に 紐とかず 丸寐をすれば 吾が着たる 衣はなれぬ 見る毎に 戀はまされど 色に

出でば 人知りぬべみ 冬の夜の あかしもかてず イも寐すに 我はぞ戀ふる 妹
がタダカに 三八

「冬の夜の」のノはヲと見なすべきものである。歌の意は明白である。

〔七〇八〕 春草^{ハルグサ} 馬咋山ヨ 越え來なる 雁が使は 宿過^{ヤドスグ}るなり 一〇五

「宿過奈利」はヤドをスグナリ又はヤドスグルナリと訓むべきである。スグルナリが語法上誤でないことは用言の章下に反復述べて置いた。――ヤドリ過グナリと訓むのは誤である。

〔七〇七〕 あざりする 流人^{アハ}とヲ見ませ 草まくら 旅ゆく人に 妻者^{ツマト}のらじ 二〇四

妻者は我名者の誤であらうといふ説もあるが(萬葉集新考)、いづれにしても「旅の人になびいても末の見込がないから、漁りする海人少女と思うてくれ」といふ意である。

〔七〇三〕 語りつぐ カラにも夥多^{コホタ} 戀ひしきを 直目^{ナクメ}に見けむ 古男^{イニシ} 二二二

〔七〇八〕 明日よりは 吾は戀ひむナ 名欲山^{ナホリ} 石蹈み鳴し 君が越えいなば 二五七

名欲山はナスキ山と訓したのもある。いづれにしても歌の意はかはらぬ。

〔七〇六〕 あぶり干す 人もあれやも 濡衣を 家にはやらナ 旅のしるしに 二六〇

「濡れた衣を乾してくれるやうないゝ人はないといふ證據に濡衣を家へ送つてやりたい」といふ意である。

(第十卷)

〔三六六〕 妹が手を 取石^{トリスシ}の池の 浪の間ユ 鳥が音ケになく 秋過ぎぬらし 二五、一〇四、二二九

取石の池を其所在地の人はトロスというて居るからとて契沖はトロシの池と訓んだが、其は後の訛で少くとも此歌ではトリスの池といふ方がよいやうである。ヨはヲに通ずる。

〔三六三〕 我せこヲ 莫^ナコセの山の 呼子鳥 君よびかへせ 夜の更けぬトに 一〇四

コセは越^{コセ}と巨勢(地名)とにかけたのである。トニは「時に」の意である。

〔三六三〕 我妹子に あふちの花は 散り過ぎず 今咲ける如^イ ありコセヌかも 一〇四

「咲き過ぎずして今を盛であつて欲しい」といふ意である。

〔三六六〕 タマカギル タざりくれば さつ人の 弓月^{ユツキ}が嶽に 霞たなびく 一〇六

タマカギルは「魂限る」の意であるから、晝夜を界する夕、隱約の意のホノカ、墳墓を意味する岩垣等の枕詞になるのである。歌の大意は本文に述べた。

〔三九九〕 秋の夜の 月カモ君は 雲隠り 暫時^{シヤン}も見ねば 夥多^{コホタ}戀ひしき 一三五

〔三四八〕 足引の 山より來セバ さを鹿の 妻呼ふ聲を 聞かましものを 一五五

〔三三六〕 奈良山の 峯すら霧ふ 宜^ツしこそ マ垣^マの下の 雪は消ズケレ 一六九

奈良山は日あたりのよい雪の早く消える所と思はれる。其奈良山の頂さへ霧曇りであるから、マガキの下の雪の消えぬのは當然であるといふのである。キラヒといふ動詞は平安朝以降には用

ひられぬやうになつた。

〔一〇七〕 渡守 船わたせヲと 呼ぶ聲の 至らねばカモ 梶の音のせぬ

二〇五

わたせヲは渡せヨといふ意であることは本文に註した通りである。

〔一〇八〕 秋萩は 雁にあはじと いへればカ 聲を聞きては 花にちりぬる

二一五

歌の意は「雁の聲を聞くと萩の花が散るのは雁に逢はねとでもいうた(萩が)事があるのか」といふのである。花ニのニはノに通ずるのである。

〔一〇九〕 我宿に 鳴きし雁がね 雲の上に 今宵鳴くなり 國へかも行く

二二六

〔一一〇〕 此夜ヲは サ夜更けねらし 雁がねの 聞こゆる空ユ 月立ち渡る

二二九

(第十一卷)

〔一一一〕 沖つ波 邊波の來よる さたの浦の 此サタ過ぎて 後戀ひむかも

四一

「此時を逸しては後日戀しからう」といふ意である。

〔一一二〕 少女等ヲ 袖振山の 瑞垣の 久しき時ユ 思ひき我は

一〇四

ヲはヨに通ずる(助語ヲ、ヨの條下参照)。袖フルをフル山(地名)にいひかけたのである。ミヅ垣は神籬である。

〔一一三〕 難波人 葦火たく屋の スシテあれど 己が妻こそ 常めつらしき、 一三五、二二四

スシは煤を動詞に用ひたのである。「葦火たく家のやうに煤けては居るが女房はいつ見ても

可愛いといふ意であるから、スシテアレドと六音に讀まねばならぬ。スシタレドといへば家が煤けたことになるのである。此差はアリが動詞(存在の意)につかはれると、時格助動詞に用ひられるとによるものである(第一四三頁参照)

〔一一四〕 わだの原 沖をふかめて 生ふる藻の モトモ今コソ 戀はすべなき

二二四

〔一一五〕 月夜良ミ 妹に逢はむと 直路から 我は來つれど 夜ぞ更けにける

二二三

接尾語ミの主観的用法で(第六四頁参照)、「よい月夜だとおもうて」といふ意である。

〔一一六〕 中々に 君に戀ひズバ 比良の浦の 海人ならましを 玉藻刈ツツ

二四四

「生中君を戀ひむよりは海人になつて藻を刈り刈りして暮さうものを」といふ意。

(第十二卷)

〔一一七〕 アツサ弓 末はし知らず 然れども マサカは君に よりにしものを

三八

マサカは目前の意ではなく、「末は知らぬが正に君になびいて居るものを」といふことである。

〔一一八〕 妹が目を 見まくホリ江の さされ波 シキテ戀ひつつ 在と告げこそ

一〇四

ホリ江は欲と堀とにかけたので、シキテは重ねていふ意である。

〔一一九〕 玉カツマ 逢はむといふは 誰なるか 逢へる時さへ 面がくりする

二二七

カツマは竹を編みて作る篋等の名稱でアムといふ縁にて逢にかゝつて居るのである。

〔一二〇〕 君があたり 見ツツモ居らむ 生駒山 雲なたなびき 雨はふるとも

〔三二五〕 息の緒に 吾息づきし 妹尙を 人妻なりと 聞くは悲しも

「命絶々に慕うた女其ものが人妻であると聞くが悲しい」といふ意である。

〔三〇五〕 後れ居て 戀ひツツ在ラズバ 田子の浦の 海人ならましを 玉藻刈刈 二四四

ツツアリといふ場合の「存在」の意の動詞であることに注意せねばならぬ。

〔二七七〕 いつはナモ 戀ひズアリとは 在らねとも ウタテ此頃 戀の繁きモ 二五七

歌の意は本文に述べた通りである。

〔第十三卷〕

〔三三三〕 かみどけの 日かぐみ空の 九月の 時雨の降れば 雁音も 未來鳴 神なびの 清

きミ田屋の 垣つ田の 池の堤の 百不足 齋槻が枝に みづ枝さす 秋のみぢ葉

まきもたる ヲ鈴もゆらに たわや女に 我はあれども 引攀て 枝もとををに 打

手折り 吾は持ちて行く 君が挿頭に 三六

百不足はイ(五十)の枕詞。「女ながらも腕にまいた緒鈴をゆらがして齋槻の上によぢ登り、枝を撓めて折り取つて君が挿頭に持つて行く」といふ意である。槻の黄葉は觀賞用になるものではないが、ツキは杖になる木の汎稱で、必しも今のケヤキ(槻)をいふのではないから、別に紅葉するツキといふ木があつたと思へばよいのである。

〔三三九〕 近江の海 泊八十あり 八十島の 島のさきさき アリ立てる 花橋を 末枝に 鶴

ひきかけ 中つ枝に 班鳩かけ 下枝に 鶴をかけ 己之母を 取ラクを知らに 己

之父を 取ラクを不知 イ添はひ居るよ 班鳩と鶴と 八七

アリ立テルはアリ、立チ、アリであるが、上のアリは存在の意の動詞、下のアリは叙述の助動詞である。立テリアリといへぬからアリ立てるとしたので、動詞と助動詞とのつかひ分けの好適例である(第一四三頁参照)。

〔三三七〕 青士ヨシ 奈良山過ぎて モノノフの ウチ川渡り 少女等に アフ坂山に 手向草

イ取置きて 我妹子に アフミの海の 沖つ浪 來寄す濱邊を クレクレと 獨ぞ我

來し 妹が目をほり 一〇四

「絲取置而」とある絲を麻の誤とするは臆断である。絲の原語はイであるから——蜘蛛のイなどいふ——イ取置てと訓んでも少しも差支はないのみならず、手向草ヌサとつゞけるよりも口調がよい。クレクレはクルクルといふに同じい。

〔三六九〕 御佩ヲ 劍の池の 蓮葉に たまれる水の 行方なく 我爲時に 逢ふべしと 占へ

る君を ナ寝ねそと 母きこせども 我心 清隅の池の 池の底 我は忘れじ タダ

ニ逢ふマテニ 一〇五

歌の意は「母は占を逢ふなと解いたが、逢ふべしといふのであるから心の底から忘れぬ」といふ

事である。

〔三二四〕 ツギネフ 山城道を 人夫の 馬ヨリ行くに 己夫の 歩ヨリ行けば 見る毎に 音のみし泣かユ そこ思ふに 心シ痛し タラチネの 母の形見と 吾がもたる マソ
 ミ鏡に アキツヒレ 負ひ並め持ちて 馬買へ我せ 二二九

マソミはマスミの音便、マは接頭語、スミは清澄の意である。アキツヒレは蜻蛉の羽のやうな領巾であらう。此兩者を併はせ負ひもちて馬をかへといふので、山内一豊の妻に勝る貞節ぶりである。

〔三五〇〕 秋津島 大和の國は 神カラと 言學せぬ國 然れども 吾は言學す 天地の 神も甚 吾が念ふ 心知らずや 往影の 月も経往けば タマガキル 日も重なりて 念へかも 胸安からぬ 戀ふれかも 心の痛き 末遂に 君に逢はずは 我命の 生けらむ極み 戀ひつつも 吾は渡らむ マソ鏡 正目に君を 逢見てばこそ 吾戀止まめ 二二二

ヒサカタに往影といふ字が充てゝあるのはめづらしい例である。影は勿論カタであるが、往をヒサと訓むことは聊か無理であるから、今まで學者が説きなやんだのである。マソ鏡はマスミの鏡の訛で、上記マソミ鏡と同語である。歌意は明白であるが、ゴツ／＼して甚拙い作である。

〔三五五〕 葦原の 瑞穂の國は 神ナガラ 言學せぬ國 然れども 言學ぞ吾する 事幸く マ

幸く坐と ツツミなく 幸く坐せば 荒磯波 在りても見むと 百重波 千重波重に 言學す吾は 二二二

歌の意は「幸福にお暮しなされ、息災でお出にならば又お目にかゝると繰かへしていふ」といふことである。

〔第十四卷〕

〔四一〇〕 伊香保ロの そひの榛原 ネモコロに おくをばかねそ マサカしよかば 三八、八〇

ネモコロが同族の義であることは本文に説いた通りである。上二句は序で榛の根にかゝるのであるが、尙ソヒ(添)といふ語がよくきいて居る。

〔三六一〕 足柄の 遠面此面に さす良の カナルマしづみ ころ我紐とく 二四

上三句は序、カナルのカは接頭語(第二四頁参照)、鳴るは音のすることである。物音が静まつたから女と自分とが紐とくといふ意である。

〔三七四〕 武藏野に 占葉兆やき マサデにも 告らぬ君が名 トに出にけり 四七

カタヤキは兆を焼くといふことで、占の一方方法である(古語大辭典)。

〔三五〇〕 烏とふ 大をそ鳥の マサデにも 來まさぬ君を コロクとぞ鳴く 四七
 ヲンはウソ(嘘)である。コロクは「子ラ來」を鳥の鳴聲にいひかけたのである。

〔三三九〕 鈴が音の 驛うまやの つつみ井の 水をたまへな 妹がタダテよ 四七
ツツミ井は堰をめぐらした泉のことである。

〔三三三〕 人の子の かなしケシダは 濱渚鳥 アナム駒の 惜しけくもなし 四一、五四
アナムは足悩むの訛である。戀故には馬の足の悩もいたはずに鞭を加へて急ぐといふ意で

ある。
〔三四二〕 多胡の嶺に 寄せ綱はへて 寄すれども アニクヤ沈し 其の顔よきに 七七
「寄せ綱でよせ集めてもアヤニク其可愛い子には劣る(シツシ)」といふ意である。

〔三四八〕 アリ衣の サエサエしづみ 家の妹に もの言はず來ニテ 思ひ苦しモ 一二四、一五七
此歌は第四卷に柿本の人麻呂の作として出て居る。但し下の句が「もの言はず來テ思ヒカネツ

モ」となつて居る。キニテは完了分詞形、キテは現在分詞形で時格が異つて居る。恐らくは東歌
が原歌であらう。來ニテといふ語が都人に耳だつて聞えたので、來テと改めた結果「ものいはず
來テ思ヒ苦しモ」では拙いから、苦しモをカネツモとしたものと思はれる。——私が奈良朝に於
て早くも語法が亂れたとしたのは此やうな例をいふのである——アリ衣は新衣、サエサエはザワ
ザワで、太いゴワ／＼した織維で織つた衣を着て居たのである。
〔三八三〕 ウマクダの 嶺口にカクリ居 かくだにも 國の遠力は ながめ欲りせむ 一二八

ウマクダは上總の望多である。「郷里がウマクダの山嶺にかくれる程遠いならおまへを見たく
なるだらう」といふ意である。

〔三五八〕 サ寝ラクは 玉の緒ばかり 戀フラクは 富士の高嶺の 鳴澤の如 二三七

〔三四〇〕 大君の 命かしこみ かなし妹が 手枕はなれ 夜立ち來ぬカモ 二五四

〔三四五〕 上毛の ヲドのタドリが カハヂにも 兒らは逢はなモ 獨のみして 二六四

タドリは地名、ヲトは小門の意、カハヂは河路であらう。

〔三五四〕 高き嶺に 雲のつくノス 我さへに 君につきなナ 高嶺と思ひて 二六〇

ノスはナスと同じく、如の意である。

〔三八八〕 筑波根の 嶺口に霞居 すぎがてに 息づく君を む寝てやらさネ 二六一

上二句は序である。「筑波嶺の霞のやうに去りがてに嘆息する人を寝かしてやりなされ」といふ

意である。

(第十五卷)

〔三六二〕 我命を ナガトの島の 小松原 幾世を経てか 神サビわたる 一〇四

ナガトの島は地名である。

〔三七〇〕 天地の 神なきものに アラバこそ 吾思ふ妹に 逢はず死にせめ 一五一

〔三六七〕 妹を思ひ イの寝ラエヌに 秋の野に さを鹿鳴きつ 妻思ひかねて 一六二
イは夜の轉音であるが、夙に轉義によりて、ウマイ(熟眠)、ヤスイ(安眠)、アサイ(朝寢)のやうに用ひられた。さりながら「イの寝らえぬ」「我やイをねぬ」などいふ場合には「夜」の原義があらはれるのである。

〔三六九〕 磯の間ユ たぎつ山川 絶えずあらば 又も逢ひ見む 秋かたまけて 二二九

カタは接頭語、マケは「設」の意である。

〔三六三〕 大舟に カシ振り立てて 濱清き 麻里布の浦に やどりカせまし 二五五

カシは船をつなぐ杭である。

〔三五九〕 我妹子が 形見に見むを 印南ツマ 白波高み よそにカモ見む 二五五

ツマは尖の意であるから、印南ツマは印南の崎をいうたのであらう。「ツマといふ語をなつかしがつて見て行かうとしたが、波が高くて見えなかつた」といふ意である。

〔三六四〕 秋の夜を 長ミにかあらむ なぞ許多 イの寝ラエヌモ 獨ぬればか 二六三

長ミのミは主觀的用法(第六四頁参照)で、「長くおもへばか」といふことである。

(第十六卷)

〔三五五〕 瘦々も 生けらはあらむを ハタヤハタ 鰻を取ると 川に流るな 四五

イケラバは未來格繼續語法(第一四一頁)の一例である。

〔三七八〕 橋立の 熊木のヤラに 新羅斧 落とし入れワシ かけてかけて 莫泣かしそね 浮 八八

び出づるやと見むワシ

ヤラはヤナの轉訛で魚柵をいうのであらう。竹柵をヤライといふのもヤラに更にイを添付したものでらし。

〔三六七〕 ヒトフタの 目のみにあらず 五ツ六ツ 三ツ四ツさへあり 雙六のサエ 九八、二七九

〔三八六〕 オシテルや 難波の小江に 庵作り 隠りて居る 葦蟹を 大君召すと 何せむに

吾を召すらめや 明ラケク 吾は知る事を 歌人と 我を召すらめや 笛吹きと 我

を召すらめや 琴弾きと 我を召すらめや かもかくも 命受けむと 今日今日と

明日香に至り 立てれども 置勿に至り つかねども 都久野に至り 東の 中の御

門ユ 参り来て 命受ければ 馬にこそ 絆カクモノ 牛にこそ 鼻繩はぐれ アシ

ビキの 此片山の モム楡を 五百枝剃き垂り 天照や 日の氣に乾し サヒツルヤ

から白につき 庭にたつ 碓子につき オシテルや 難波の小江の 初垂を 辛く垂

り来て 陶人の 作れる瓶を 今日行きて 明日取持來 吾目ラに 鹽塗り賜ひ も 一二八

サンいくつ」の類であらう。モム楡のモムはモグ挽の意である——越後三條では採むことをモグというて居る。——サヒツルは鳥聲、獸舌といふ意味でカラ(唐、韓)の枕詞に用ひられるのであるが、カラ白は唐白ではなく、柄白、即ち今の足踏白である。碓子はタテウス(横白に對する語)で、普通の白のことである。——之をスリ白と訓むことには賛成しかねる。

〔三八五〕 イトコ汝せの君 居り居りて 物にイ行くとは 韓國の 虎ちふ神を 生捕に 八つ取り持ち來 其皮を 疊にさし 八重疊 平群の山に 四月と 五月の間に 樂獵 仕ふる時に 足引の 此片山に 二つ立つ 櫟か下に アツサ弓 八つ手ばさみ ヒメ鏡 八つ手ばさみ 鹿待つと 吾が居る時に サ男鹿の 來立ち 嘆カク 立まちに 我は死ぬべし 大君に 我は仕へむ 吾が角は 御笠のハヤシ 吾が耳は 御墨の壺 吾が目らは マ澄の鏡 吾が爪は 御弓の弓筈 吾が毛らは 御筆のハヤシ 吾が皮は 御箱の皮に 吾が穴は 御繪ハヤシ 吾が肝も 御繪ハヤシ 吾がミギは 御鹽のハヤシ 老はてヌ 吾が身一つに 七重花咲く 八重花咲くと 申はやさね 申はやさね 一三〇

前記と同じく乞食の作といはれ、鹿に代つて痛を述べた歌で、上四句は道行く人をよびかける語である。イトコの語原については色々の説があるが、承服が出来ぬ。案ずるに齋子の義から轉じて同母から出た同世代のものを意味するのであらう。神功紀にも「ウマ人はウマ人どちや、

イトコはもイトコどち」とある。古の社會制度に年齢によつて區別するイトコ、ヨチコといふ呼稱のあつたことを推測するものもあながち無理ではあるまい。「イ行くとは」の次にイフといふ語が含まれて居たと見るべきである。「韓國の」から「八重疊」まではヘグリの序、クスリ獵は朝廷に於て行はれた儀式的鹿狩で、鹿の角をとることを目的としたのである。ハヤシは「榮爲」の意で、俗語の景物をいふのである。樹林は神社の景物なるが故にハヤシと呼ばれるやうになつた。ミギの語原は判明せぬが、肝に類した部分であらうと思はれる。

〔三八〇〕 玉箒 借り來鎌まる むろの木ト 棗がもとを かき掃かむため 二〇〇

玉箒、鎌、ムロの木(天木香)、棗といふ四種のを詠み込んだといふだけで、語の遊戲に過ぎぬ。

〔三八七〕 安積山 影サへ見ゆる 山の井の 淺き心を 吾念はなくに 二四二

(第十七卷)

〔四〇四〕 マツカヘリ しひにてあれやも サ山田の 小父が其日に 求め逢はズケム 一六九

マツガヘリはシヒ(椎、誣)にかゝる枕詞であるが、語義不明とせられて居る。案ずるに「松が縁椎」とつづくので、松側の椎といふやうな諺があつたのであらう。サ山田の小父は鷹匠山田史君鷹のこと、一小吏に過ぎぬが、現在と同様に年長者を普くヲヂというたのであらう。

〔三九三〕 道の中 國の御神は 旅行も 爲知らぬ君を 恵みたまはナ 二六〇

(第十八卷)

〔四〇六九〕 明日よりは 繼ぎて聞えむ 郭公 一夜のカラに 戀ひ渡るかも

二三四

「一夜の故に」といふ意である。

〔四〇四一〕 梅の花 咲き散る園に 我行かむ 君が使を 片まちガテラ

二四七

サキチルは單に「散る」といふことを強めていうたのである。赤人の歌にも潮の満つることを潮ヒミチというた例がある(第三卷)。

(第十九卷)

〔四五六〕 新タマノ 年行き代はり 春されば 花ノミ匂ふ アシビキの 山下どよみ 落たぎ

ち 流る^{ナガ} 辟田^{サキタ}の 川の瀬に 年魚兒^{アユコ}サ走る 島つ鳥 鶉^{ウツガヒ}養ともなへ 篝^{カガリ}さし なづさ

ひ行けば 我妹子が 形見^{カガミ}ガテラと 紅の 八しほに染めて おこせたる 衣の裾も

とほりて濡ぬ 二四七

第四句は「花サキ匂ふ」の誤寫であらうといはれて居る。歌の意は明白である。

(第二十卷)

〔四三〇〕 荒し男が イをサ手挟み 向ひたち カナルマしづみ 出てと我來^{アガ}る

二四

イは箭^ヤの訛、サタバサミのサは接頭語である。別を惜む家人の泣く音をしづめて出て來るといふ意である。

〔四三〇〕 梅の花 香をかくはしみ 遠ケども 心もシヌニ 君をしを思ふ 五四

シヌは偲^{シヌ}びの語幹で、同じ意である。

〔四三三〕 ワロ旅は 旅とオメホド コヒニして コノチ瘦^{ウサ}らむ 我身かなしも 五一、八八

オメホドは「思へど」、コヒは「戀」、コメチはオモテ(面)の訛であらう。

〔四三六〕 國々の 防人^{サキモリ}集ひ 舟^{フネ}のりて ワカルを見れば いとすべなし 一三〇

〔四三三〕 アシビキの 山行きしかは 山人の 我に得シメシ 山苞ぞこれ 一六〇

山人は仙人のことである。

〔四三七〕 橘の 下吹く風の 香くはしき 筑波の山を 戀ひズアラメカも 一七一

〔四〇八〕 大君の 任^{アサマニ}の隨 防人^{サキモリ}に 我立ち來れば ハハソ葉の 母の命は ミ裳^ミの裾 摘^ツみあ

げかきなで チチの實の 父の命は タク綱^{ツツ}の 白髯^{シラヒゲ}の上ユ 涙垂^{ナミダ}り 嘆^{ナゲ}きノタバク

鹿兒^{シモノ}ジモノ 唯獨して 朝戸出の かなしき吾が子 アラタマノ 年の緒長く 逢見

すば 戀しくあるべし 今日だにも 言^{コト}どひせむと 惜みつつ 悲しび坐^{イマ}せ 若草の

妻も 子どもも 遠^{トホ}近^{チカ}に 多^{サハ}にかくみ居 春鳥の 聲のさまよひ 白タへの 袖泣^{スズナ}き

濡らし 手づさはり 別れカテニト 引め止め 慕^{ウラナ}ひしものを 大君の 命惶^{イサ}み 玉

椗^{ハシ}の 道に出て立ち 岡の崎 イ廻^{クム}る毎に 萬^{マン}度^{ツケヒ} かへり見しつつ 遙^{トホ}々に 別れし

來れば 思ふそら 安くもあらず 戀ふるそら 苦しきものを ウツセミの 世の人